山梨県北巨摩郡大泉村

谷戸氏館跡
甲ツ原遺跡第5地点
―遺構編―

県営圃場整備工事に伴う発掘調査報告書

1995

大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡大泉村

谷戸氏館跡
甲ツ原遺跡第5地点
ー遺構編ー

県営圃場整備工事に伴う発掘調査報告書

1995

大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

例　言

1．本書は平成５年度に実施された県営圃場整備事業に伴う谷戸氏館跡、甲ッ原遺跡第５地点の遺構編の報告である。

2．本調査、及び整理作業は峡北土地改良事務所との負担協定により負担金と、文化庁、山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。

3．調査の対象となった遺跡、調査期間、調査面積は以下のとおりである。

谷戸氏館跡（山梨県北巨摩郡大泉村谷戸1107番地）

平成５年６月７日～11月１日　6,648㎡

甲ッ原遺跡（山梨県北巨摩郡大泉村西井出9167番20他）

平成５年９月２日～12月３日　3,067㎡

4．本書の編集は伊藤が担当した。

5．発掘調査及び本書作成にあたって次の諸氏にご助言、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

小野正文　長沢宏昌　新津　健　野代幸和　服部英雄　保坂康夫　八巻與志夫　山本茂樹
山梨県教育庁学術文化財課　山梨県埋蔵文化財センター

6．本調査の出土品、諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。

凡　例

・本書使用地図は国土地理院発行の八ヶ岳、韮崎、谷戸及び大泉村発行１/5,000地形図である。

・遺構の名称は基本的に調査時のものをそのまま使用している。

・遺構･遺物の縮尺は以下のとおりである。

住居跡－１：60　炉・カマド－１：30　土坑－１：60　井戸跡－１：40　地下式坑－１：80　掘立柱建物跡－１：80

上記以外のもの、特殊なものについてはその都度縮尺を表記した。

・遺構断面図中の基準線脇の数字は標高を表し、特に指示のないものは同一図版中では同一の標高であることを示している。

・遺構平面図中の網がけは被熱赤変部分を表す他、１点鎖線は焼土の分布を表す。

・土層注記の色調は黒味の強いものから黒色→黒褐色→暗褐色→褐色→暗黄褐色→暗黄色を用い、それ以外に赤褐色、暗赤褐色を用いた。また、粘性、しまりは共に弱、やや弱、普通、やや強、強を用いたが、普通は特に表記していない。混入物については炭化物粒子をＣ、ローム粒子をＲ、焼土粒子をＦ、ロームブロックはＲＢと記号で表記し、その量は多、含、少、微と表記してある。

・その他必要に応じてそれぞれ表記しておいた。

目　次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経緯と経過 …… 1
　2　遺跡の位置と環境 …… 1
　3　調査の方法 …… 4
　4　調査組織 …… 4
Ⅱ　谷戸氏館跡の調査 …… 5
　1　遺跡の概要と調査の経過 …… 5
　2　調査の結果 …… 5
　　1）住居跡 …… 5
　　2）井戸跡 …… 6
　　3）地下式坑 …… 6
　　4）掘立柱建物跡 …… 7
　　5）土坑、その他の遺構 …… 8
　　6）溝状遺構 …… 9
　　7）テラス状遺構 …… 10
　3　まとめ …… 10
Ⅲ　甲ッ原遺跡第５地点の調査 …… 12
　1　遺跡の概要と調査の経過 …… 12
　2　調査の結果 …… 12
　　1）住居跡 …… 12
　　2）土　坑 …… 13
　3　まとめ …… 15
引用参考文献 …… 15

挿図目次

第 1 図　周辺の地形と遺跡の分布
第 2 図　遺跡位置図
第 3 図　谷戸氏館跡グリッド配置図
第 4 図　G・H－4区焼土跡　1・4号住居跡
第 5 図　2号住居跡　3号住居跡
第 6 図　5号住居跡　炉
第 7 図　1号井戸跡
第 8 図　2・3号井戸跡
第 9 図　1・2・3・6号地下式坑
　　55号土坑　ピット42
第 10 図　4・5・7号地下式坑
第 11 図　8・9・10・11号地下式坑
第 12 図　12・13号地下式坑
第 13 図　14・15・16号地下式坑
第 14 図　17・18号地下式坑
第 15 図　3・7号掘立柱建物跡
第 16 図　1・2号掘立柱建物跡
第 17 図　4・5号掘立柱建物跡
第 18 図　6号掘立柱建物跡
第 19 図　8・11号掘立柱建物跡
第 20 図　9・10号掘立柱建物跡
第 21 図　13号掘立柱建物跡
第 22 図　14・15・16・17・18号掘立柱建物跡平面図
第 23 図　12号掘立柱建物跡断面図
第 24 図　14・15・16・17・18号掘立柱建物跡断面図
第 25 図　土器コラージュ
第 26 図　1・2号集石
　　1～4・7・8・10・142号土坑
第 27 図　台地下部（中世居館部分）平面図
第 28 図　11・12・46・47・49・50・
　　74～76・141・143号土坑
第 29 図　56・57・102～104・106・107・131号土坑
第 30 図　68～73・97号土坑
第 31 図　67・77～79・105号土坑
第 32 図　80～94・99～101・133～137号土坑
第 33 図　108～121・123号土坑平面図
第 34 図　108～121・123号土坑断面図
第 35 図　1号溝跡水場状遺構平面図
第 36 図　1・16号溝跡断面図
第 37 図　甲ッ原遺跡の範囲と調査地点
第 38 図　甲ッ原遺跡第5地点グリッド配置図
第 39 図　1号住居跡　炉
第 40 図　2号住居跡
第 41 図　2号住居跡　カマド
第 42 図　3号住居跡　各施設
第 43 図　1号集石　1・4～6号土坑
第 44 図　5・7～9・11～13・16～18号土坑
第 45 図　10・19～23・25～27・29～31号土坑
第46図　28・35～47・90号土坑
第47図　48～54・56～59・61・62号土坑
第48図　60・63～68・70～80・87号土坑
第49図　81～86・89・91～94号土坑

付図 1　谷戸氏館跡遺構配置図
付図 2　甲ッ原遺跡第5地点西地区遺構配置図
付図 3　甲ッ原遺跡第5地点東地区遺構配置図

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経緯と経過

平成５年度県営圃場整備事業に伴い、村内では谷戸下第３工区７万㎡、西井出下第７工区1.6万㎡が開発される予定となった。この地区内では周知の遺跡として谷戸1107番地を中心に戦後の大規模な出普請により煙滅したと考えられていた谷戸氏屋敷跡が、西井出9167番20を中心に甲ッ原遺跡が所在している。村教育委員会では両遺跡の範囲の確認と内容の把握、遺存状況及び他の遺跡の所在の確認を目的として平成４年11月16日～12月２日にかけて開発予定地をほぼ網羅するよう試掘調査を行った。その結果、谷戸氏屋敷跡からは地下式坑や堀状遺構が検出され、尾根上を中心に中世～近世の遺構が濃密に分布していることが判明した（これらの成果からは『山梨県の中世城館跡』に記載のある近世の屋敷跡としての性格は鮮明でなく、むしろ中世に遺跡の中心があり、『甲斐国志』に出現する谷戸渕路守の居館との関連性が指摘でき、今回の調査に当たっては遺跡名を谷戸氏館跡として諸届出等に統一して使用した。）。また、甲ッ原遺跡からは縄文時代、平安時代の住居跡状の落ち込み等が検出され、当該期の集落が散漫ではあるが埋没していることが確認された。この結果、山梨県教育庁学術文化財課、峡北土地改良事務所と協議を行い、工事施工に当たり遺構の保護が不可能な部分について本調査を村教育委員会が実施することとなった。

以下文書の流れを示す。

平成５年１月６日　補助事業計画提出。
平成５年４月26日　補助金交付内定を受ける。
平成５年５月11日　補助金交付申請提出。（文化庁長官宛）
平成５年８月11日　同交付決定を受ける。
平成５年11月26日　補助金交付変更承認申請提出。（文化庁長官宛）
平成５年３月11日　同交付決定を受ける。
平成５年５月31日　埋蔵文化財発掘調査費に関する負担協定締結。（峡北土地改良事務所）
平成５年８月30日　埋蔵文化財発掘調査期間変更協議。（峡北土地改良事務所）
平成５年２月10日　埋蔵文化財発掘調査費に関する変更負担協定締結。（峡北土地改良事務所）

また、整理作業については基礎的な整理を当該年度中に実施し、報告書刊行に至るそれ以外の作業を次年度事業として実施している。

2　遺跡の位置と環境

大泉村は八ヶ岳の主峰赤岳を北限に南北に細長い地形となっている。地形的には標高

1 甲ッ原遺跡　2 谷戸氏館跡　3 宮地第2遺跡　4 宮地第3遺跡　5 古林第4遺跡　6 東姥神遺跡　7 姥神遺跡　8 天神遺跡　9 山崎第4遺跡　10 寺所遺跡　11 金生遺跡　12 豆生田第3遺跡　13 御所遺跡　14 方城第1遺跡　15 大和田遺跡　16 小坂遺跡　17 荒屋敷遺跡　18 中込遺跡　19 別当遺跡　20 郷坪遺跡　21 頭無遺跡　22 長坂上条遺跡　23 上平出遺跡　24 中原遺跡　25 沢の田遺跡　26 岩久保遺跡　27 石堂B遺跡　28 野添遺跡　29 持井遺跡　30 西原遺跡　31 青木遺跡　32 板橋遺跡　33 教来石民部館跡　34 根小屋遺跡　35 真原遺跡　36 黒沢遺跡　37 向原遺跡　38 御所前遺跡　39 川又南遺跡　40 薬師堂遺跡　41 清水端遺跡　42 屋敷添遺跡　43 宿尻遺跡

第1図　周辺の地形と遺跡の分布（S＝1/100,000）

44 大和田第3遺跡　45 大和田第2遺跡　46 東原遺跡　47 中村遺跡　48 中村第2遺跡　49 谷戸遺跡　50 前林山十三塚
51 城下遺跡　52 木ノ下・大坪遺跡　53 原田遺跡　54 別当遺跡　55 深草遺跡　56　小和田館跡

第2図　遺跡位置図（S＝1/25,000）

1,000m前後を境界に、以上の八ヶ岳山体部とそれ以下の山麓緩斜面部とに大きく二分される。この地点付近に端を発する多数の湧水により解析された南北に細長い尾根が多数発達している。また、標高700m～1,000mにかけては八ヶ岳岩屑流により形成されたと考えられる流山が点在している。今回調査された谷戸氏館跡はこの流山地形の下端から沖積面にかけて、甲ッ原遺跡は南北に細長く開析された尾根上に立地した縄文時代の集落跡の一つである。

第1図は八ヶ岳南麓台地における発掘調査を実施した主な遺跡の分布を示したものである。ほとんどが開発に伴う調査によるものなので、その地域の開発行為の多寡に影響は受けるものの縄文時代の遺跡の他、平安時代～中世の遺跡も多く見受けられる。これらの背景として大八幡荘の開発、当地域に設置されたと考えられている柏前牧の経営、更にこれらを背景とする地方豪族の台頭があったものと考えられる。第2図は周辺の発掘調査が実施された遺跡の分布である。ほとんどのものが県営圃場整備事業に伴うものである。

3　調査の方法

調査は両遺跡とも重機により表土を除去後、業者委託により公図系の座標に沿ったグリッドラインを設定し、各遺構の測量を実施した。測量は主に平板測量により行い、必要に応じて簡易遣り方を採用した。ベンチマークは圃場整備工事用の原点から移動した。

4　調査組織

平成5年度

教育長　藤森勇夫　社会教育係長　斉藤正一　調査担当　伊藤公明

平成6年度

教育長　藤森勇夫　社会教育係長　斉藤正一　調査担当　伊藤公明

調査参加者（敬称略、五十音順）

相古よしえ　浅川茂子　浅川達子　浅川たみ子　浅川ちず子　浅川久代　浅川日出子　浅川房子　浅川美千代　浅川保代　浅川洋子　進藤きく枝　千野あやめ　千野金子　千野松代　平井仁志　藤森かねよ　藤森佐喜子　藤森さち子　藤森里美　藤森八千代　細田絹代　三井種子　三井光恵

整理従事者（敬称略、五十音順）

浅川達子　浅川洋子　阿部恵子　折式田由紀　北村桂子　久保京子　河野敏弘　小松原千津　竿代愛也　鈴木晶子　鈴木文樹　園山千絵　中川　健　福井朋美　伏見さち子　藤本和哉　細田絹代

協力機関

峡北土地改良事務所　山梨県教育庁学術文化財課　山梨県埋蔵文化財センター

Ⅱ　谷戸氏館跡の概要

1　遺跡の概要と調査の経過

谷戸氏館跡は標高824m～829ｍを測る流山地形から延びる尾根上、及びその下部の沖積面に展開した遺跡である。後述するとおり、縄文時代から近世に至る時期の遺構が複合している。

縄文時代の遺構は土坑と住居跡、焼土跡が認められるが、これらの遺構は尾根上を取り巻くようにほぼ半円形に展開している。時期は遺構に伴うのは中期初頭から中期中葉までの限定された時期ではあるが、包含層からの遺物は前期初頭から前期終末、中期後葉、後期前葉のものが認められる。

平安時代の遺構は住居跡１軒のみで、集落としての体を成していない。

中世の遺構は沖積面に展開する集落もしくは居館部分（調査区外まで広く展開するものと考えられる。）と、尾根中央を斜めに横断する用水路状の水路跡（１号溝跡）、これに直行するような方向で検出された土塁を伴うと考えられる堀状遺構（10･16･18号溝跡）、地下式坑が尾根上に広く展開している。

近世の遺構は尾根上に広く展開しており、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑等が見られる。伝承の谷戸八右衛門に関する遺構がこれらに当たるものと類推される。

調査は平成５年６月７日から表土除去に着手し、同日から作業員を導入して調査に着手している。平成５年11月１日に現地での調査を終了。11月８日付けで長坂警察署長宛に埋蔵物発見届けを、同日付けで県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出している。

2　調査の結果

1）住居跡

縄文時代、平安時代の住居跡５軒が検出されている。何れも遺存状態が不良で、遺物が比較的多く検出された５号住居跡も出萱舘による地形改変の影響を受けて南半を欠失している。

１号住居跡は埋甕炉と考えられる埋設土器と焼土の分布から認定したもので、位置的には調査区壁にかかって住居跡東半のみが検出されたことになる。調査区壁の土層観察からは住居跡床面まで水路状の溝状遺構（２号溝跡）の氾濫により流出している他、柱穴等の施設もほとんどの部分が溝状遺構掘削に伴い欠失し、炉とその周辺の床面が若干遺存するに過ぎない。

２号住居跡は直径３ｍ弱の小型の住居跡で、略円形プランを呈する。尾根頂部の浅い埋没谷に立地し、クロボク層中のため確認が困難であったことから南半にトレンチを設定し範囲確認に努めた。炉は検出されていない他、柱穴も明確でなく、住居中央寄りに４本のピットが検出されている。縄文時代中期初頭の遺物が僅かに出土している。

3号住居跡は2号住居跡に複合し、これに一部を破壊されている。楕円形プランを呈するものと考えられるが、南半はクロボク層中に構築されており、その範囲が明確に掴めず、結果的にその除去に際して住居跡壁が流出した。炉は明確ではないが、住居跡中央南寄りに大きく2ヶ所の地山赤変部分があり、これが該当しようか。住居跡長軸にほぼ平行して中央に4本のピットが検出されている。中期初頭の土器が僅かに出土している。

4号住居跡は1辺3mほどの方形プランの平安時代の住居跡である。カマドは住居跡東辺南寄りに構築されている。周溝は南辺を除きほぼ全周する。住居跡南半の床面にはローム質土による貼り床が見られ、この貼り床下部から床下土坑状の浅い土坑が検出されている。

5号住居跡は試掘調査時に確認されたもので、長軸5.60mを測る楕円形プランを呈する。一部の主柱穴間を結ぶ間仕切り状の溝が検出されている。炉は当地域ではあまり類例のない添え石炉である。遺物は遺存状態の良好な個体が住居跡中央床面直上付近より5個体が纏まって出土している以外は散漫に分布している。

2）井戸跡

3基検出されている。1・3号井戸跡は石組井戸で、2号井戸跡は素掘りである。何れも調査の安全確保が困難なことから調査を途中で打ち切っている。1号井戸跡は確認面から1.5mほどまでは石組みで、以下は素堀となっている。3号井戸跡についても確認はできなかったが同様な構造が推定できよう。2号井戸跡は廃絶に伴い石を投入されたものと考えられる。

1号井戸跡は位置関係から4もしくは5号掘立柱建物跡に伴うものであろう。2・3号井戸跡は位置関係から13号掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。また、2号井戸跡に伴うと考えられる掘り込みから、柱穴等は検出されなかったものの、何らかの施設が伴ったものと考えられる。また、この掘り込みのプランが2号井戸跡に、より規制された形態であることから3号井戸跡→2号井戸跡の変遷が推定される。

3）地下式坑

18基確認されている。8・9・10・13号以外は天井部が崩落している。これらの内13号は縦坑のプランが明確につかめず、溝状遺構と逆堀になったが閉塞が組まれた状態だったと考えられる。8・9・10号については閉塞が崩れて縦坑の下部まで落ち込んでいるのが確認された。また、10号の閉塞に使用されたと考えられる石の中には1組の五輪塔とヒデ鉢が含まれており、地下式坑の機能を考えるとき示唆的である。

地下室の形状を見ると、長方形を主体とするが、正方形に近いものとして5・10・12号が挙げられる。また、縦坑と地下室の形状からは縦坑が地下室の短辺側に接続するものを主体とし、客体的に長辺側に接続するものがある。接続の仕方を見ると、例外的に地下室底面まで縦坑が達している例として8号が、地下室よりも深く縦坑が掘られたものとして4号が挙げ

られるが、それ以外は地下室の中位～下位で段差を持って縦坑に接している。それ以外に縦坑にステップが掘られているもの（８号）、地下室に施設を持ったもの（６号）、縦坑が確認できなかった（後世の撹乱によるものと考えられる）もの（３号）等バラエティーがある。

４）掘建柱建物跡

18軒を認定している。この中には調査時には確認できなく、後に整理段階で認定したものを含んでいる。また、台地下部の中世の居館を想定している部分についてはあまりにも柱穴状のピットが密集しており、その認定が不可能であった。但し、礎石と思われる加工された礫が検出されていることや、遺物として日常雑器が検出されていることから居住域であったことは明らかである。この部分については、調査後の土地改良事務所との協議により埋設保存が図られている。以下主な建物について記述する。

１号建物は基本的に２間×４間の建物に、東側に庇がついた構造が想定されようか。この庇状の柱穴の並びは明確ではないものの北側にも見受けられる。また、明確ではないが若干軸のずれた柱穴の並びが見受けられ、複合している可能性もある。

２号建物は１号建物と若干主軸がずれるが、ほぼ同等の主軸方向を示し、柱穴の規模も類似している。遺構間の空間距離が小さいことから同時存在したものと言うよりは先後関係を有して存在したものであろう。柱間は１間×３間であるが、柱穴間距離が大きく、規模的には１号建物を凌駕する。また、東側を除く各辺に庇状の柱穴が観察される。

４号建物は南半が調査区域外に延び（工区以外への水利確保のため、仮設の用水路を掘削する必要があり、最も遺構に影響が少ない場所を選定したが、その仮設水路掘削により調査が不可能となった。）、全体の規模に不明な点を残すが、２間×４間の構造であろうか。全般にこの建物に属する柱穴は規模が大きいのが特徴である。この内53号土坑中から石臼が完形で出土している。礎石として転用されたものであろうか。また、帰属が明確ではないが54号土坑は浅い皿状の土坑で、底面が地山よりも硬化している。馬屋状の機能が想定されようか。

６号建物は当初複合した２ないし３軒の建物と考えていたが、時期が複合しながら１軒の建物を拡張したものと判断している。なお、この建物の軸に沿って柵列と考えられるピット列が南西隅で断続的に検出されている。

８号建物は２間×４間に西側に庇を付加した構造であろうか。建物東寄り中央に地山の赤変が検出され、調理施設が設置されたものであろうか。小規模建物の典型例であろう。７・９・10・11・12号建物も同様の構造であろうか。

13号建物は整理段階で認定したものであるが、本遺跡中最大規模の建物である。柱穴の規模も大きいのが特徴である。柱間は１間×３間と考えられ、それに西側に庇を付加した構造であろうか。また、柱穴に複合が見られることから一部は改変されたものと考えられる。

14～18号建物は根拠は消極的であるが、ピットの配列の規則性から整理段階で認定したも

のである。16·17号建物は8号建物に構造・規模共に類似するものであろうか。14·18号建物はこれらよりやや大きな規模を想定している。

5）土坑、その他の遺構

紙面の都合から一部の記述に止める。

縄文時代の土坑として想定されるものに中期中葉の底部から口縁部まで、約1/4が遺存する土器が出土した1号土坑がある。また、土坑の認定はできなかったが、土器の伴った焼土跡があり、中期初頭に位置付けられる。その他については縄文時代に明確に位置付けられるものは存在しない。

平安時代の住居跡が検出されているものの、確実に当該期に帰属すると判断できる土坑は認識できなかった。存在しないのではなく、認識できないのである。これはこの遺跡に限ったことではない、この地域の当該期の小規模遺跡に共通の課題であろう。

中世～近世に帰属する土坑は遺物の出土が少ない上、建物跡の柱穴との区別も判然としない部分がある。また、独立したピットとしたものにも特徴的な遺物が出土したものがあり、ここで扱うこととする。

H·I·J－8～10区に展開する土坑及びピットと認識したものは多くのものが掘立柱建物跡を構成する柱穴と考えられるが、19·20号土坑のように極めて大きな土坑も含まれる。これらの覆土中には割られた石材が多く含まれ、居館、もしくは集落域を造成するに際し、邪魔な露出した岩を割り取った穴と考えるべきであろう。

H－9区の台地肩部に位置する56号土坑は14世紀代と考えられる常滑の大甕の破片が出土し、当該期の遺構であろうか。伝世品としての可能性も考慮される。57号もこれに隣接し、同時期の所産であろうか。また、これらの土坑に近接して自然礫の集石上面から無文銭が一塊りとなって183点、その他に8点が検出されている。この一塊りになって出土したものは有機質の、箱等に入れられて埋納されたものと考えられる。

H－7区を中心に展開する68～73号土坑は72号土坑から古銭が出土していることから中世の墓坑的な性格の土坑であろう。主軸を揃えた（70号土坑はこの主軸に直行して）長方形プランを呈している。1号溝跡埋没後に70号土坑が構築されている。近接する97号土坑は1号溝跡の埋没後に構築され、16世紀代と考えられる内耳土器を伴っている。平面プランは明確に掴めず、これらの土坑との層位的関係も検証できなかった。

H－5·6区、H·I－5区に位置する74～77号土坑は桶状の底部圧痕が明確に検出されており、肥桶等の機能が想定されようか。時期不明。また、地点は離れるもののE－3区に位置する117号土坑も桶状の圧痕が明確であり、同様な遺構であろうか。

I·J－5区の台地斜面部を中心に展開する80～94、99～102号土坑等はプランの明確なものも存在するものの乱雑に掘られた印象のものも多く、その性格、機能については今後検討

する必要がある。遺構の帰属する時期は不明であるが、白色粘土の露頭が見られることから粘土採掘が行われた可能性もある。

D・E－2区を中心に展開する108～114号土坑は形態、規模等に類似が見られ、同様の機能、目的を持って掘削されたものと考えられる。近世以降の焙烙が出土する他、大型の石鉢が出土していることから近世以降の所産であろう。

集石遺構と認定したものが3基ある。1・2号集石はF－10区に位置する。1号集石は下部遺構が明確ではなく、拳大～人頭大の礫が乱雑に集積されている。2号集石は直径1m弱の不整円形プランの土坑の中に人頭大の平石を敷き詰めるような形で検出されている。3号集石はI・J－9区に位置し、1辺1.6mほどの略方形プランの土坑の覆土中から検出されている。人頭大の礫を中心に拳大の礫が投入されていた。周辺に規模が異なるものの同様のプランの土坑が散在し、礎石状の機能も考慮する必要があろう。

G－8区に位置する42号ピットは6号地下式坑の天井部上面に位置し、6号地下式坑の調査を優先した結果、ピットの崩落が進み十分な記録が残すことができなかった。このピットからは鉄鍋が2個体以上入れ子状に出土しており、当地域では類例の知られていない埋納遺構となっている。今後遺物の形態分析を進め、編年的な位置を明らかにしていきたい。

6）溝状遺構

調査時に22条を認定しているが、整理段階で一部欠番が出ている。

1号溝跡は調査区を北西～南東に縦断するもので、ホールピットの発達等から実際に水流のあったものである。その延長は調査区内だけで100mを越す。この遺跡を最も特徴付ける遺構の一つである。I・J－8・9区を中心とする中世の居館、もしくは集落を想定している部分では人頭大の礫を組んで水場状遺構を構築している。この水場周辺には数箇所の焼土跡が検出されており、配列等は不明確であるがこの水場に伴った上屋の存在も想定できようか。居館部分への導水を兼ねながらこの遺跡の東部に展開すると考えられる水田（恐らく新田開発に伴い、水利権の問題等から新たな用水路を構築する必要があったものであろう。）への導水を一次的目的として構築されたものと想定している。この遺構は規模が大きい上、調査区を縦断することから土層確認を目的としながら調査区内の通路確保のために6カ所のベルトを残して掘り下げを行った。掘り上がりの形状の観察からF・G－6区のベルトを挟んで、その上流部は急峻なV字状の断面を呈するのに対しその下流側はU字状の断面を呈している。調査は実施できなかったもののこのベルト中に水を堰き止める何らかの施設の存在したことが明らかである（圃場整備施工に際しこの部分は破壊に至らないことから敢て調査を実施していない。）。遺物は下流の水場遺構に伴い16世紀代の丸皿、端反皿、灰釉陶器等が出土していることから下限をその時期に設定しておきたい（一部これを遡る時期の遺物も出土しているが、伝世品であった可能性も考慮される。今後検討を進めたい。）。

2～9、17号溝跡は水田経営に係わる水路と考えられ、近世以降の所産である。

10·16号溝跡と認定したものは同一の遺構で、1号溝跡埋没後に掘削されたものである。E·F－7区で田普請による撹乱により断絶するもののほぼ直線的に構築されている。これに平行して18·20号溝跡（同一の遺構と判断している。）、これに接続する19·21·22号溝は一連の遺構と考えられ、平行に走る10·18·20号溝の関係、21·22号溝の関係はその位置関係及び溝跡の覆土堆積からその間隙に土累の存在を想定できよう。19号溝跡は虎口状の施設になるのであろうか。即ちこれにより、1号溝跡の掘削、埋没の後、土累を伴った10·18号·21·22号溝跡が掘削されたことになる。

11号溝跡は湖れ谷の延長上にあり、自然地形と認識している。

12号溝跡は尾根の裾をこれに平行に走り、10·18号溝·21·22号溝と同様の目的で掘削された遺構であろうか。

7）テラス状遺構

旧水田面と考えられるテラス状の平坦面が検出されている。共伴する遺物が無く構築の時期は不明である。

1号テラス状遺構はA·B－8区に位置する。東西8.2mを測り、南北は現存で2.9mを測る。ローム層中に水平面が構築されている。

2号テラス状遺構は1号テラス状遺構に東接して検出されている。1号テラス状遺構と同等規模を有するものであろうか。

3号テラス状遺構はB·C－4区に位置する。範囲は明確ではないが、ローム層中に水平面が構築されている。

3　まとめ

『山梨県の中世城館跡』で煙滅したと記載された本遺跡は非常に遺存状態が良く、多大な成果を挙げることができた。縄文時代、平安時代の小規模集落の調査もさることながら、ここでの成果の大きなものは中世～近世の遺構にある。

中世の居館、もしくは集落部分と考えられる部分と新田開発に係わると考えられる巨大な溝跡、その埋没後に構築される当時の政治状況を如実に示す土累を伴ったと考えられる堀状の遺構、『甲斐国志』に現れる谷戸渕路守宅跡に関する遺構であろうか。13号地下式坑の検出状況からこれの破壊、埋没後に構築される地下式坑。地下式坑の分布は流山上部に存在する村立泉中学校グラウンド造成時や同校屋内運動場建設時にも検出されている（調査は行われていないが、施工時の写真が残されており、明らかに地下式坑と認められる。）ことからかなり広範囲に及ぶことが確認されている。台地全面から流山上部にまで大きく展開する中世の遺構群、これらの遺構はほとんどが出土遺物等から16世紀代で変遷したと考えられる。また、

周囲に分布する逸見神社や史跡谷戸城跡、棒道、あるいは『高白斎記』に見られる「矢戸の御陣所」との関連等十分な検討が必要なものと考えられる。

また、出自は明らかではないが、近世初頭に水利権を安堵された土豪と考えられる谷戸八右衛門（代々世襲される名称である。）に関する伝承ではこの尾根上に屋敷を構え、度々火災にあったというものがある。水利権を巡るトラブルから放火にあったのであろうか。そのためなのか尾根全面に当時の遺構が展開していることも明らかになった。その中の一部には小規模な建物も存在し、これは一時落剥した谷戸八右衛門の伝承に符合するものであろうか。

本報告は紙面の都合から遺構編のみとなったが、今後なるべく速やかに遺物編を刊行し総合的な分析に耐えられるよう努めたい。

Ⅲ　甲ッ原遺跡第５地点の調査

１　遺跡の概要と調査の経過

甲ッ原遺跡は大泉村の南端、甲川と油川に挟まれた比較的幅の広い尾根上に立地した遺跡で、南北900ｍほどの広がりを持って展開している。この遺跡の一部を県道八ヶ岳公園線が通過しながらも農業振興地域等の法規制により、開発をほとんどを経ないで保存されてきた。しかし、この県道のバイパスがこの遺跡を縦断するように計画され、実際に平成元年より工事に着手されると、これを契機に周辺の開発が活発化してきた。そこで調査区を区別するためバイパス用地を第１地点と呼称し、以下発掘の届出の順に第２～第７地点として発掘調査等を実施した。各調査地点の開発目的、調査年度は以下のとおりである（第37図）。

第１地点　県道八ヶ岳公園線西井出バイパス建設　平成元年～６年度調査

第２地点　小規模工場新築　平成３年度調査

第３地点　テニスコート造成　平成３年度調査

第４地点　工事用資材置場への農地転用　平成３年度試掘調査

第５地点　県営圃場整備事業（本報告）

第６地点　個人住宅新築　平成５年度調査

第７地点　個人住宅新築　平成５年度調査

調査地点は標高762ｍ～772ｍを測る遺跡の南端部にあたる。調査は平成５年９月２日から重機により表土除去を開始し、11月４日から作業員を動員して調査に着手している。現地での調査は12月３日に終了し、12月６日付けで長坂警察署長宛に埋蔵物発見届を提出し、同日付けで県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出している。

なお、調査に際し、県道八ヶ岳公園線を挟んで西地区と東地区に分けてグリッドを設定した。本報告に際し整理し統一の名称を設定する予定であったが、遺物の注記の混乱等が懸念されることから今回は調査当時のグリッド名称を用いている。将来的には遺跡全体を対象とした名称の設定をしなければならないと考えている。

２　調査の結果

１）住居跡

縄文時代及び平安時代の住居跡が３軒検出されている。

１号住居跡は直径５ｍ強の不整円形プランを呈している。住居跡壁の立ち上がりは鍋底状に立ち上がり、確認面からの深さは15cmほどを測る。覆土は住居跡中部へ緩やかに流れ込み、レンズ状を呈している。炉は住居跡中央部に石囲い炉が見られる。この炉は方形プランで一辺約50cmを測り、南西コーナー部に僅かに地山の赤変が見られる。ピットは全部で８本検出

されているが、主柱穴は基本的に五本であろう。

2号住居跡は一辺4ｍ弱の略方形プランを呈し、覆土厚は確認面から最大35cmを測る。カマドは東辺に2基構築されている。周溝は東辺の北側から南辺まで断続的に構築されている。柱穴は北東隅に1本、北西隅に2本の小規模なピットがあり、これが該当しようか。住居跡南半では明確なものは検出されていない。その他の施設としてカマド前面に土坑上面に貼り床された床下土坑がある他、住居跡南西隅に偏在して貯蔵穴様の円形土坑が構築されている。遺物はカマド周辺及び住居跡南半に集中して検出されている。

3号住居跡はカマドが構築されていないことや、この地域の一般的な住居形態の方形プランとならないこと、または鍛冶遺構に伴うと考えられるスラブが検出されていることから、いわゆる住居跡ではなく工房と考えられるが、ここでは便宜的に住居跡として記述を進める。規模的には5.57ｍ×5.07ｍを測る隅丸長方形プランを呈し、壁高は12cmを測るのみである。周溝は確認された範囲では南西辺の一部を除き連続してみられる。柱穴は住居跡南東隅では検出されなかったものの、他の3コーナーから平面プランは小さいものの深さ50cmを超えるこの地域としては極めて深い柱穴が穿たれている。この建物そのものの特殊な機能、または上屋構造を窺わせる。その他の施設として鍛冶滓の検出されたピット2、同じく鍛冶滓が覆土の中位から検出されている長軸99cm、短軸72cmを測る袋状の土坑となるピット6がある。

甲ッ原遺跡の集落の全体像は県道バイパス工事に伴う遺跡中央を縦断するような調査区の設定や、その周辺の宅地開発等による調査区の設定であるため、未だ十分に把握されておらず、特に平安時代の集落の展開は第1地点で1軒、第3地点で1軒、この第5地点で2軒、第7地点で住居跡の認定はしていないものの可能性として1軒が調査されているのみである。調査面積の総計は15,000㎡近くになるが、5軒ほどしか検出されていず、しかもかなり分散して分布している。また、注意を要するのは第1地点C区住居跡例、第3地点2号住居跡例では鉄滓が検出されており、今回の3号住居では鍛冶滓が検出されていることである。今後の調査事例の蓄積を待つ必要はあるが特異な職能集団が居住した可能性が考慮される。

2）土　坑

紙面の都合から一部の記載に止める。

西地区G－10区を中心に18基の土坑が集中している。これらの中には規模的に小さいものや浅いものも含まれるが、4・7・9号土坑は何れもしっかりした掘り込みを持ち、底面も水平に構築されている。縄文時代中期終末の土器を包含したもので、墓坑的な性格が想定できようか。19号土坑からは土圧で細片となっているが、平底の底部に羽状縄文を地紋として施紋される深鉢の胴下半部が検出されている。胎土に繊維を含まないが、縄文前期中葉に位置付けられようか。22号土坑は直径110cmほどの略円形プランを呈し、確認面からの深さは175cmを測る極めて深いものである。坑底付近から若干浮いて小児頭大の礫が検出されている。

覆土は土坑上位まで一気に埋め戻されている。同様の規模のものが第3地点からも2基検出されている。

C～E－2～5区付近は第3地点から連続する尾根上ではあるが、農地の造成に伴い大きく切り土された部分であることから遺構の残りが良好ではないことが想定され、調査の期間短縮を図るため面的な調査を行わず、重機によりトレンチを設定し精査したものである。その結果、予想以上に遺存状態が良く、土坑が11基検出されている。この内28号土坑は上面プランが長軸135cm、短軸106cmを測る楕円形プランで、底部は長軸77cm、短軸35cmを測る長方形プランを呈する。同様の土坑として36·56号土坑が検出されており、同様の機能のものと考えたい。また、上面プランは異なるものの、略長方形、もしくは長楕円プランの土坑が第3地点、及び本調査においても45·62·67·70·79号土坑等が調査されている。これらについては今後検討しなければならないが、同様な機能であろうか。

36号土坑は先述の28号土坑に類似し、上面プランは長軸122cm、短軸91cmを測る楕円形プランを呈し、底部は長軸55cm、短軸40cmを測る略長方形プランを呈する。深さは89cmを測る。56号土坑の上面プランは長軸100cm、短軸86cmの楕円形プランで、底部は長軸73cm、短軸52cmを測る長方形プランを呈している。深さは119cmを測る。

48号土坑は長軸156cm、短軸130cmを測る不整楕円形プランを呈し、深さは28cmを測る。坑底に底部施設状の小ピットを伴う。土坑上面付近から土器大型破片が出土し、甕被り葬を想定させる。縄文時代前期後葉。60号土坑は長軸146cm、短軸127cmの略楕円形プランを呈する深さ29cmの土坑である。坑底から若干浮いた状態で正位で胴下半部を欠した深鉢が出土している。やはり甕被り葬を想定させる。縄文前期後葉。

58号土坑は東半が調査区外であるが、直径2.7m前後の不整円形プランを呈するものと考えられ、底面はほぼ水平に構築される。規模が小さく、焼土等も検出されていないものの小規模な住居跡の可能性も残す。

45号土坑は187cm×96cmを測る不整形プランを呈し、確認面からの深さは18cmを測る。2基の土坑の複合の可能性はあるもののここでは単独の土坑と判断している。62号土坑は長軸208cm、短軸103cmを測る長楕円形プランを呈し、確認面からの深さは13cmを測る。67号土坑は157cm×112cmの不整形プランを呈し、確認面からの深さ42cmを測る。70号土坑は153×94cmを測る不整形プランを呈し、確認面からの深さは18cmを測る。底部に2基の少ピット（深さ31cmと26cmを測る。）を伴う。79号土坑は長軸156cm、短軸88cmを測る不整長方形プランを呈し、確認面からの深さは56cmを測る。南側の壁はオーバーハングしており、覆土堆積も底部付近の三角堆積の後確認面まで一気に埋没している。

3　まとめ

甲ッ原遺跡は現在までの調査により県内でも屈指の縄文時代の遺跡であることが明らかになりつつある。しかし、その実態は主要な部分が遺跡の中央を縦断するトレンチのような調査区であるため、不明の部分が多いと言わざるを得ない。このような中、今回の調査によりこの遺跡の南端部分が確認できた意味は大きいものといえる。また、今回本調査に至らなかった尾根下部の沖積面についても試掘調査が実施されており、当時の生活の痕跡が見受けられず、集落域の限界を明らかにできたことも併せて大きな成果といえよう。

さて、第38図に第３地点以南の遺構の分布を示したが、縄文時代の遺構は南に行くほど遺構の分布が薄くなる傾向にある。現在までの所、本調査１号住居跡が南限の住居跡となりそれ以南は例外的に西地区Ｇ－10区の中期末葉の土坑群を除き土坑の分布も散漫になっている。この１号住居跡は第１地点を含めてほとんど検出例のない新道式期の住居跡であることより、今後の調査により当該期の集落の実態が解明されるものと期待される。また、西地区Ｇ－10区の中期末葉の土坑群は墓坑的な性格が想定され、その時期のみ墓坑が集落域から離れて構築された様子が読みとれる。このような事例は居住域から離れて墓域だけが検出された川又南遺跡例、墓域というよりも単独で当該期の埋設土器が検出された湯沢遺跡例、石堂Ｂ遺跡例に通じるものであろうか。今後の事例の蓄積に期待したい。

繰り返しになるが今回の調査は遺跡の中核部から離れていることにより、遺構、遺物共少なかったが、一部分だけではあるが集落域の限界を明らかにすることができたことに最大の成果があったと評価したい。

引用参考文献

山梨県教育委員会　1986『山梨県の中世城館跡』

山梨県教育委員会　1989『金生遺跡Ⅰ（中世）』

山梨県教育委員会　1994『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』

山梨県教育委員会他　1992『甲ッ原遺跡Ⅰ－発掘調査概報－』

大泉村教育委員会　1994『甲ッ原遺跡第６地点・第７地点』

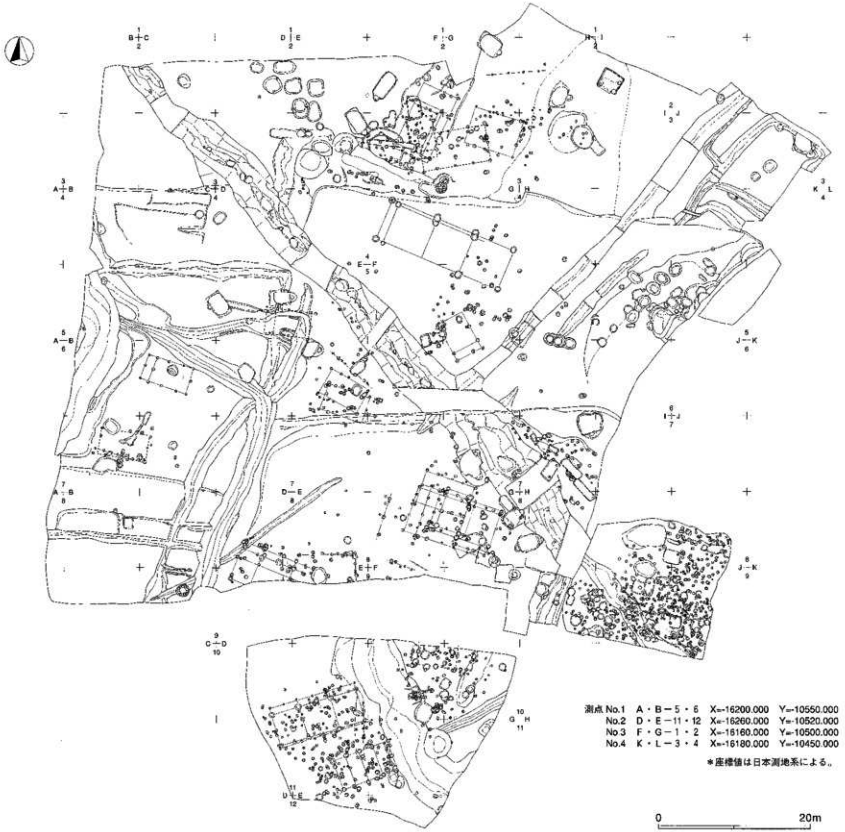
佐藤八郎校訂　1968　『甲斐国志』　大日本地誌大系44

高根町教育委員会他　1988『石堂Ｂ』

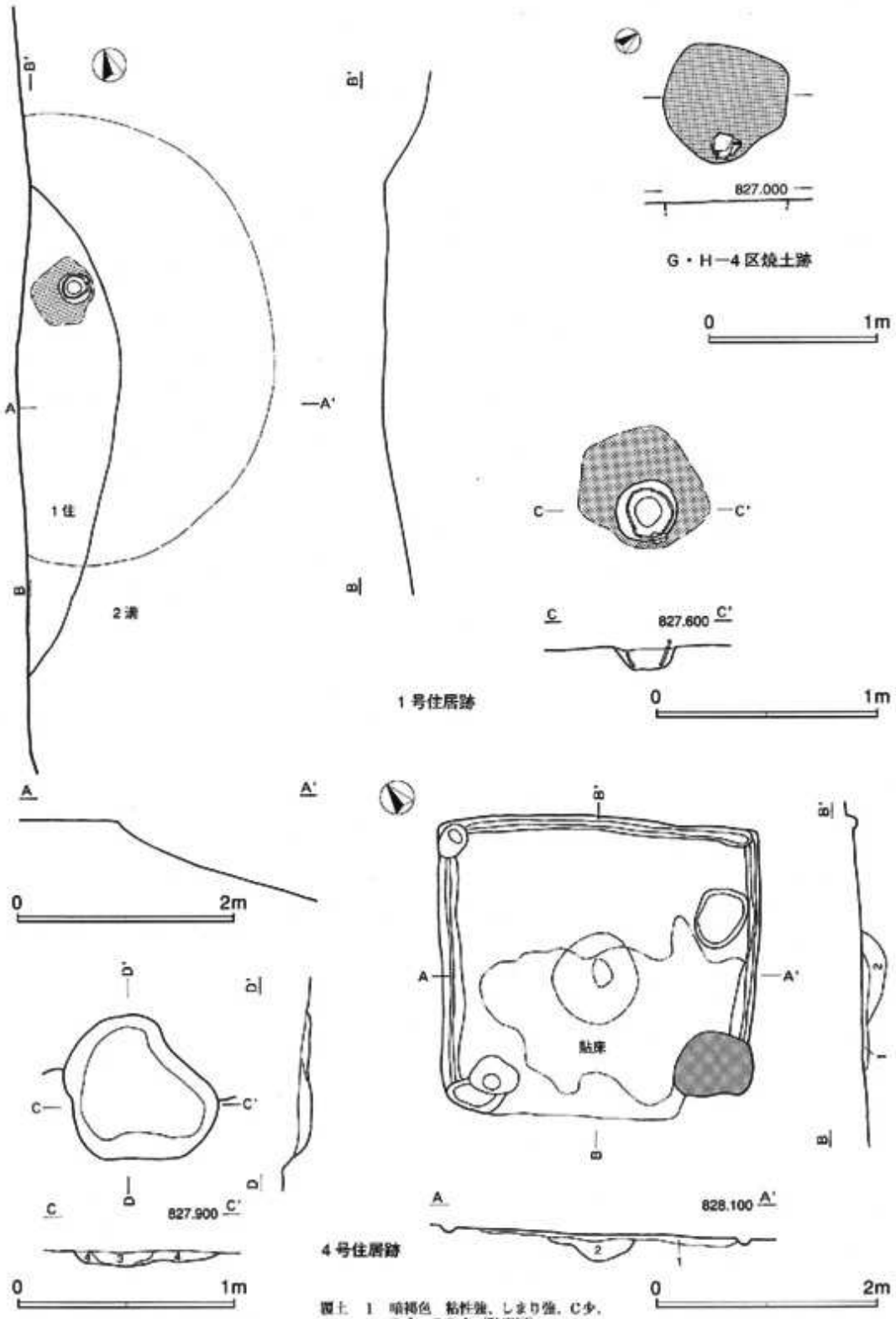
高根町教育委員会他　1987『西原・石堂Ｂ』

須玉町教育委員会他　1987『川又南遺跡』

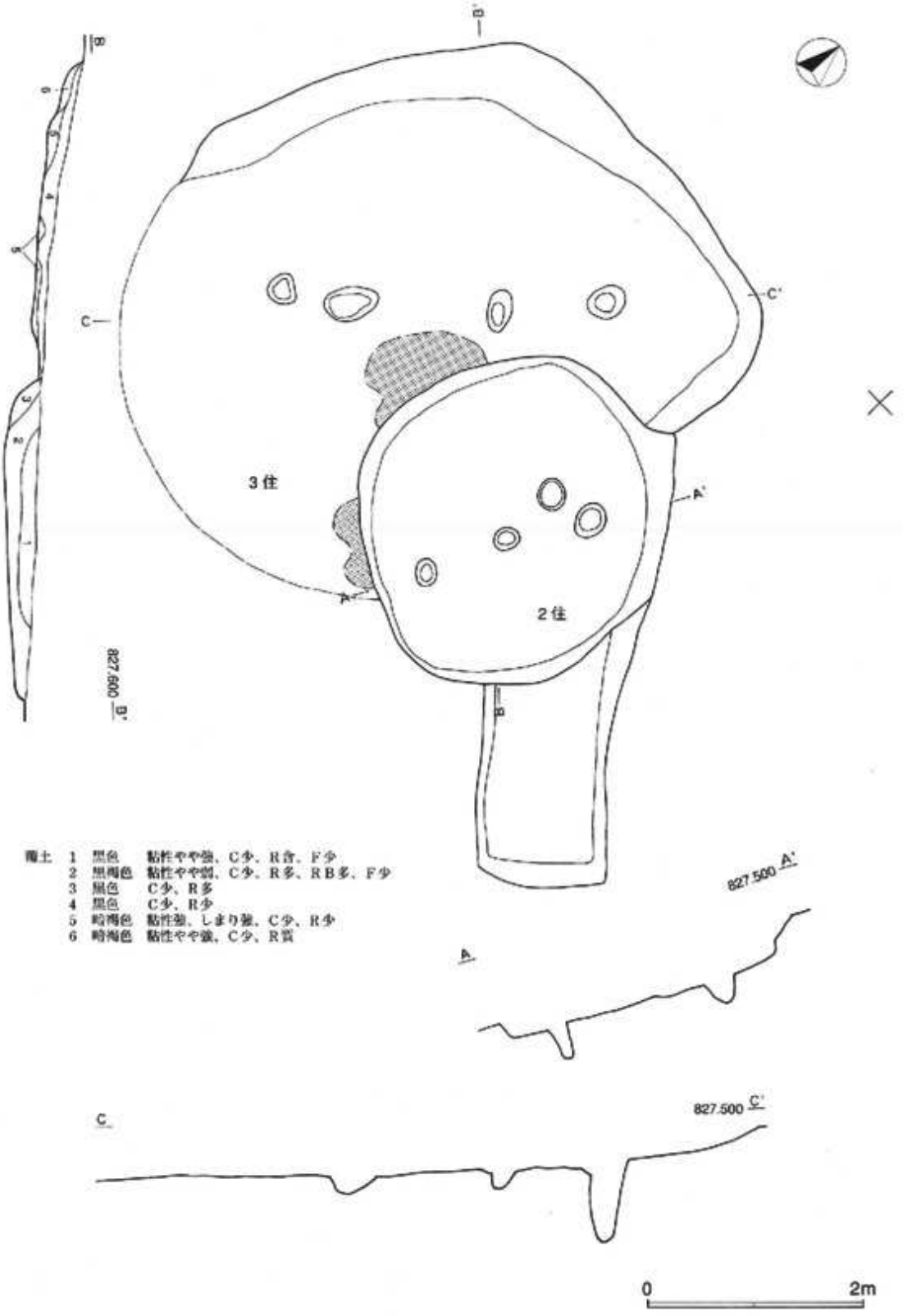
昭和42（1967）年村立泉中学校体育館（伝谷戸淡路守宅跡周辺）造成時地下式坑検出状況



第３図　谷戸氏館跡グリッド配置図（S＝1/500）



第4図　G・H－4区焼土跡（S＝1/40）　1・4号住居跡（＝1/60・1/30）



覆土　1　黒色　粘性やや強、C少、R含、F少
2　黒褐色　粘性やや弱、C少、R多、RB多、F少
3　黒色　C少、R多
4　黒色　C少、R少
5　暗褐色　粘性強、しまり強、C少、R少
6　暗褐色　粘性やや強、C少、R質

第5図　2号住居跡　3号住居跡（S＝1/60）

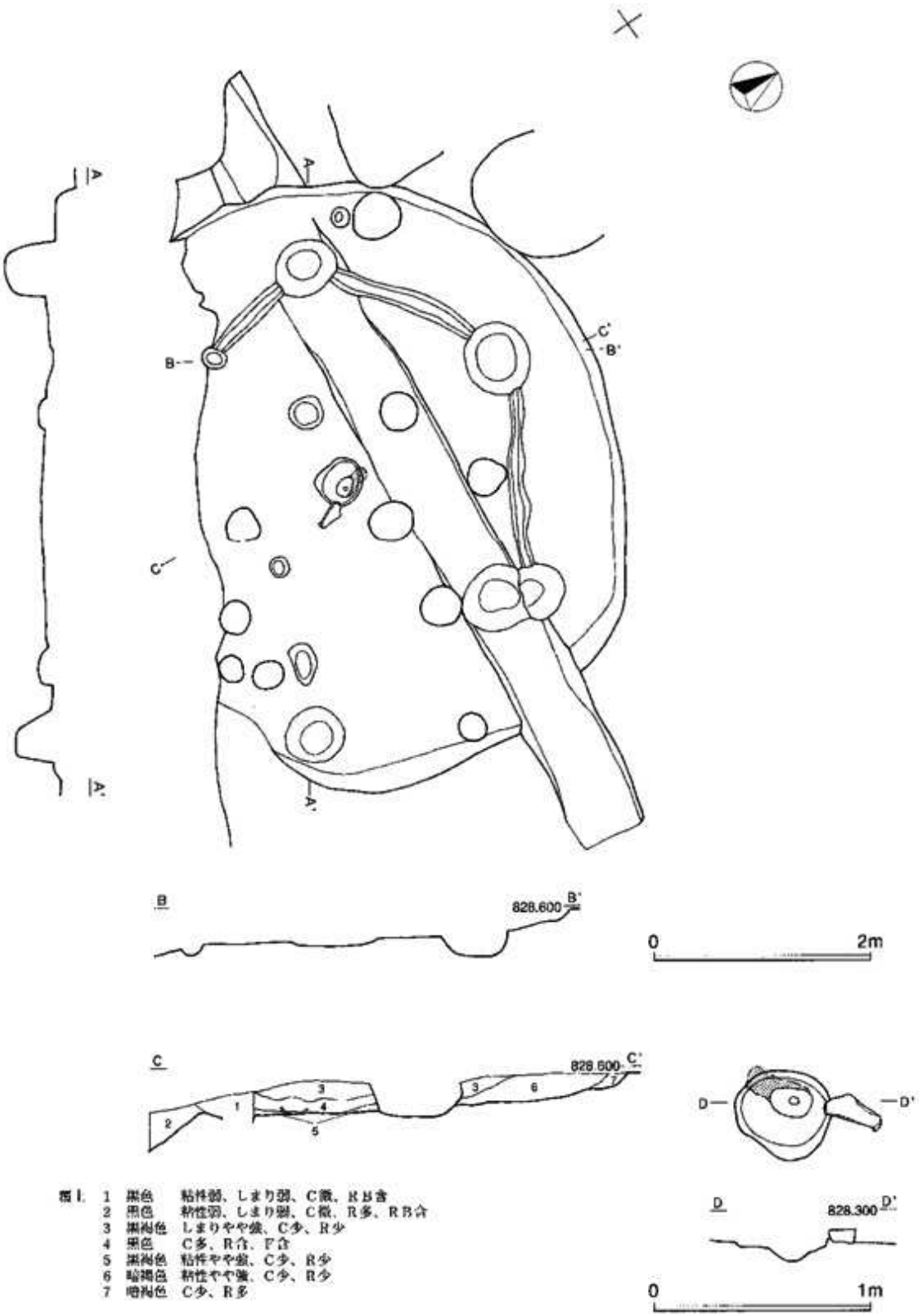
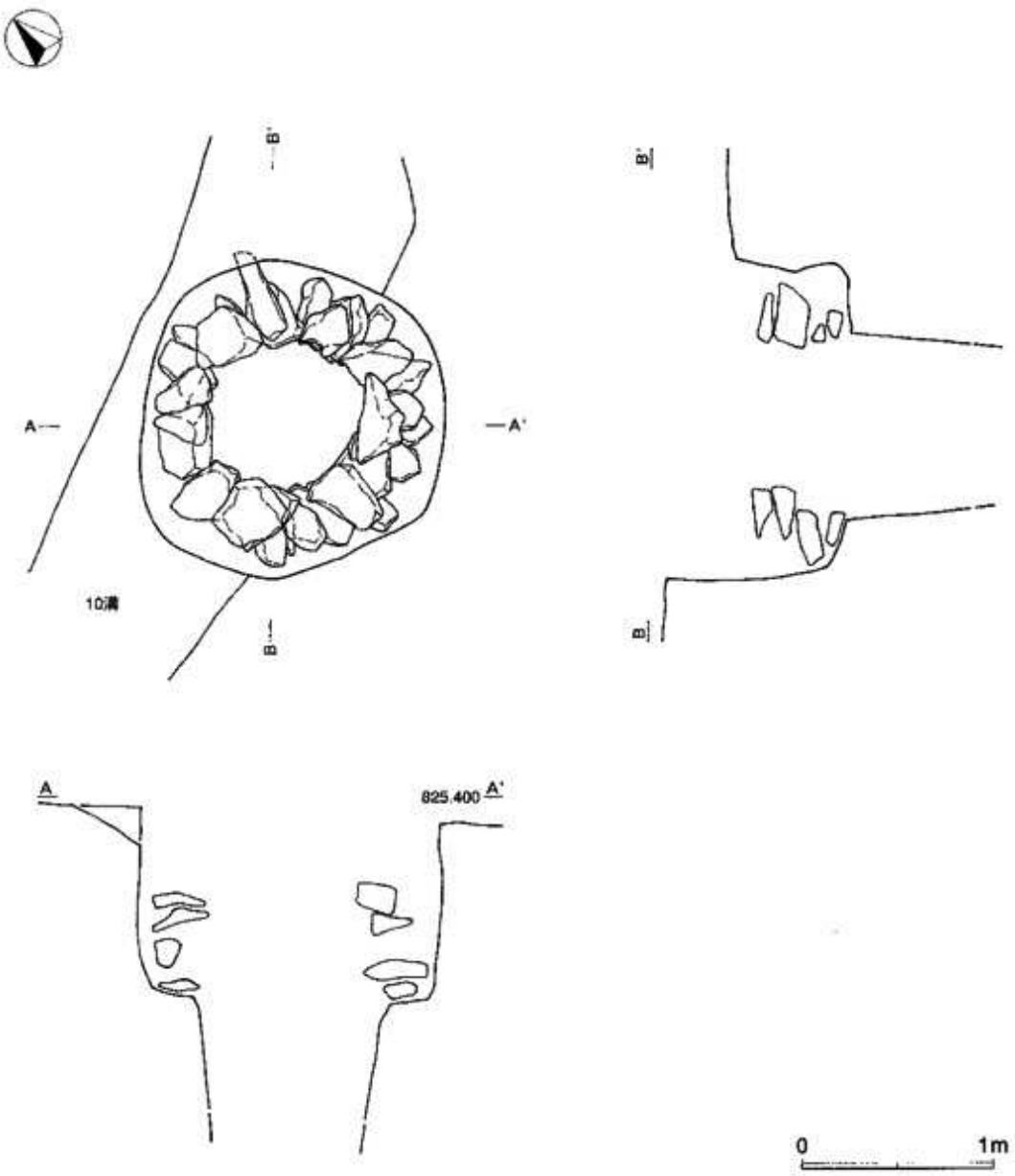
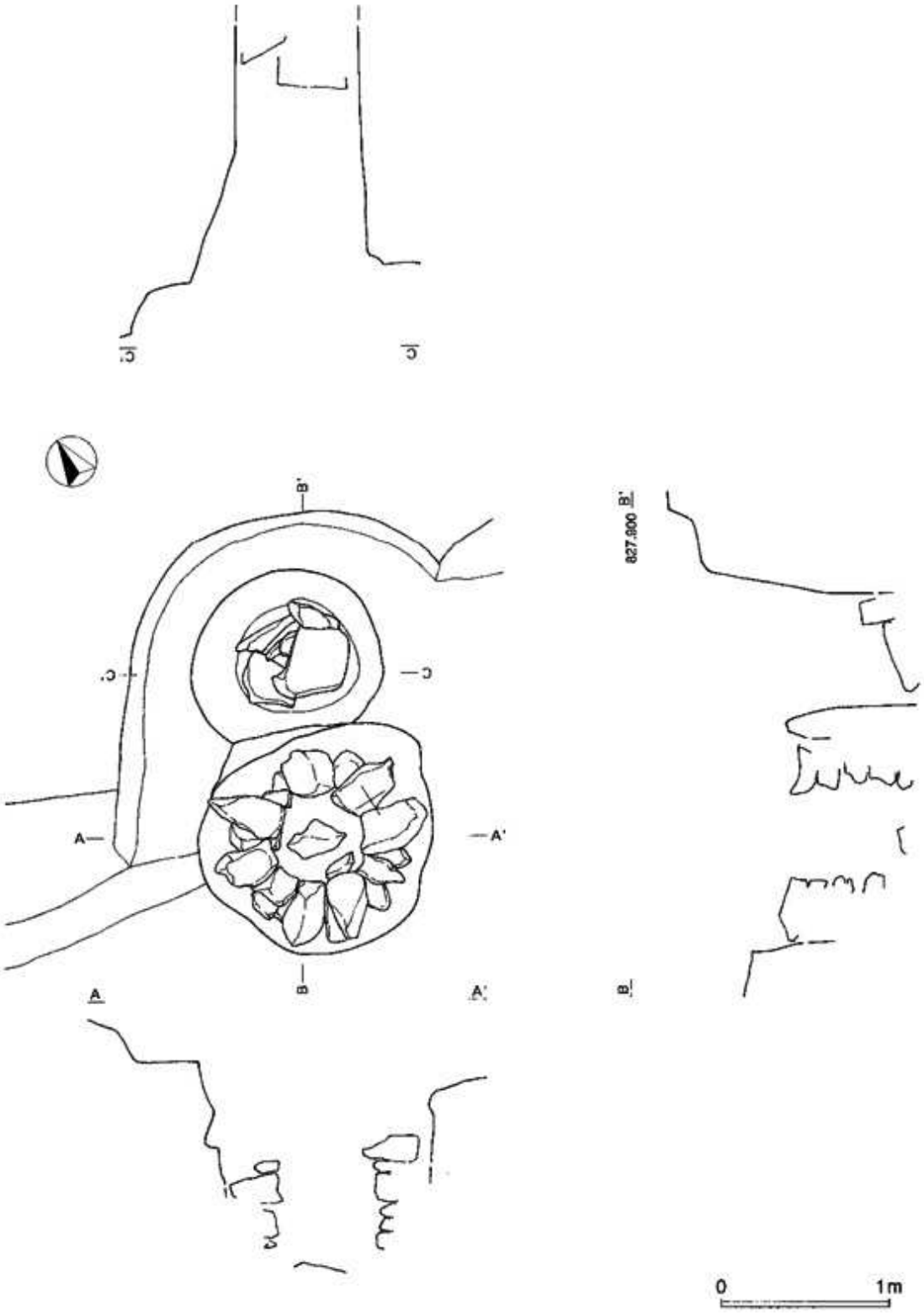


表1. 1 黒色　粘性弱、しまり弱、C微、RB含
2 黒色　粘性弱、しまり弱、C微、R多、RB含
3 黒褐色　しまりやや強、C少、R少
4 黒色　C多、R含、F含
5 黒褐色　粘性やや強、C少、R少
6 暗褐色　粘性やや強、C少、R少
7 暗褐色　C少、R多

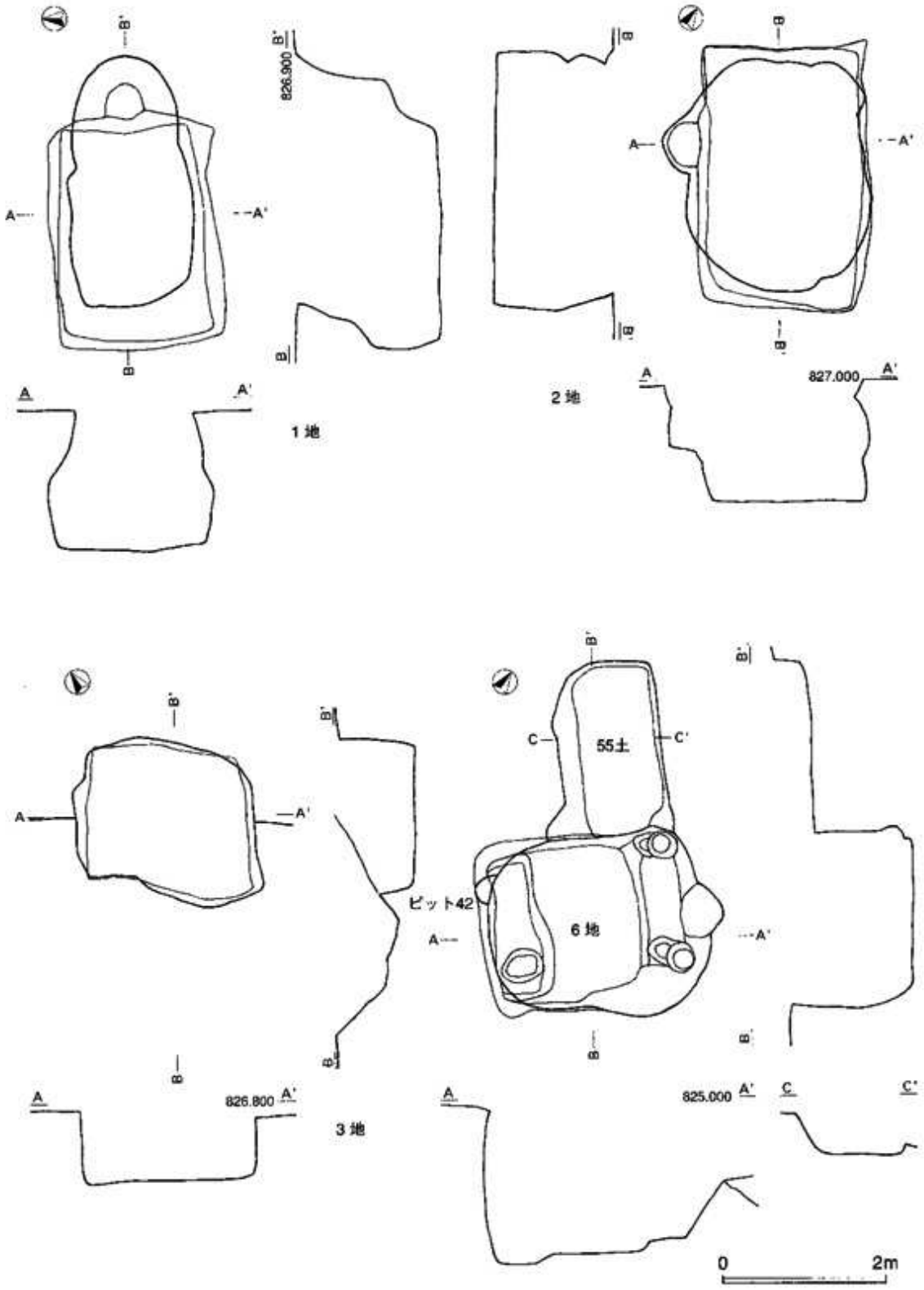
第6図　5号住居跡　炉（S＝1/60・1/30）



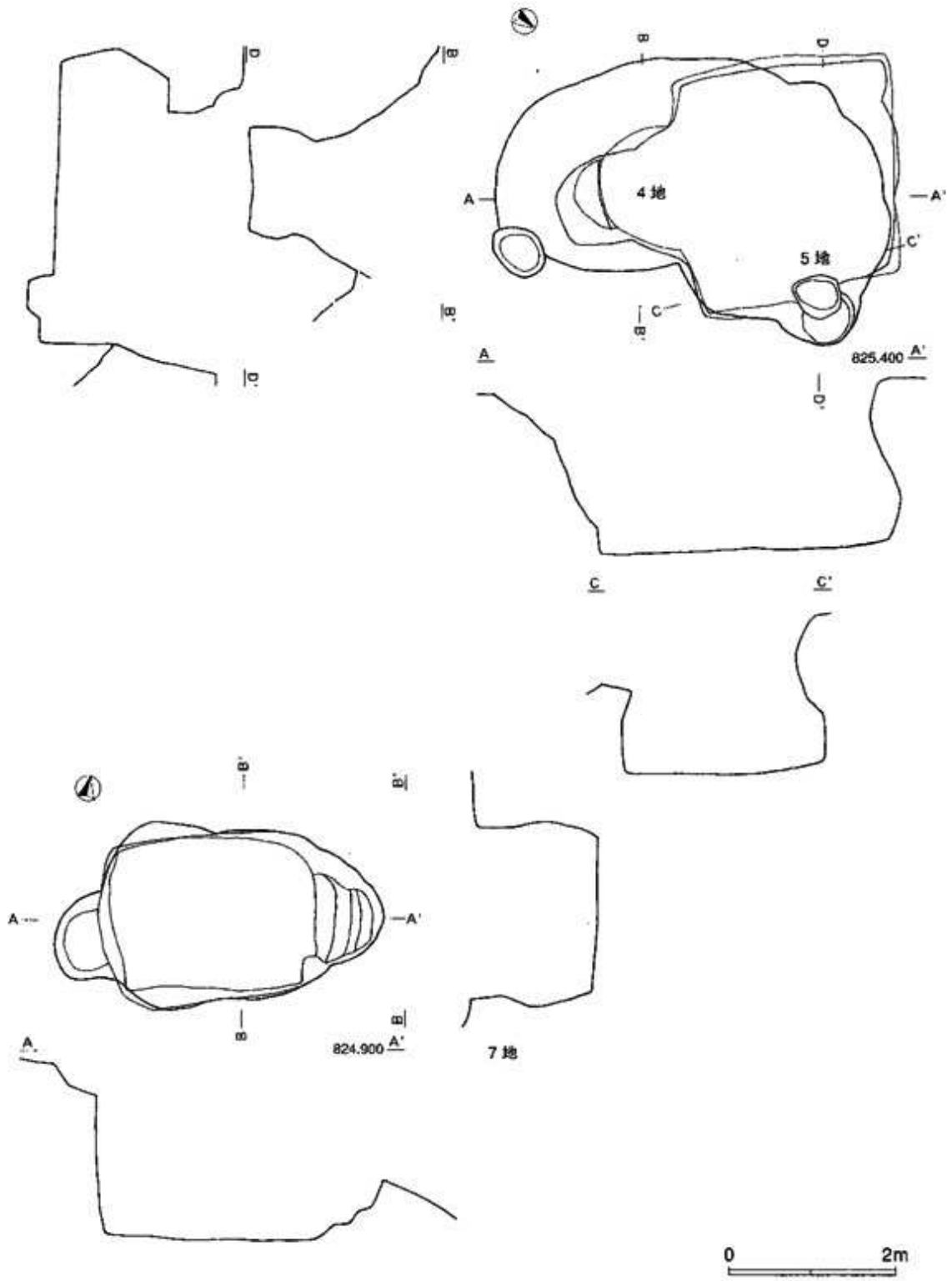
第7図　1号井戸跡（S＝1/40）



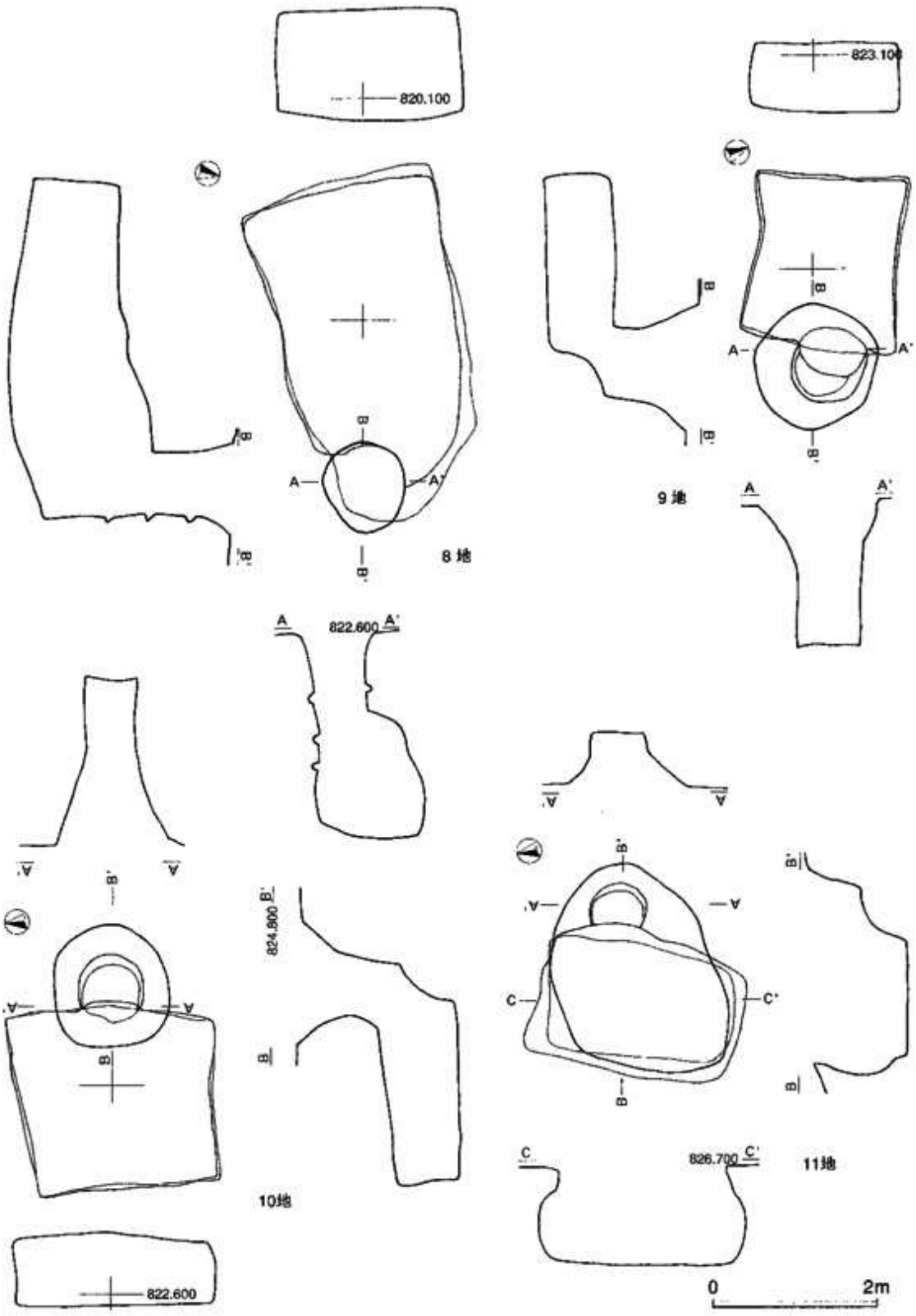
第8図　2・3号井戸跡（S＝1/40）



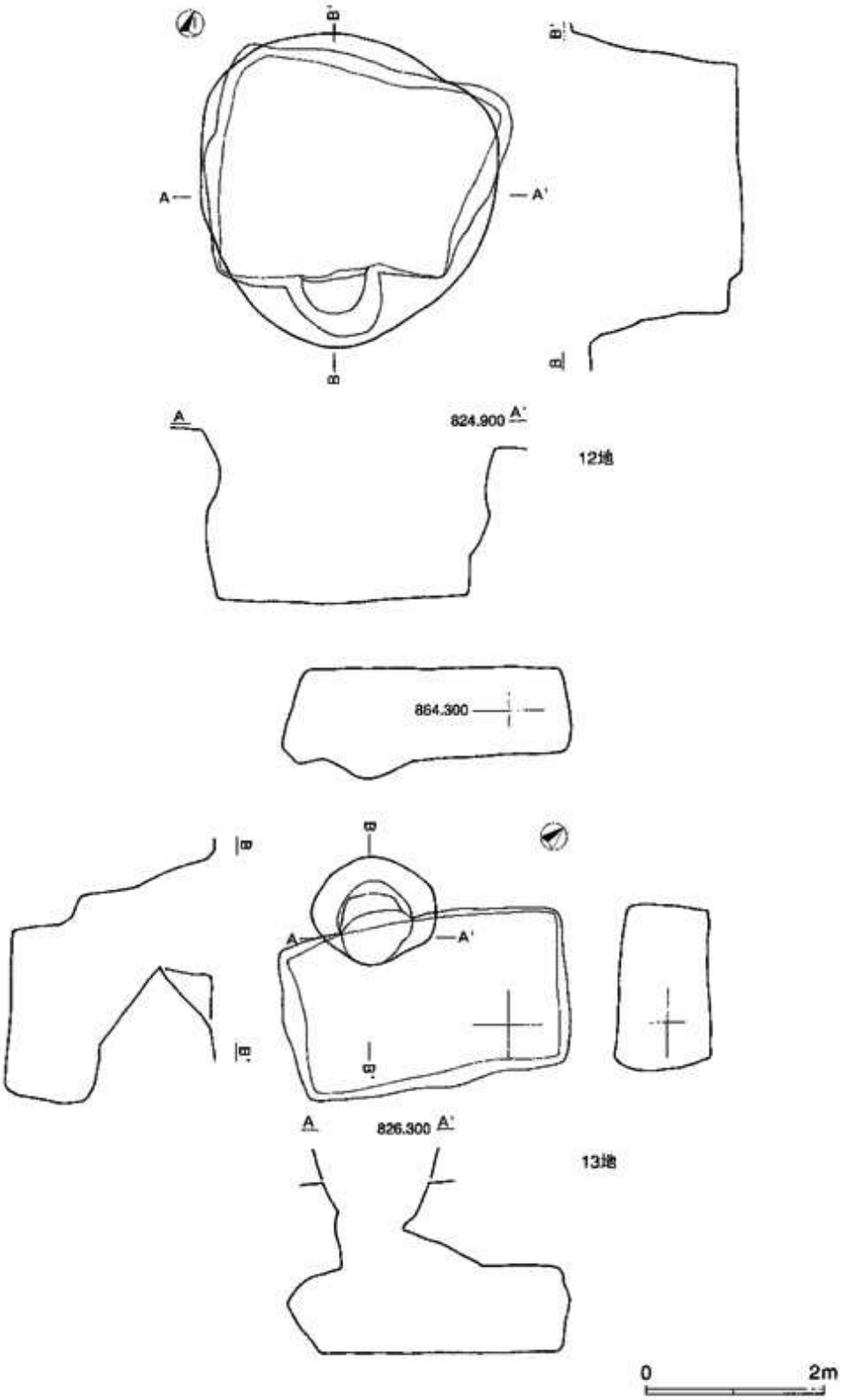
第9図　1・2・3・6号地下式坑　55号土坑　ピット42（S＝1/80）



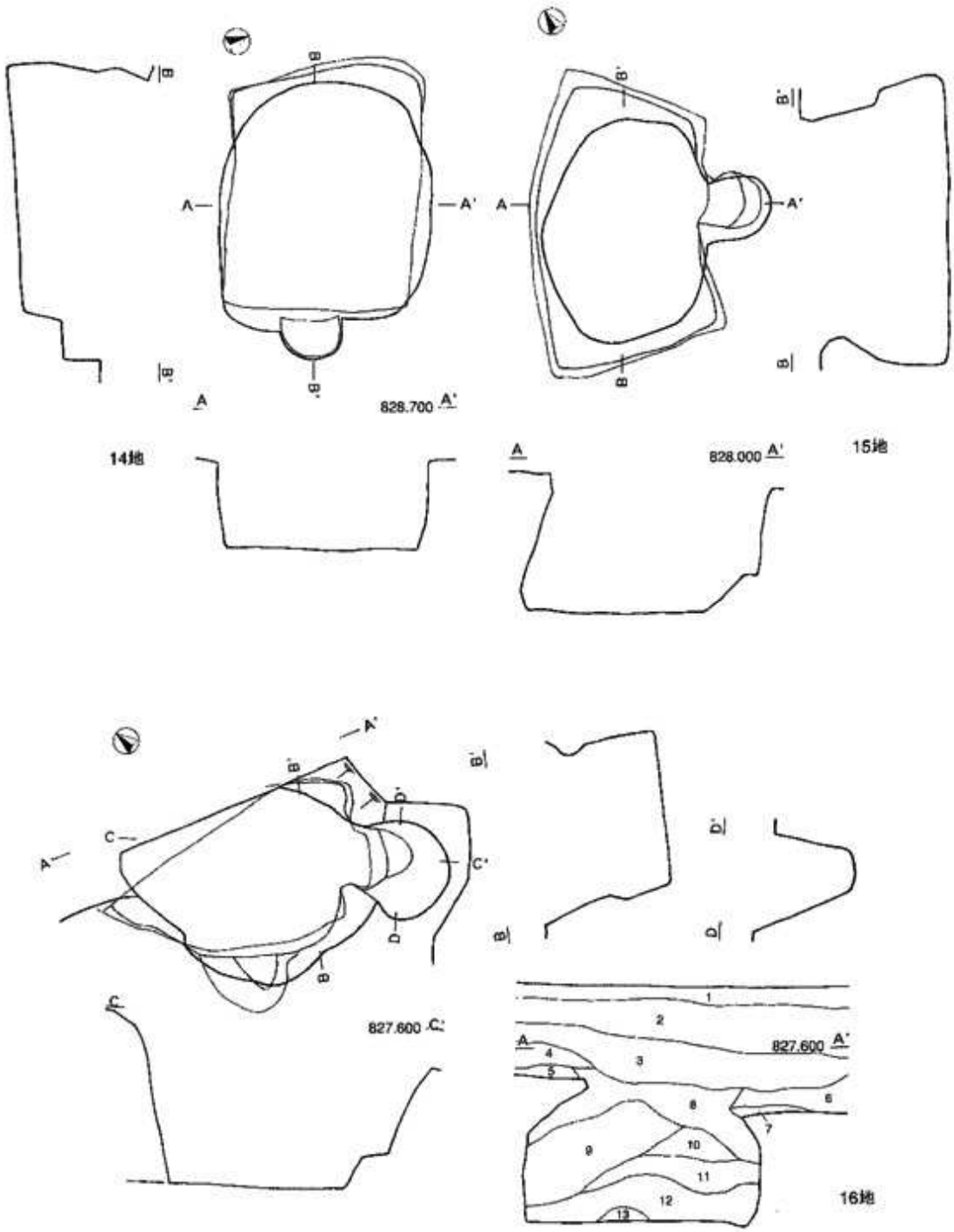
第10図　4・5・7号地下式坑（S＝1/80）



第11図　8・9・10・11号地下式坑（S＝1/80）

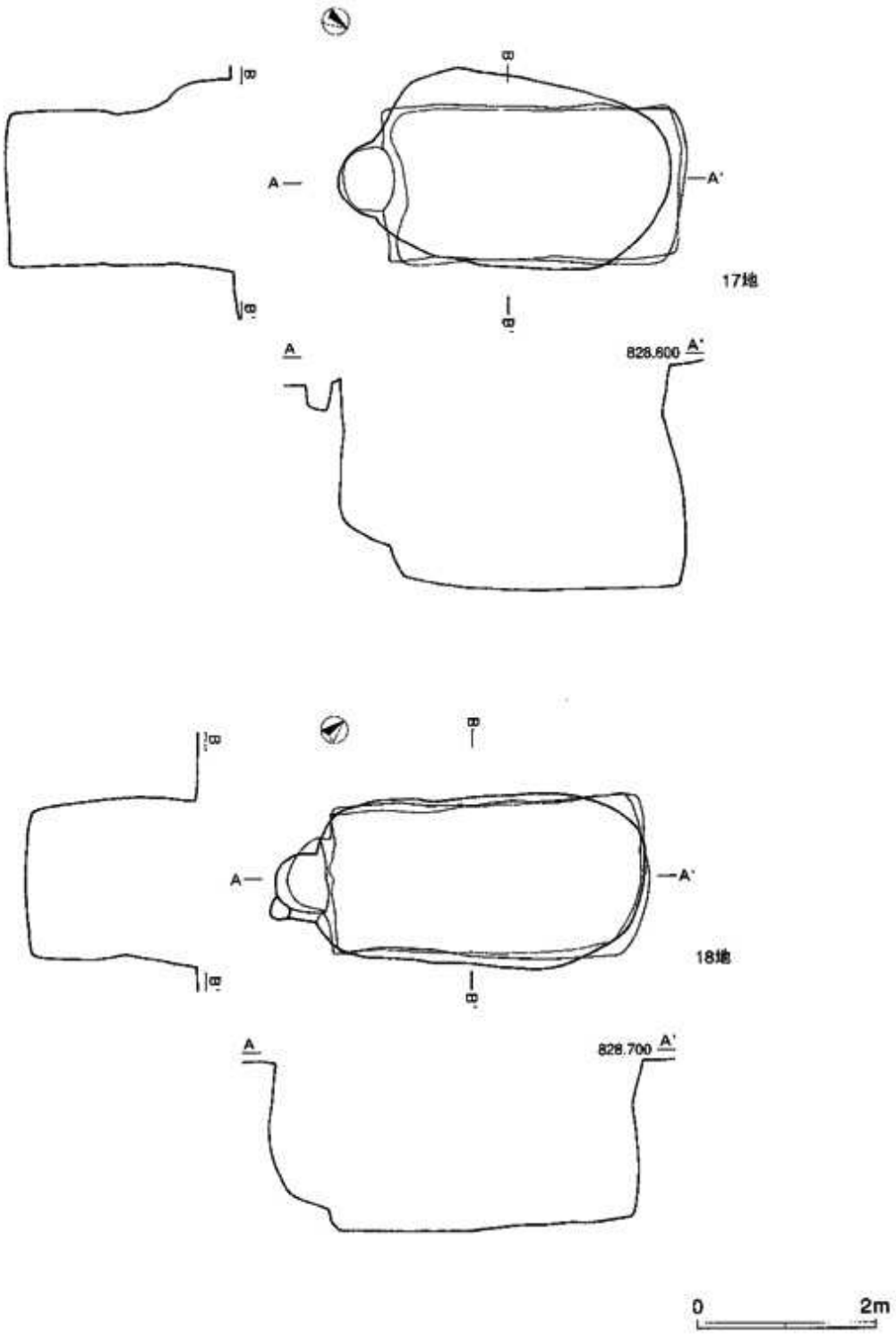


第12図　12・13号地下式坑

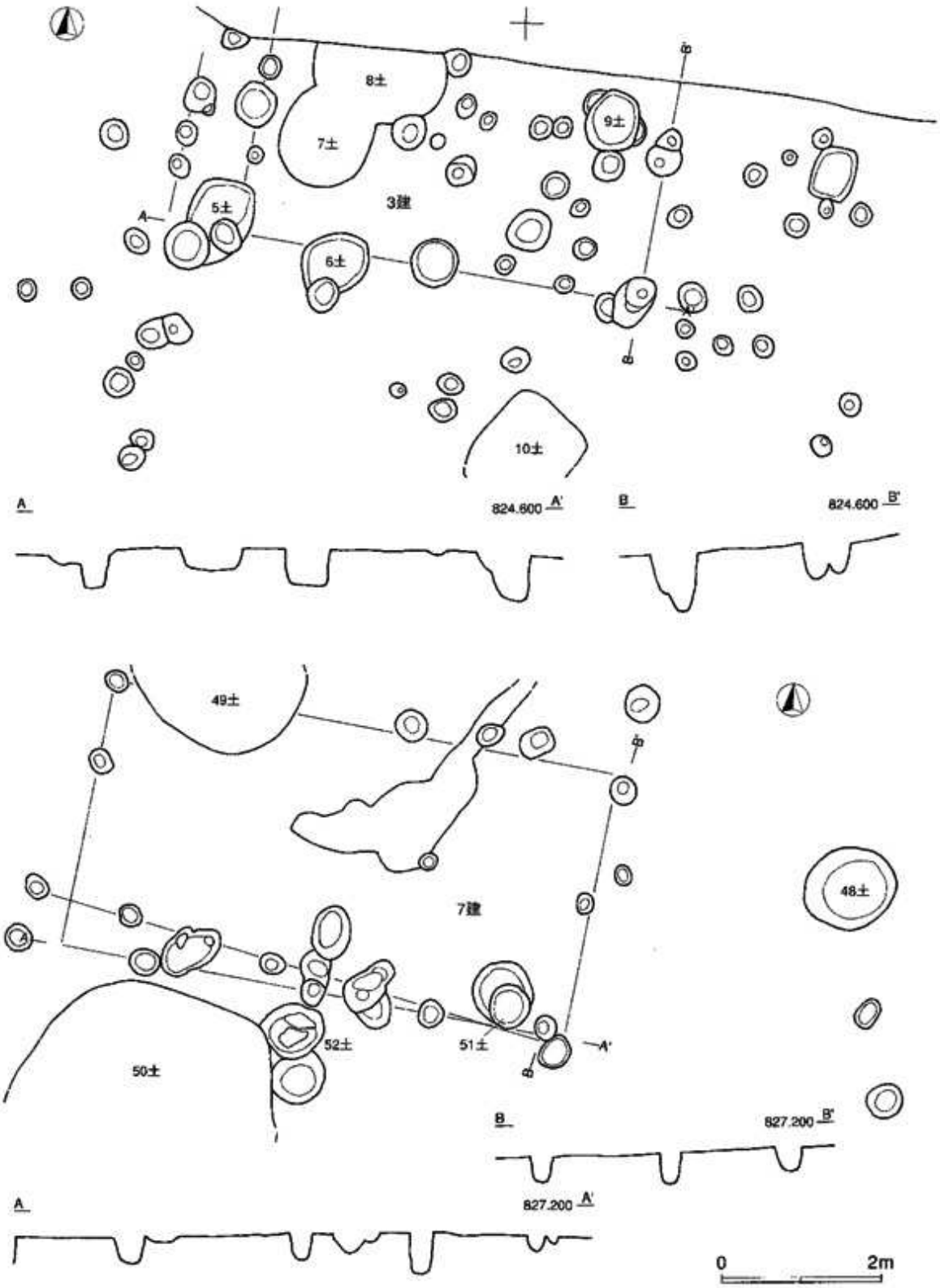


腹土	1	暗褐色	耕作土	8	暗褐色　粘性弱、しまり弱、ＲＢ含（旧表土＋ＲＢ）
	2	黒色	粘性やや弱		
	3	暗褐色	粘性弱、客土層	9	暗黄褐色　粘性弱、しまり弱、ローム質
	4	暗褐色	粘性弱、しまり弱、Ｒ含	10	暗黄褐色　粘性弱、しまり弱、ローム質
	5	暗黄褐色	Ｒ多	11	暗黄褐色　粘性弱、しまり弱、ローム質
	6	黒褐色	粘性弱、しまり弱、Ｒ含	12	黒褐色　粘性やや強、Ｒ多
	7	暗褐色	粘性やや強、Ｒ多	13	暗黄褐色　粘性弱、しまり弱、ローム質

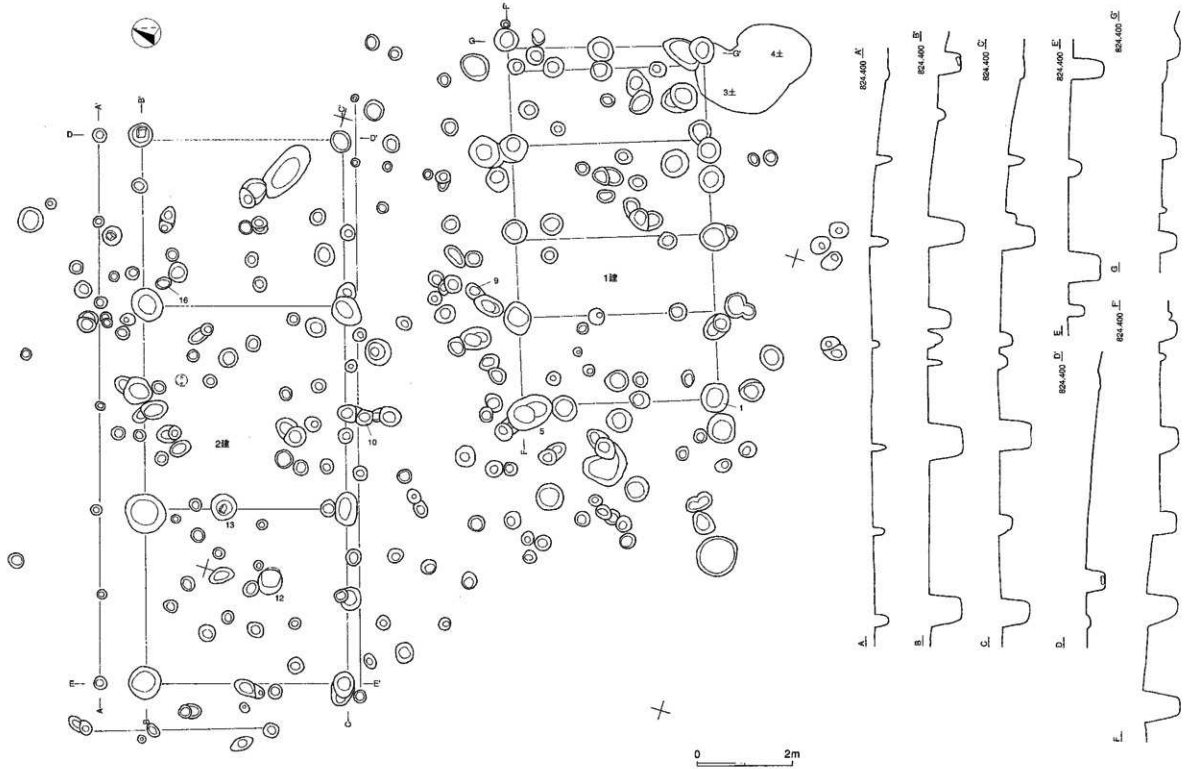
第13図　14･15･16号地下式坑（S＝1/80）



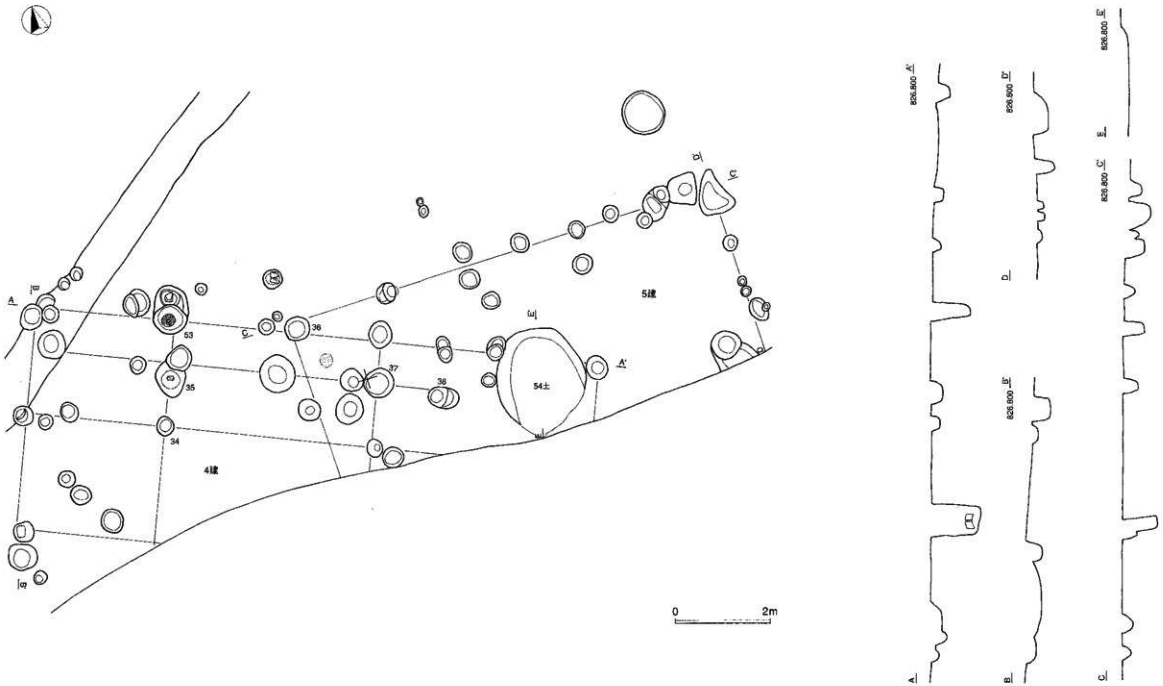
第14図　17·18号地下式坑（S＝1/80）



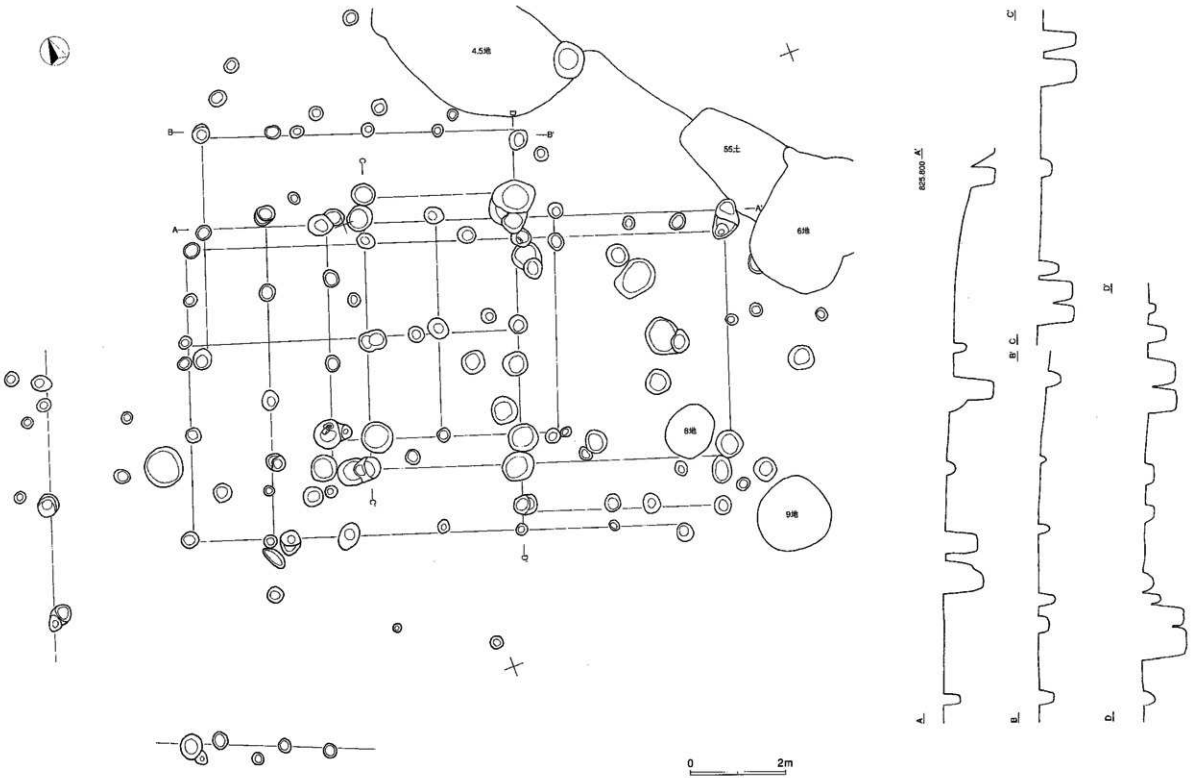
第15図　3・7号掘立柱建物跡（S＝1/80）



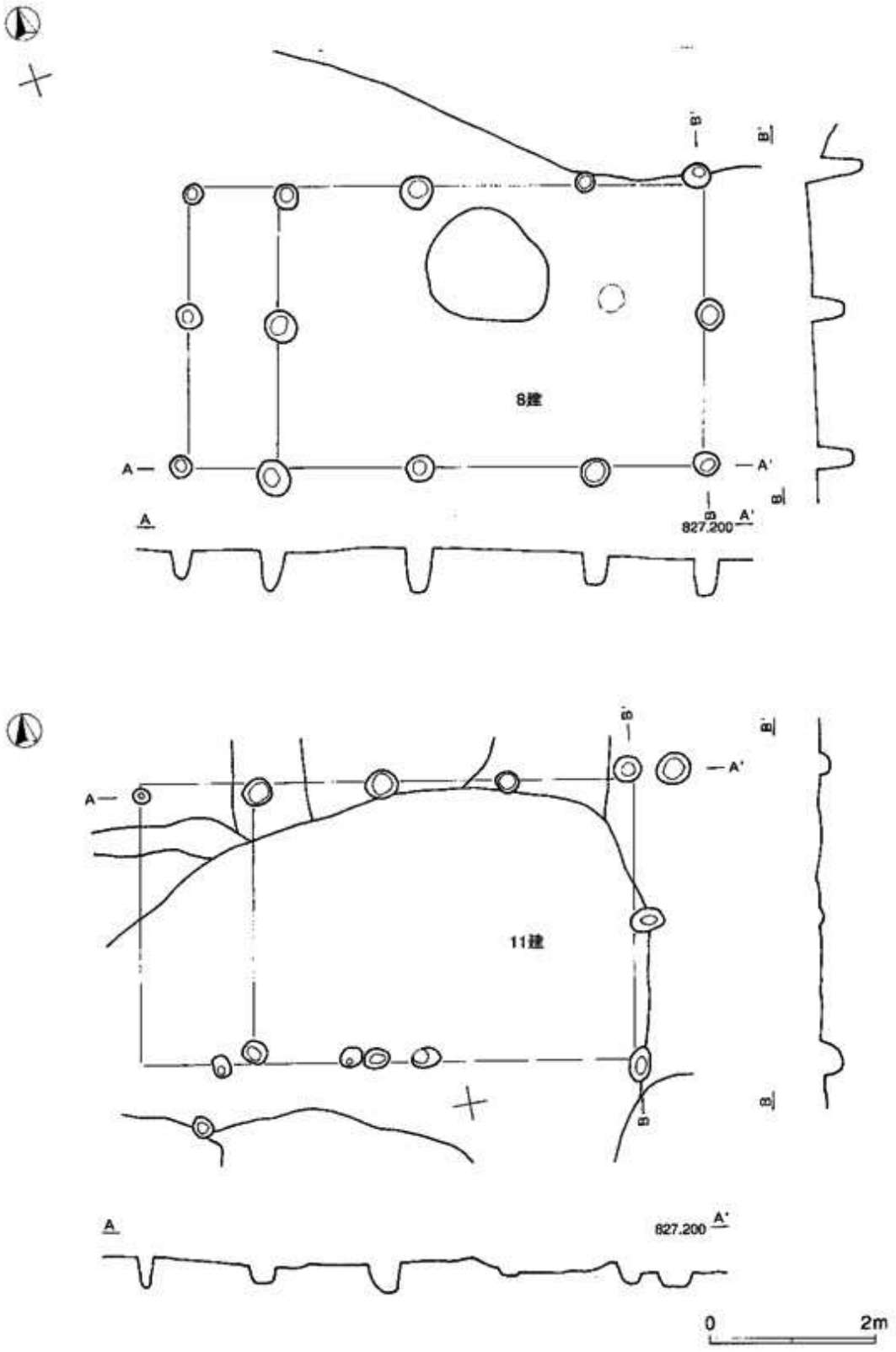
第16図　1・2号掘立柱建物跡（S＝1/80）　※図中数字のみは遺物の出土したピット番号



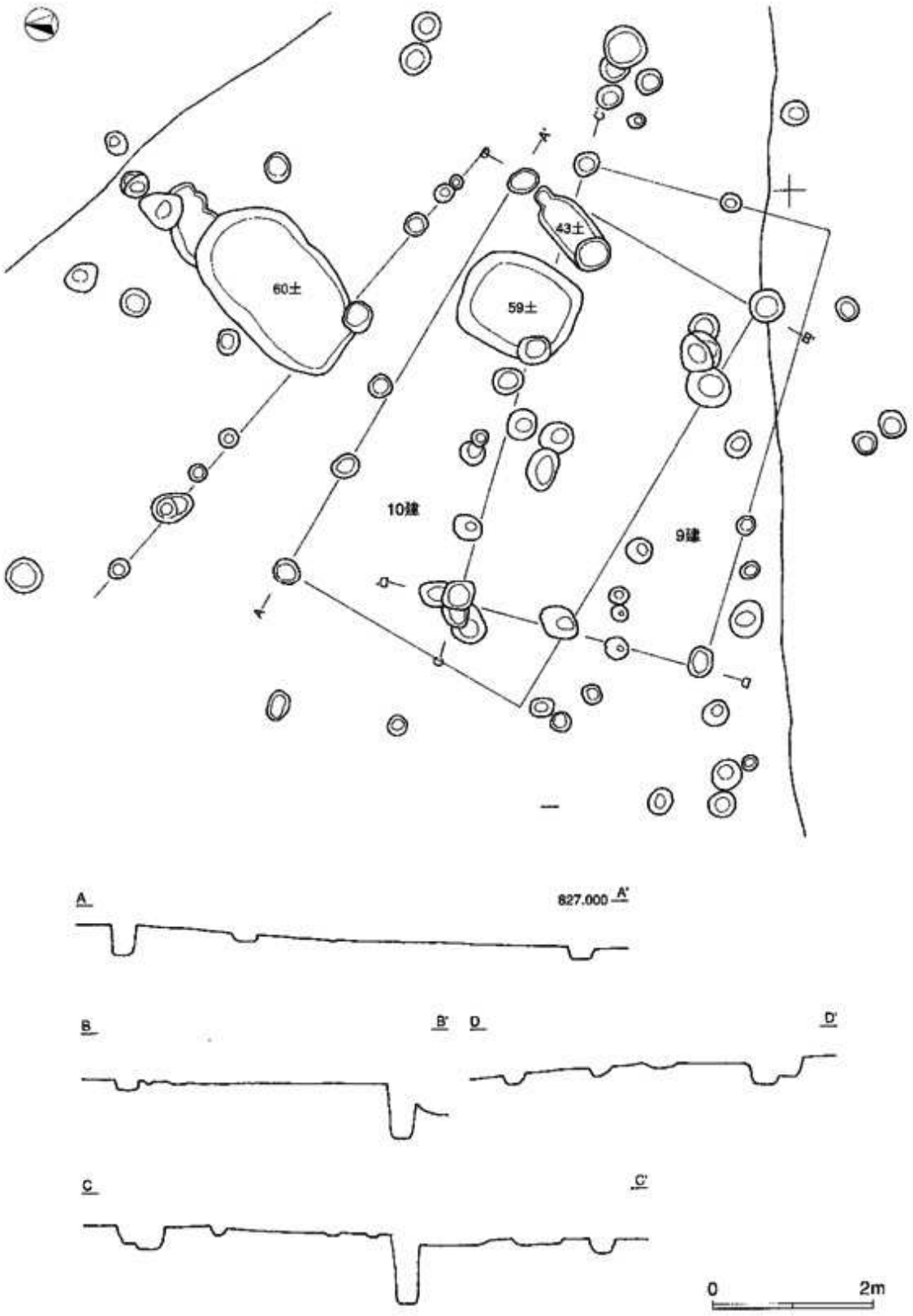
第17図　4・5号掘立柱建物跡（S＝1/80）



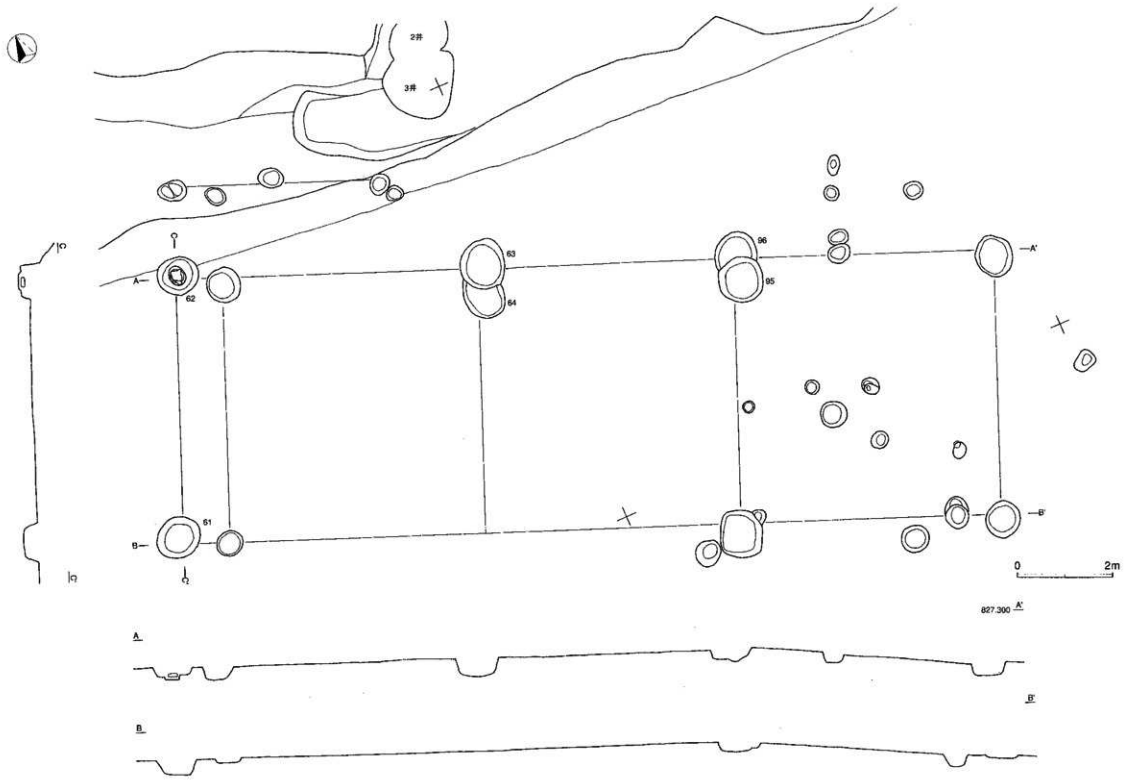
第18図　6号掘立柱建物跡（S＝1/80）



第19図　8・11号掘立柱建物跡

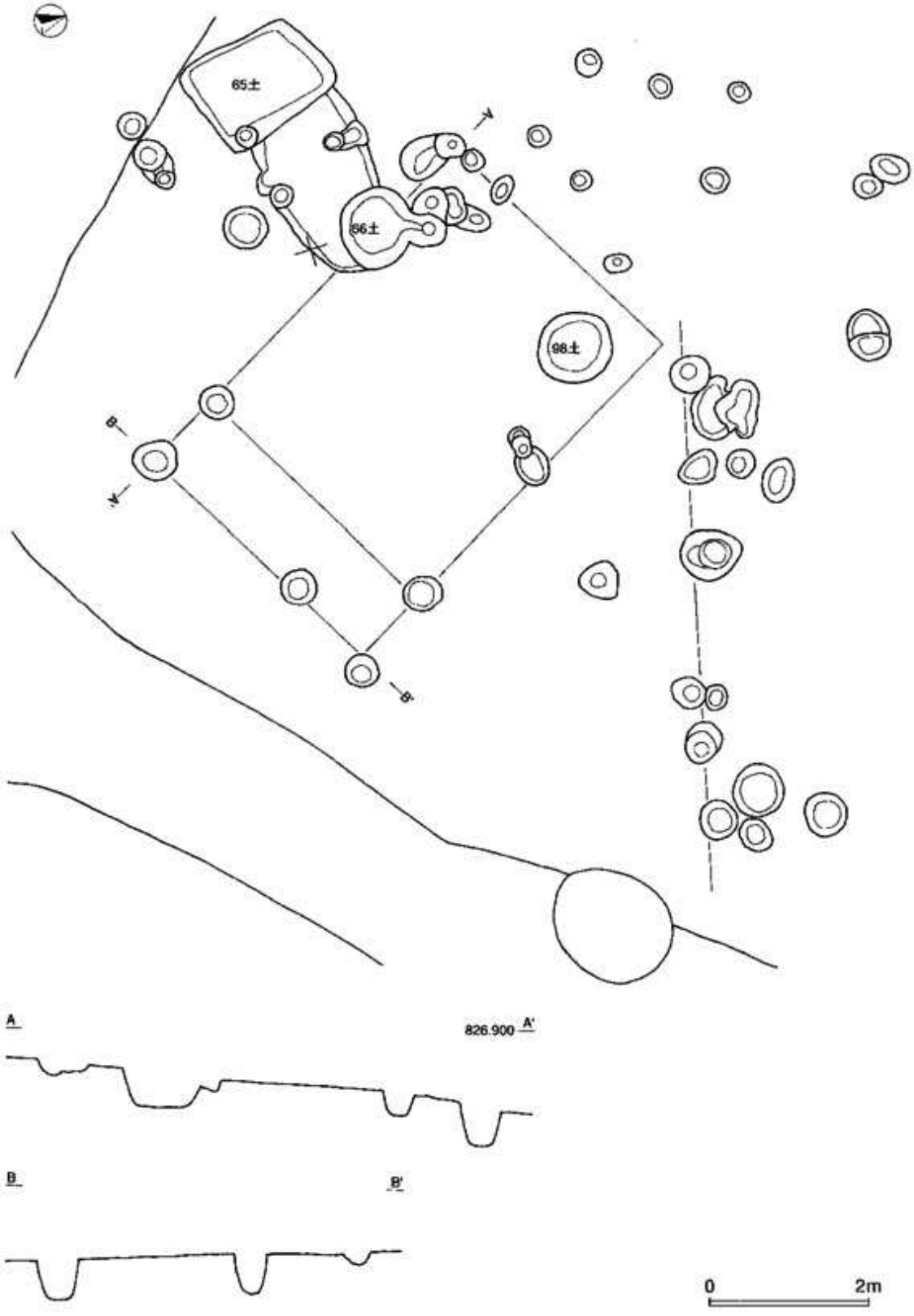


第20図　9・10号掘立柱建物跡（S＝1/80）

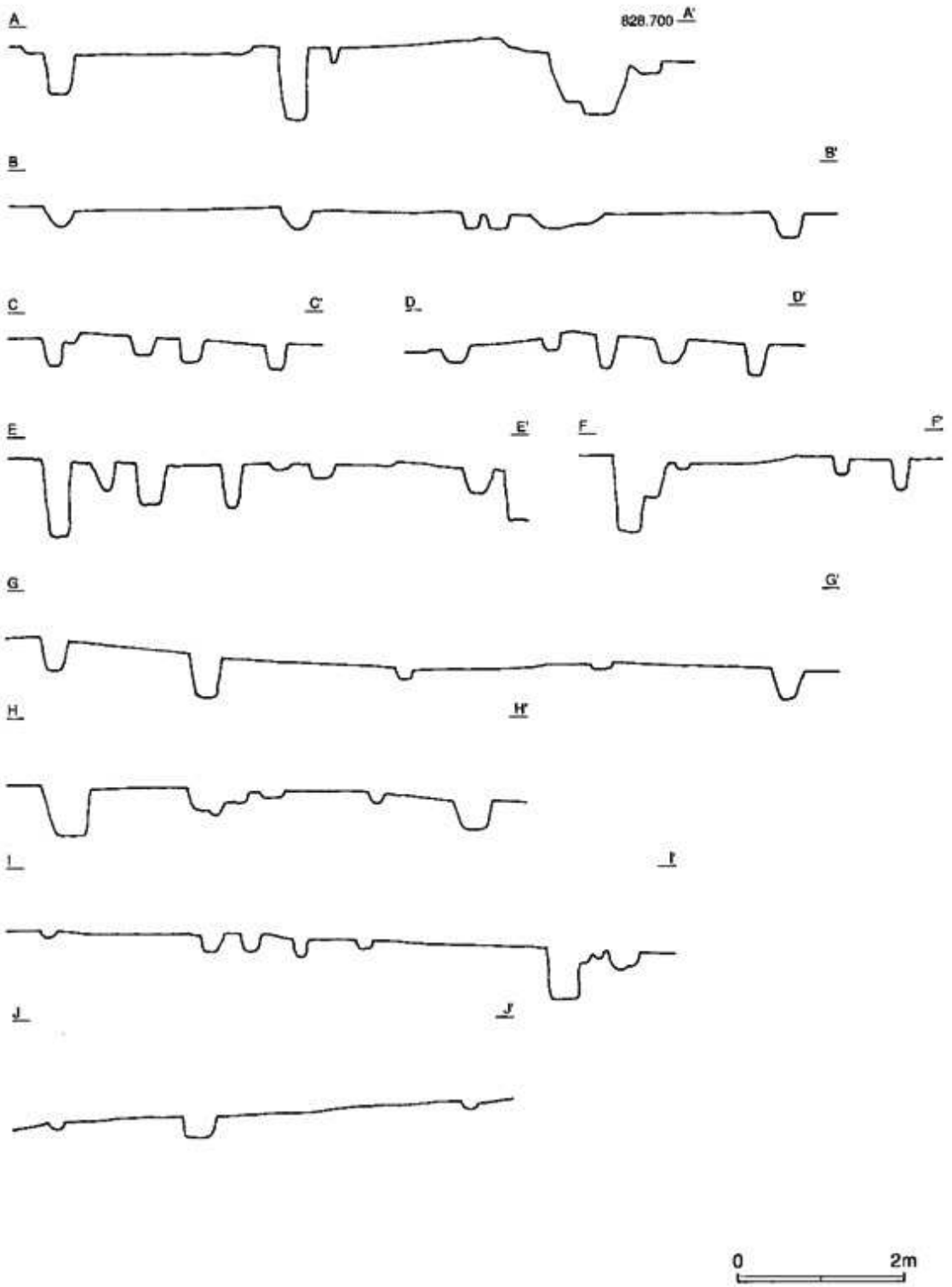


第21図　13号掘建柱建物跡（S＝1/80）

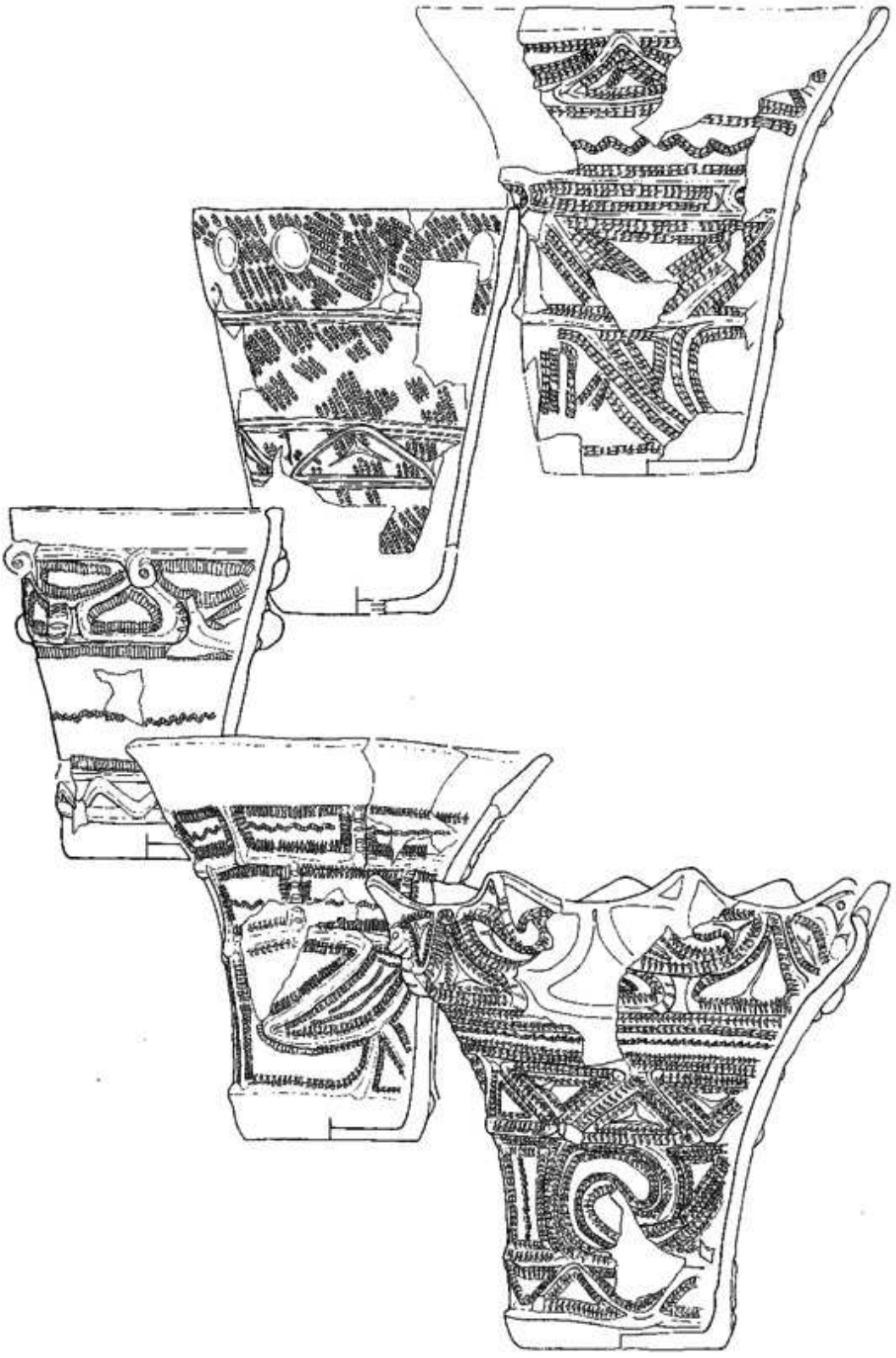
第22図　14·15·16·17·18号掘立柱建物跡（S＝1/80）



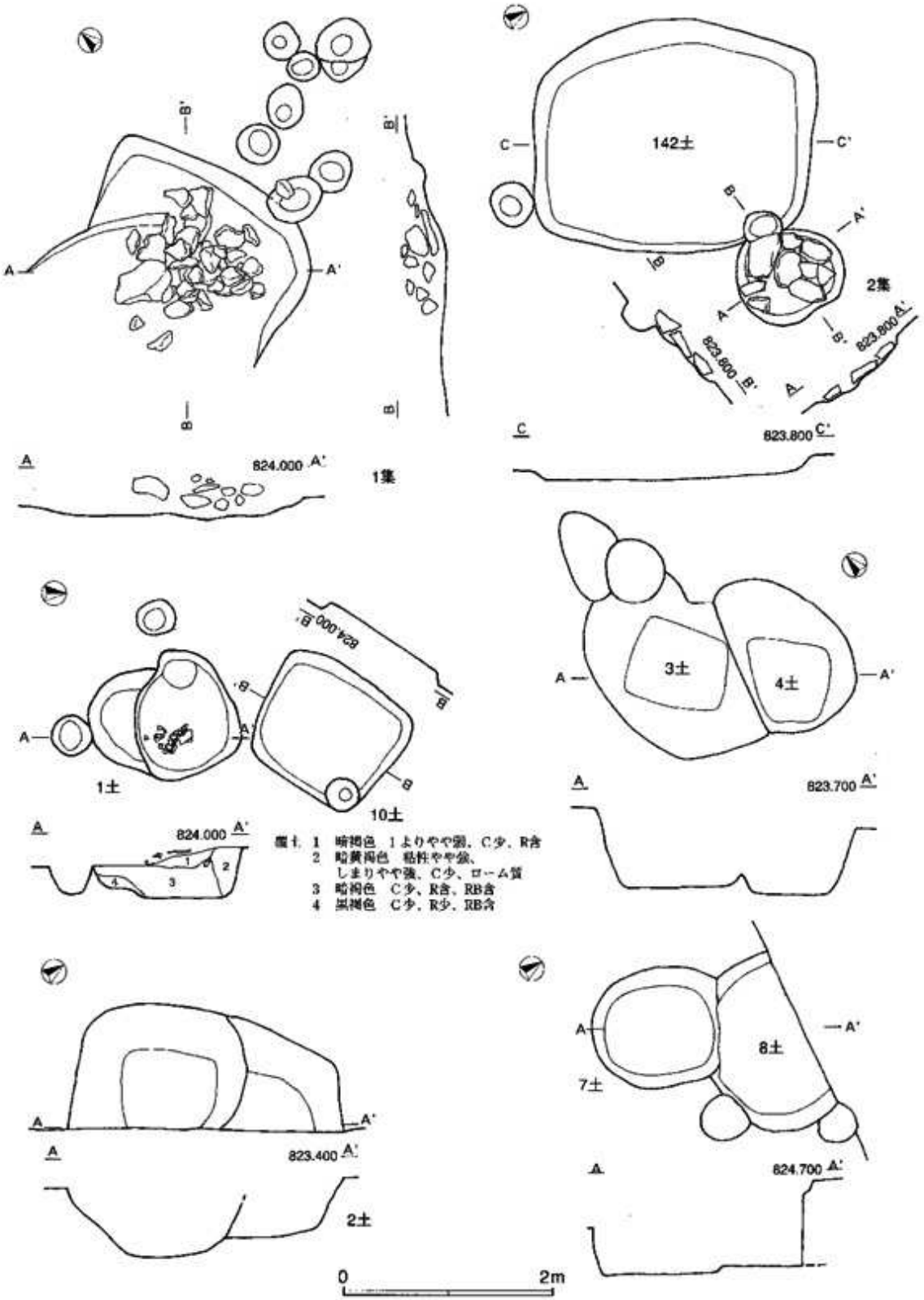
第23図　12号掘立柱建物跡（S＝1/80）



第24図　14·15·16·17·18号掘立柱建物跡断面図（S＝1/80）

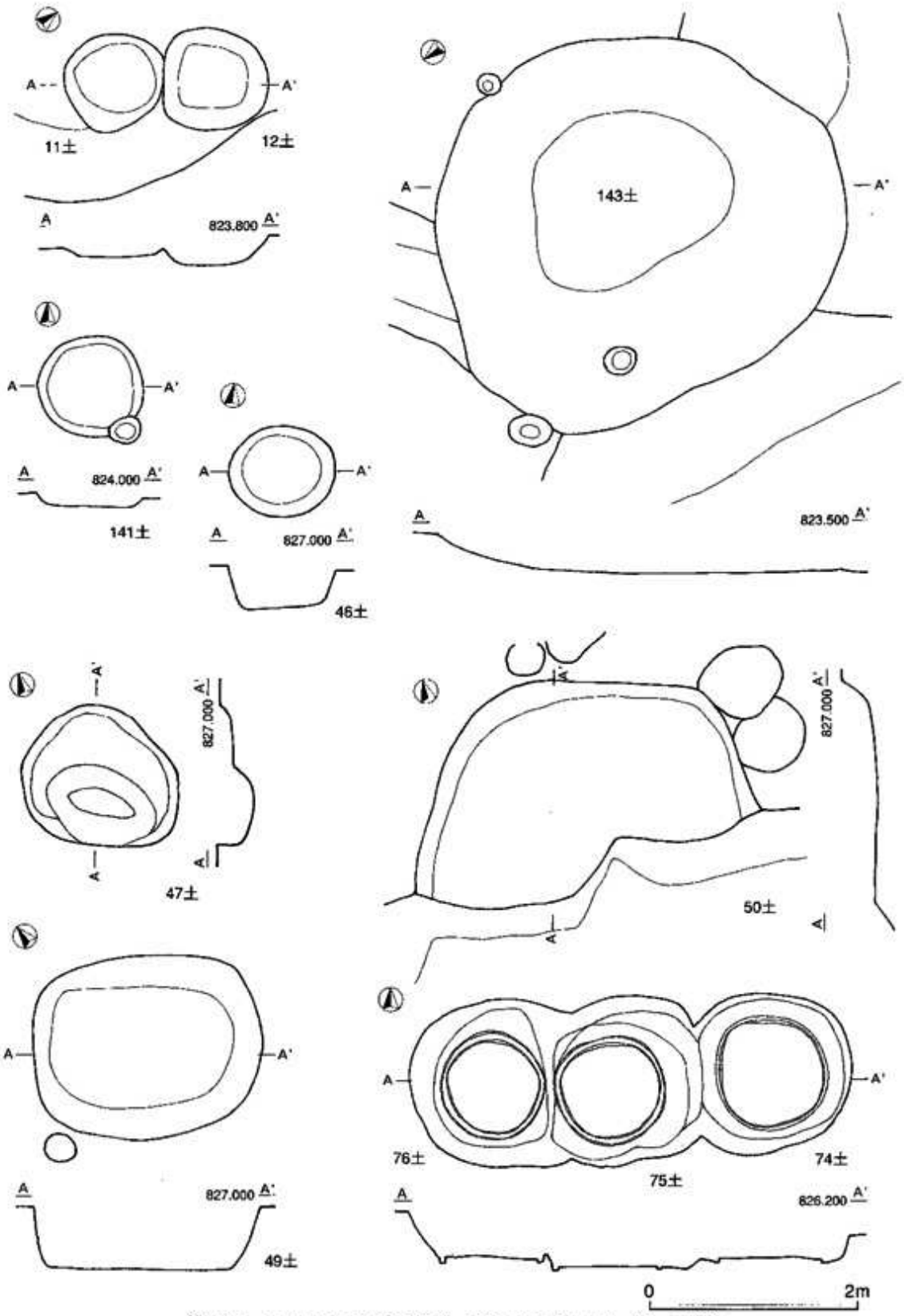


第25図　土器コラージュ

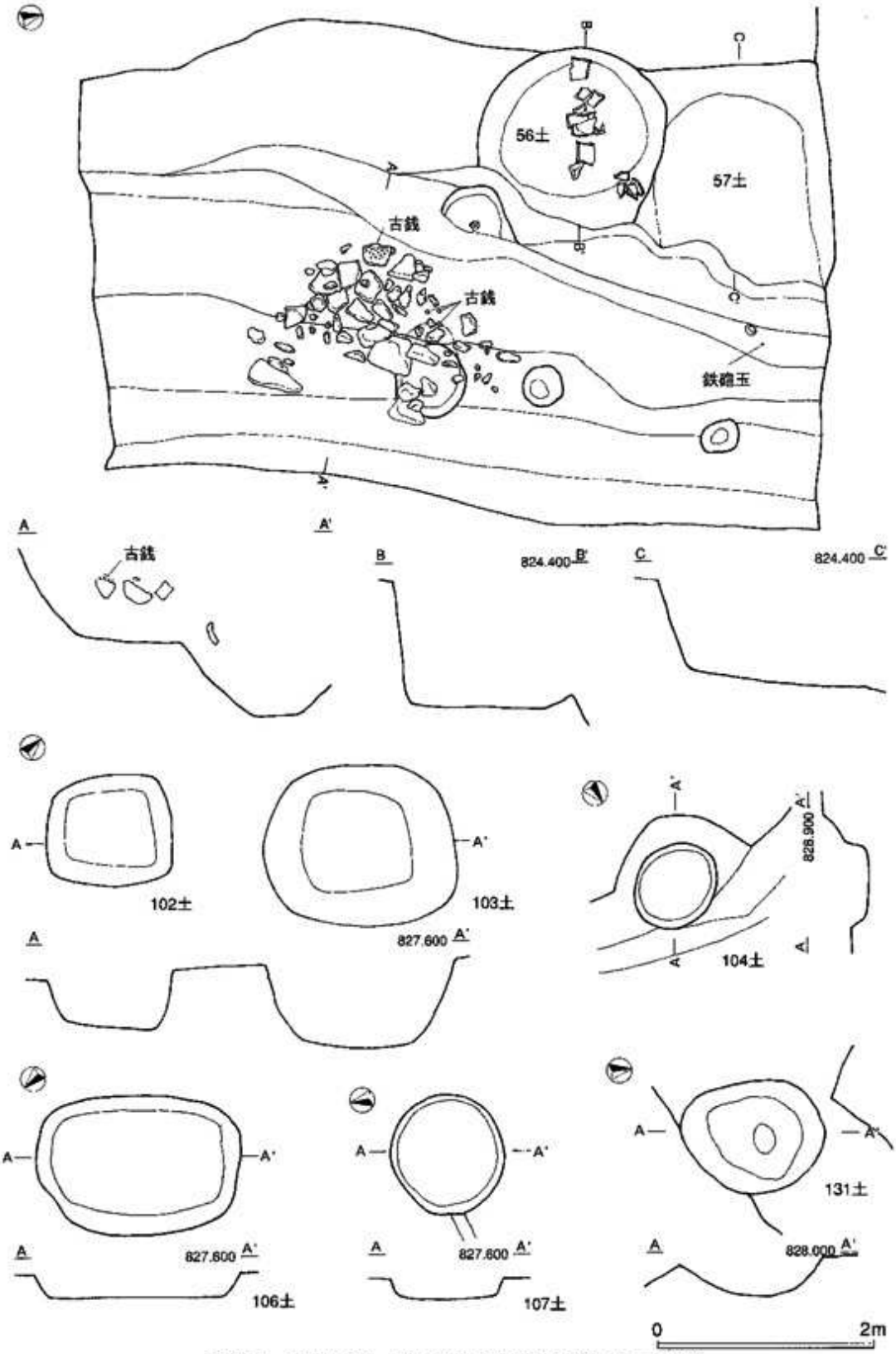


第26図　1・2号集石　1～4・7・8・10・142号土坑（S＝1/60）

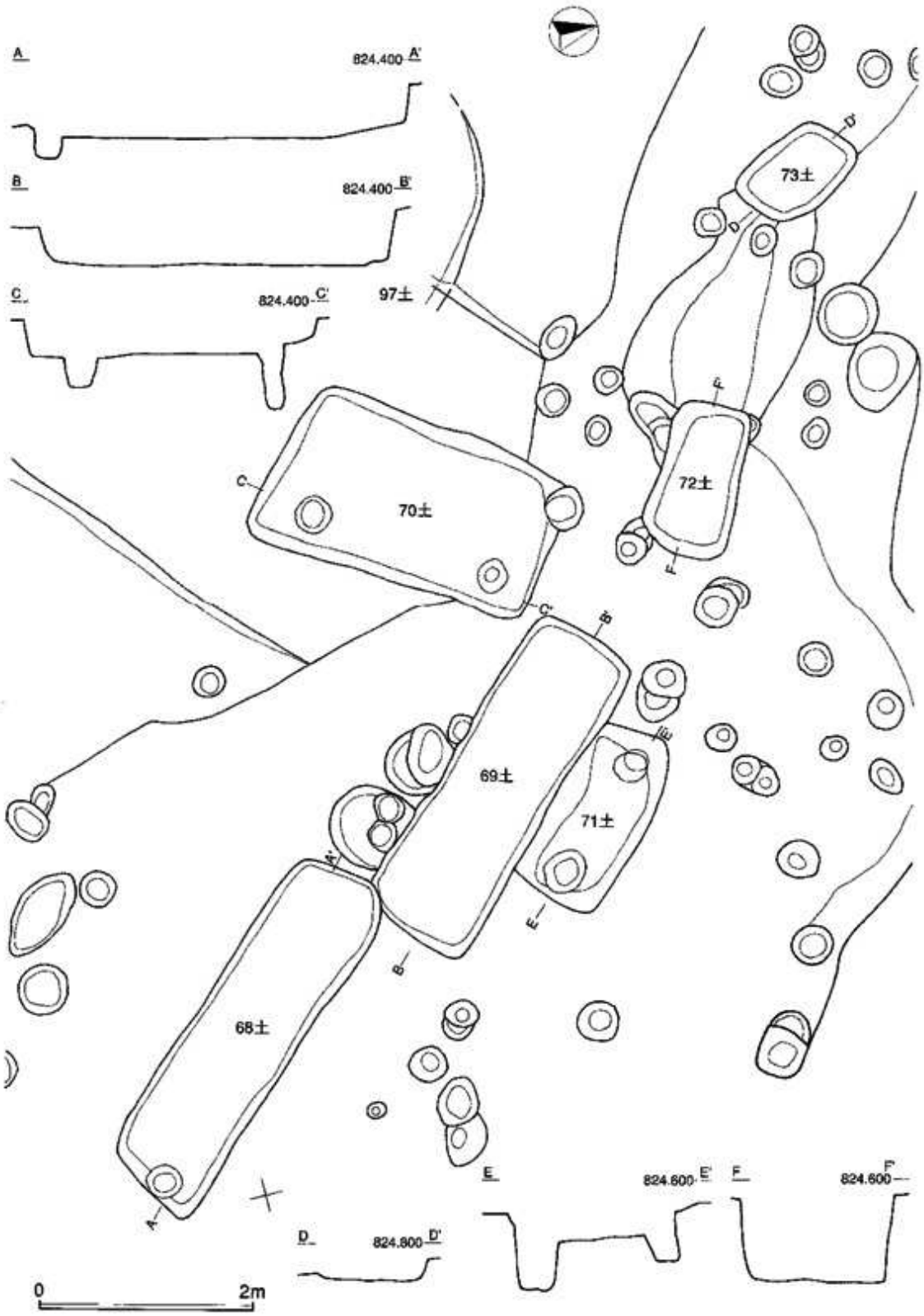
第27図　台地下部（中世居館部分）平面図（S＝1/80）　※図中数字のみはピット番号



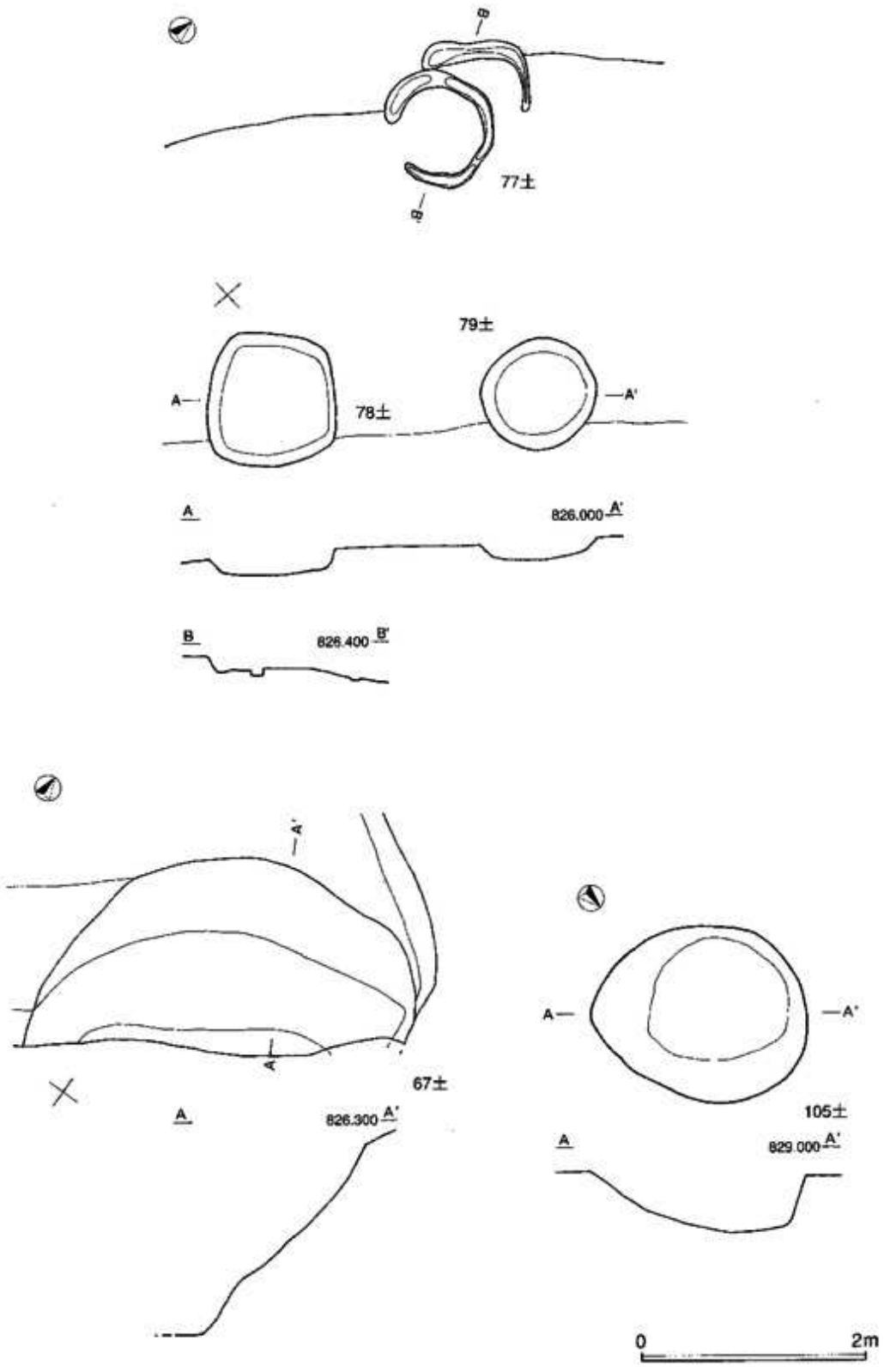
第28図　11·12·46·47·49·50·74～76·141·143号土坑（S＝1/60）



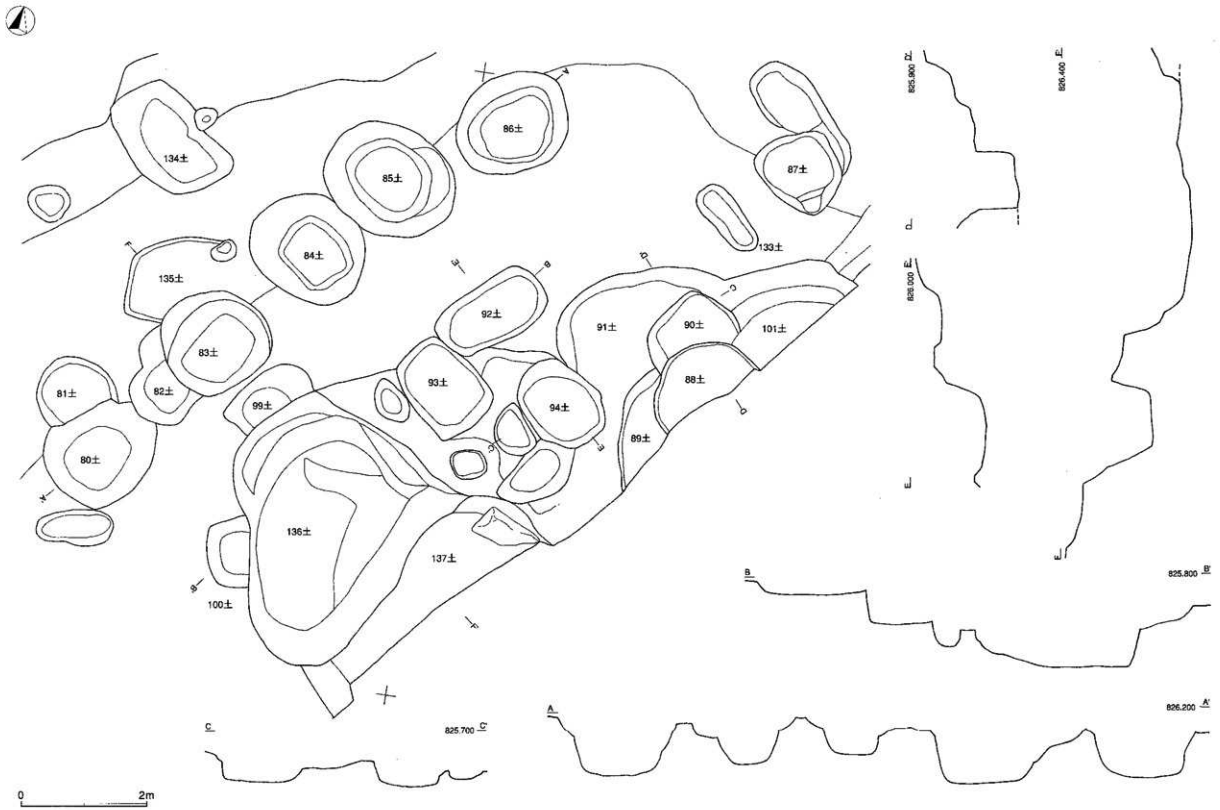
第29図　56·57·102～104·106·107·131号土坑（S＝1/60）



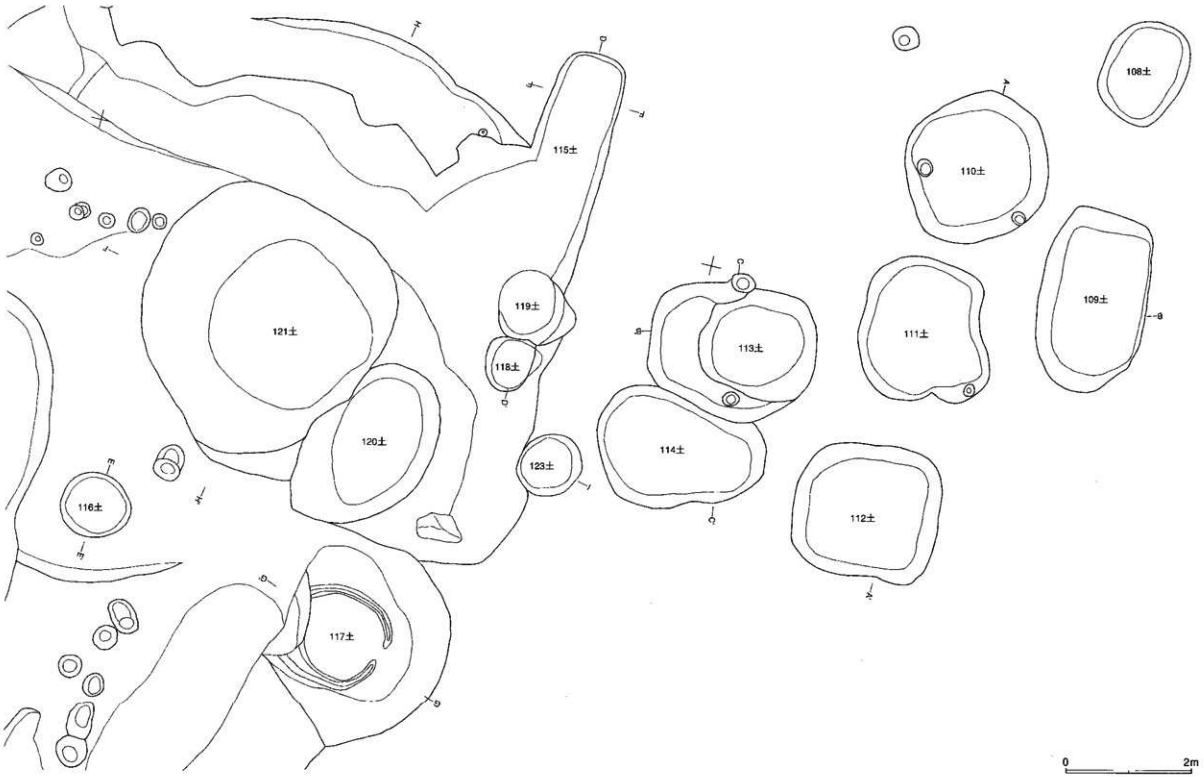
第30図　68～73・97号土坑（S＝1/60）



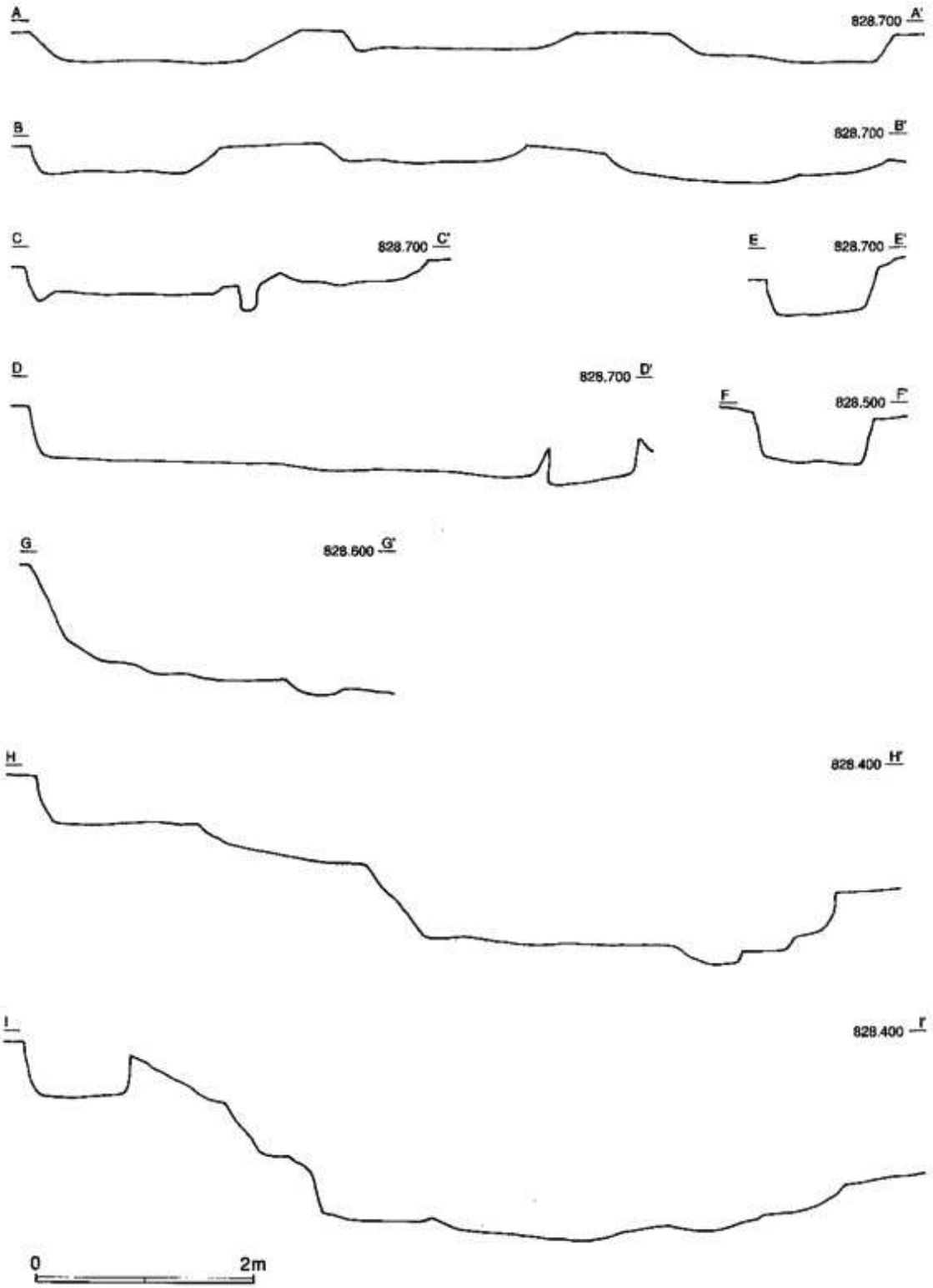
第31図　67·77～79·105号土坑（S＝1/60）



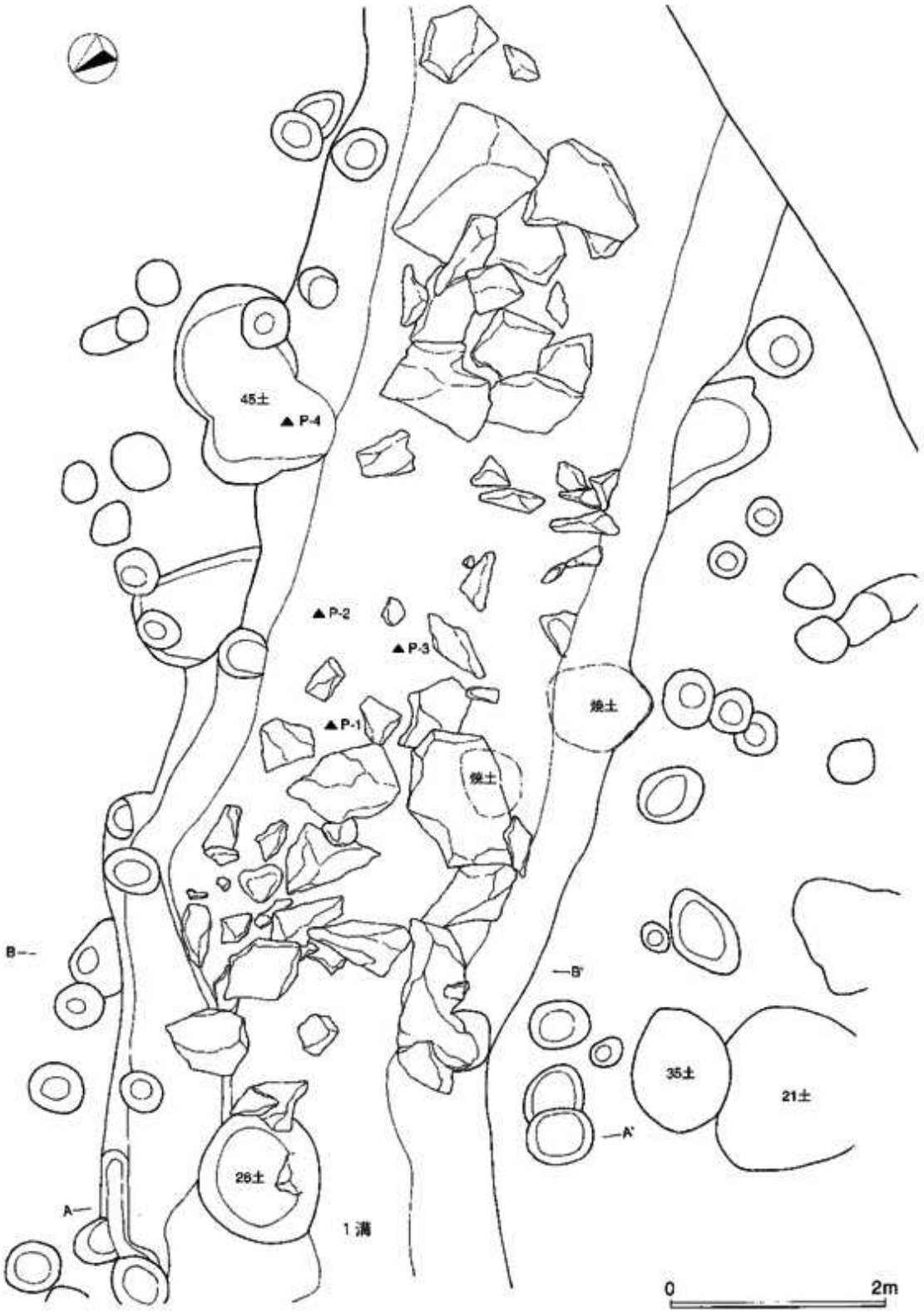
第32図　80～94・99～101・133～137号土坑（S＝1/60）



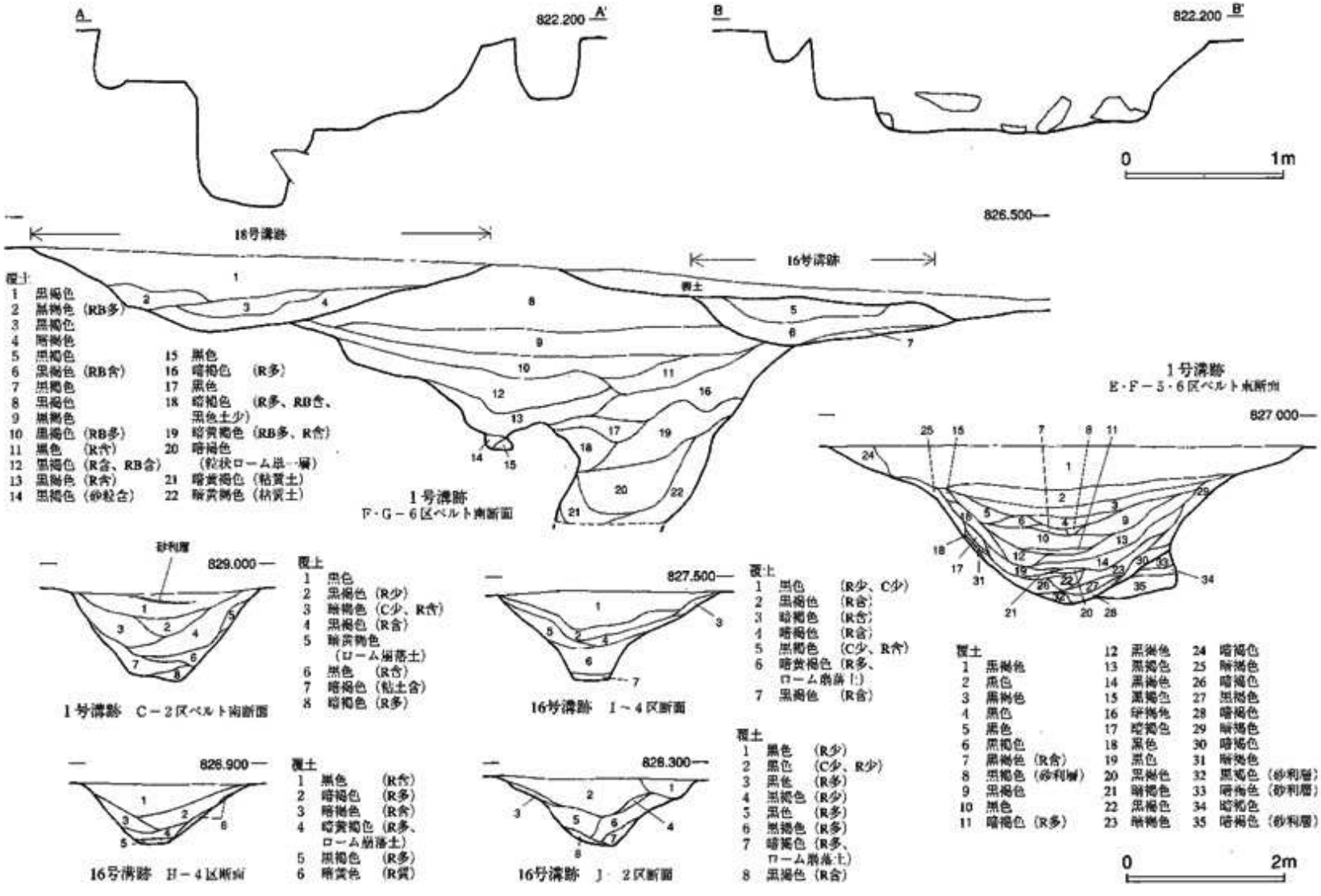
第33図　108～121・123号土坑平面図（S＝1/60）



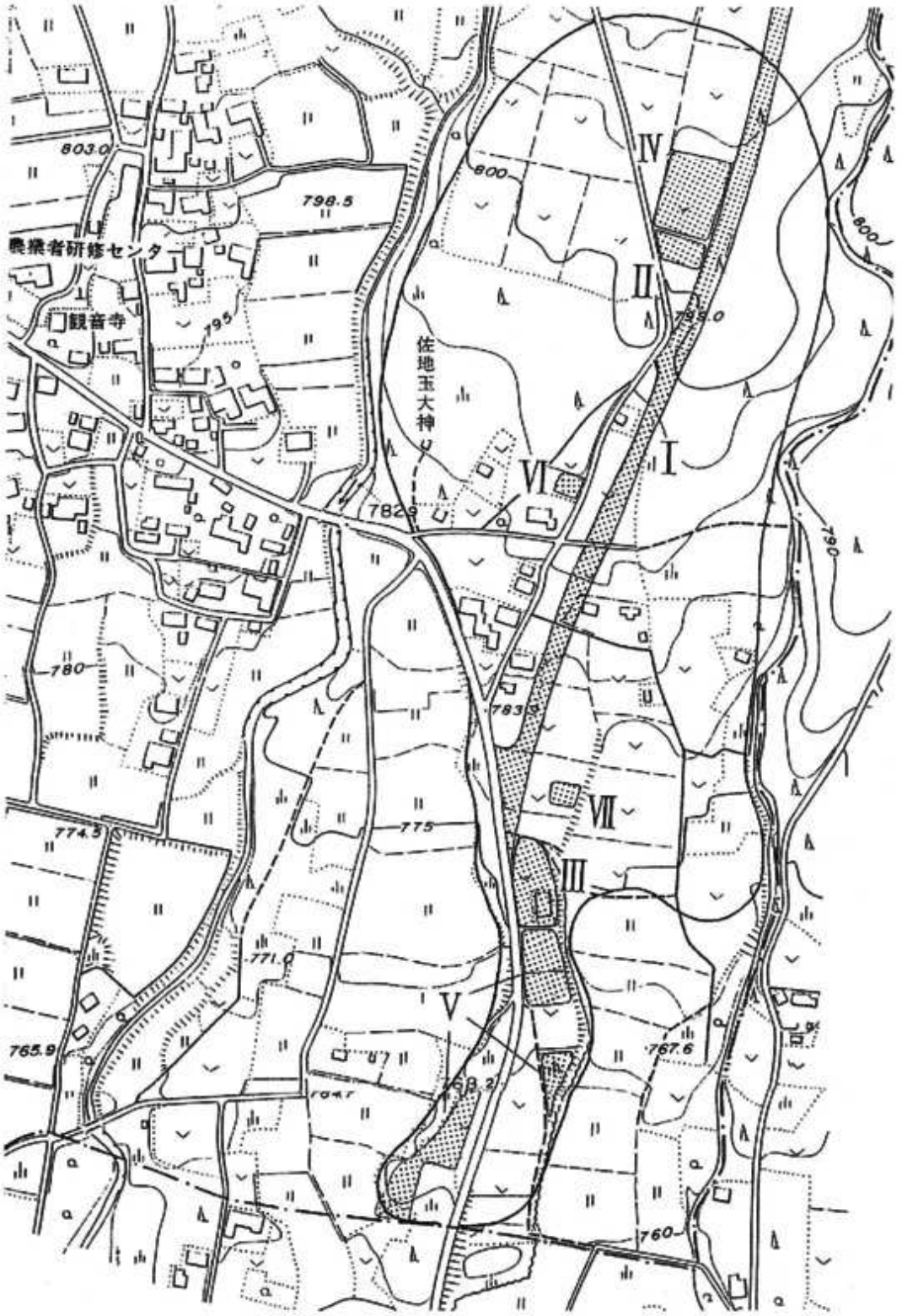
第34図　108～121・123号土坑断面図（S＝1/60）



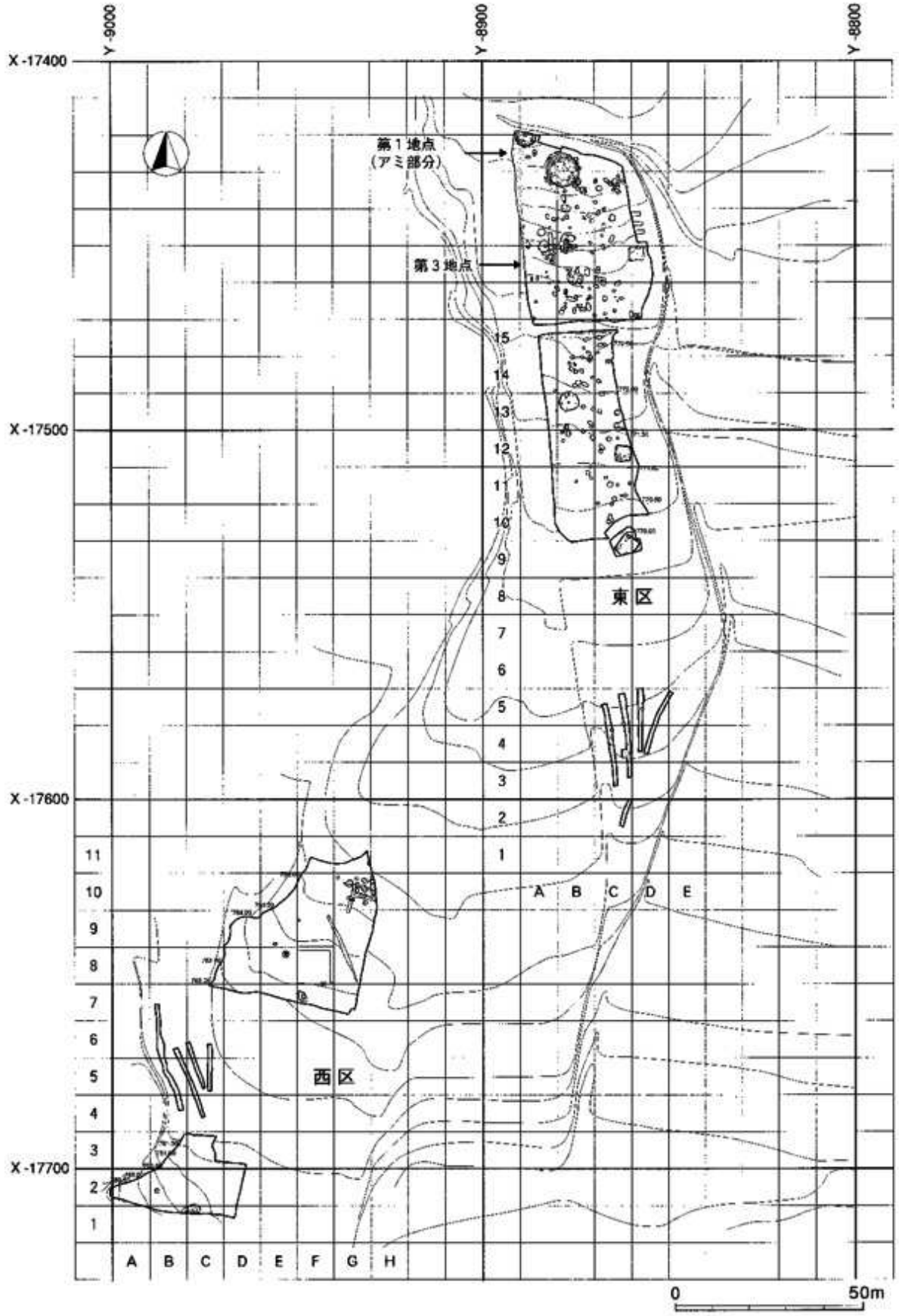
第35図　1号溝跡水場遺構平面図（S＝1/40）※Pナンバーは遺物を示す



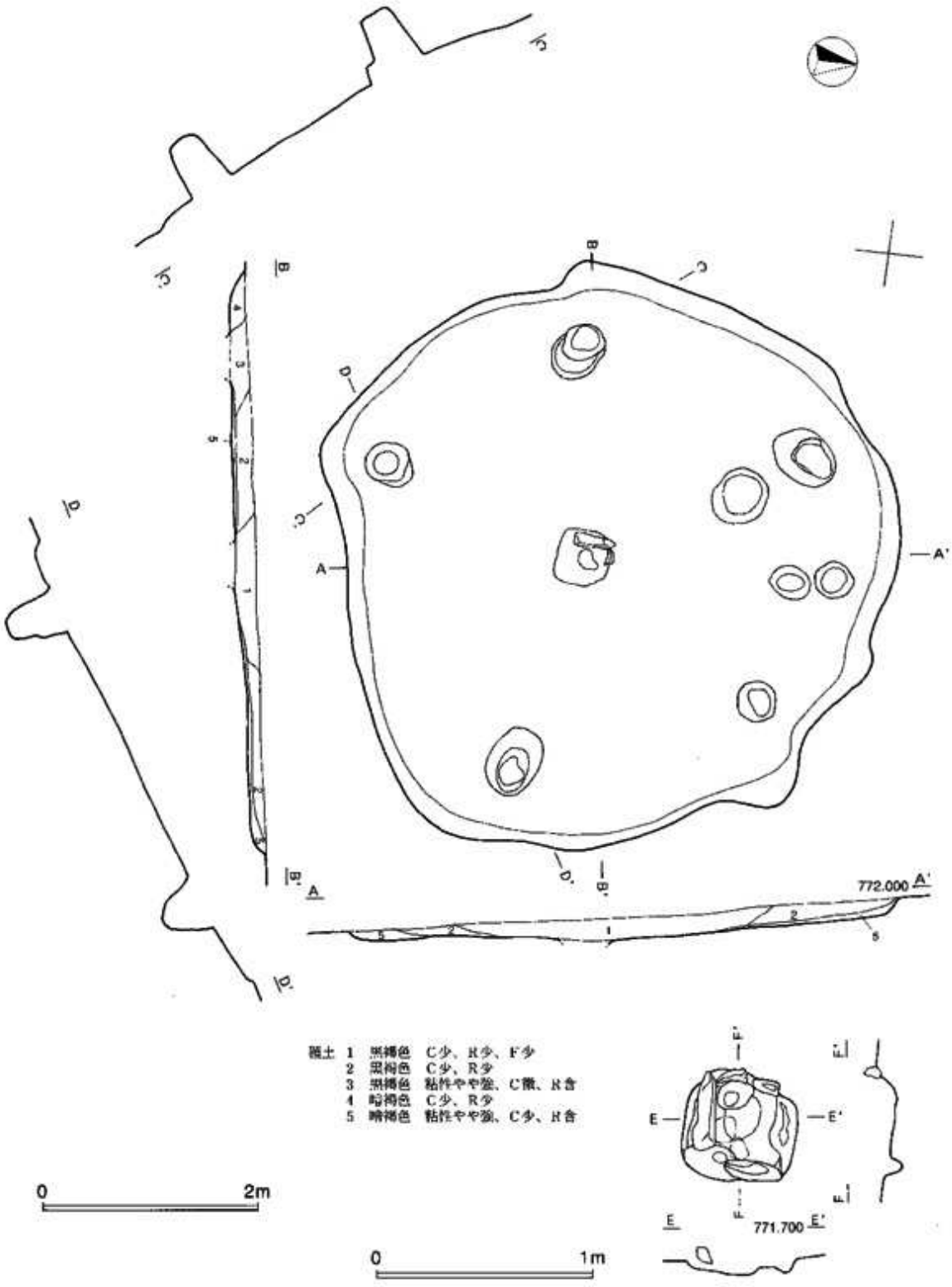
第36図 1・16号溝跡断面図 (S＝1/40・1/80)



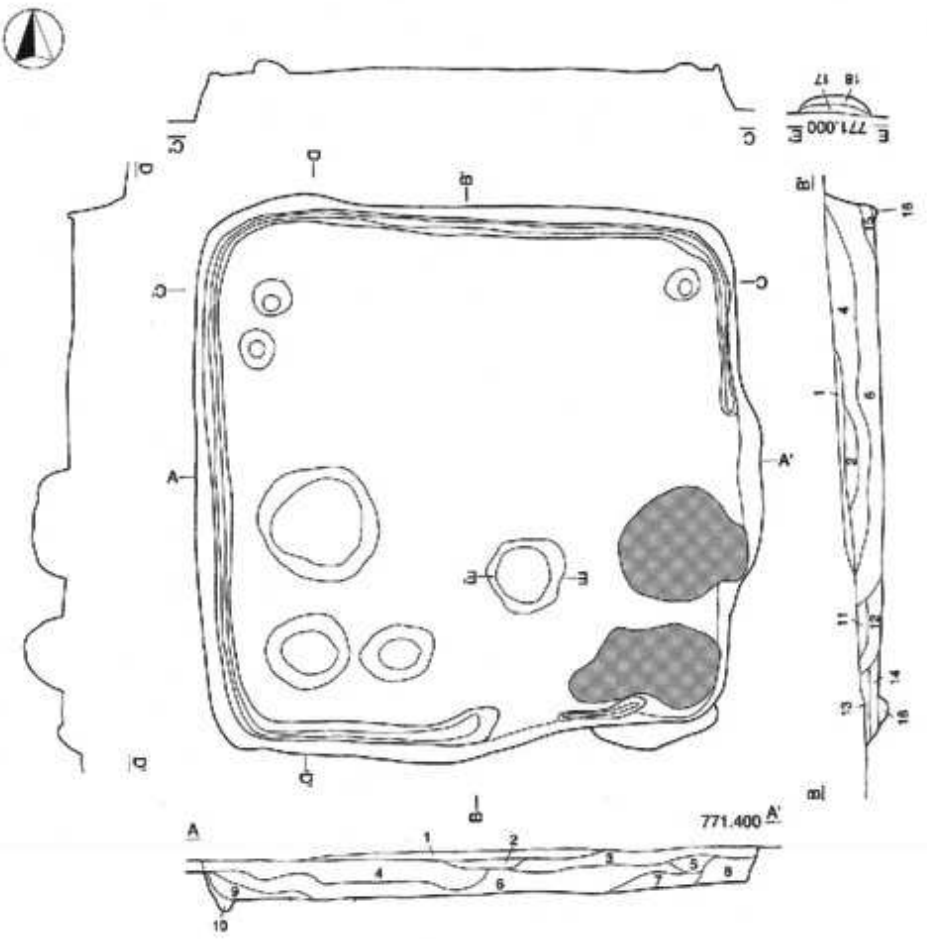
第37図　甲ッ原遺跡の範囲と調査地点（S＝1/5,000）



第38図　甲ッ原遺跡第５地点グリッド配置図（S＝1/1600）

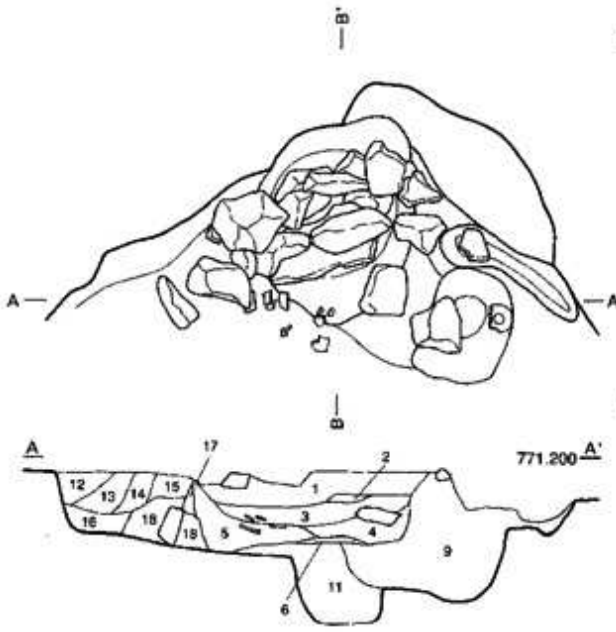


第39図　1号住居跡（S＝1/60）　炉（S＝1/30）

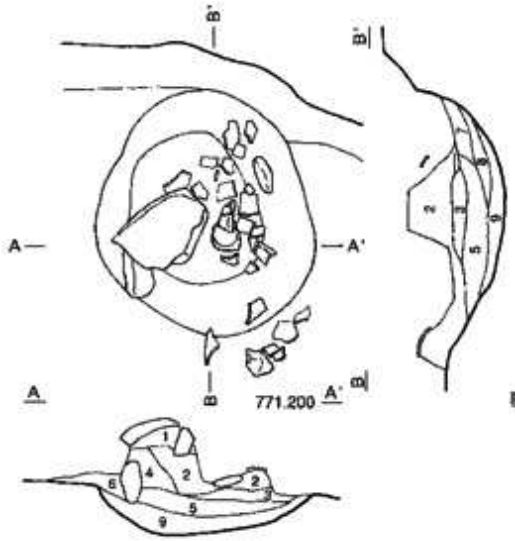


覆土	1	黒褐色	R少
	2	黒色	R微
	3	黒褐色	C微、R少
	4	黒褐色	C少、R少
	5	黒色	C少、R少、F少
	6	黒褐色	粘性やや強、C少、R少、F少
	7	黒褐色	粘性やや強、C少、R微、F微
	8	黒褐色	C少、R微、F
	9	黒色	しまりやや弱、C含、R微
	10	暗褐色	粘性やや強、C微、R少
	11	黒褐色	C少、R少
	12	黒褐色	C微、R少
	13	暗褐色	粘性やや強、R含
	14	黒褐色	粘性やや強、C微、R少
	15	黒褐色	粘性やや強、しまりやや弱、R微
	16	暗褐色	粘性やや強、C微、R少
	17	暗褐色	粘性強、しまり強、C多、R微、F含、黒色土少
	18	赤褐色	粘性弱、しまりやや弱、C少、R少、F多

第40図　2号住居跡（S＝1/60）



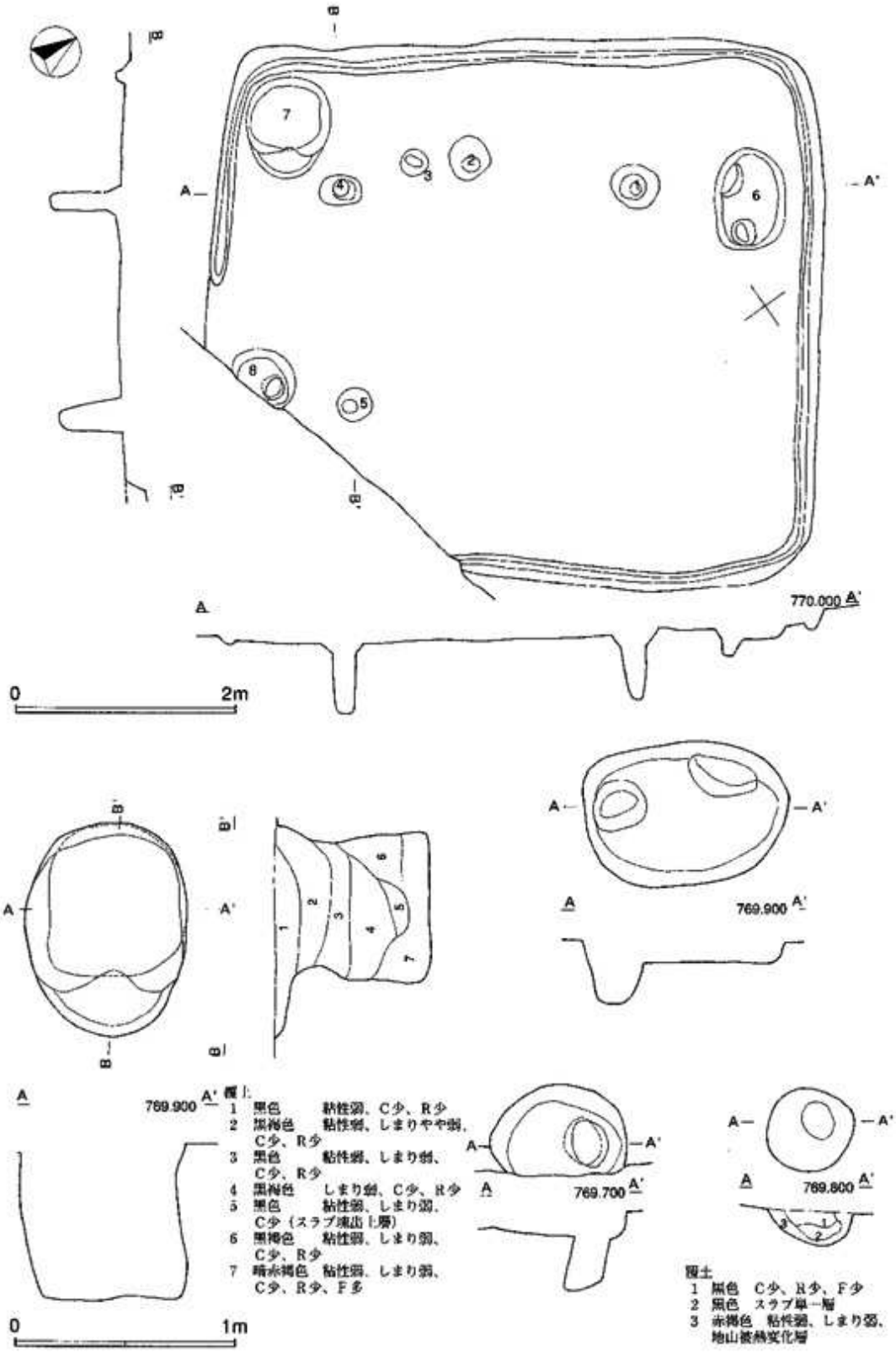
覆土
1 黒色 粘性弱、C含、R少、F微
2 暗褐色 粘性強、R質
3 黒色 C含、R少
4 黒褐色 C含、R少、F少
5 暗黄色 粘性弱、C少、R多、F少
6 赤褐色 粘性弱、しまりやや強、C少、F多
7 黒色 しまりやや弱、C少、R少
8 黒褐色 C少、R少
9 暗赤褐色 粘性やや強、C少、F多
10 暗赤褐色 粘性やや強、C少、F多
11 暗褐色 C少、F含
12 暗黄褐色 粘性強、ローム質
13 黒褐色 粘性やや弱、C少、F多
14 黒褐色 粘性やや強、C少、F少
15 黒色 粘性やや弱、C少、R少、RB含、F少
16 暗赤褐色 粘性弱、しまり弱、C少、F多
17 赤褐色 粘性弱、C少、F多
18 暗褐色 C少、R含



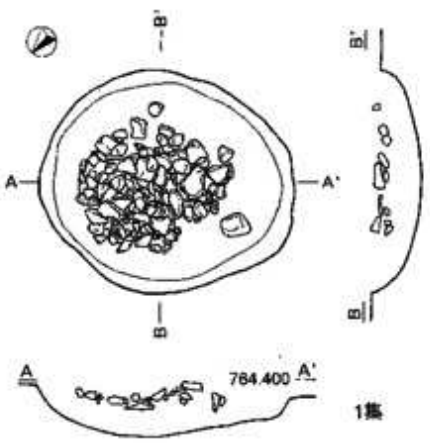
覆土 1 黒褐色 C少
2 暗褐色 粘性やや弱、C含、R含、F多
3 明褐色 粘性弱、しまり弱、焼土を含む灰層
4 暗褐色 C少、F少
5 赤褐色 粘性弱、しまり弱、焼土単一層
6 黒褐色 粘性弱、C少、R含、F含
7 暗褐色 粘性弱、しまり弱、C少、F多
8 黒褐色 粘性弱、しまり弱、C少、R少、F含
9 暗褐色 C少、R含

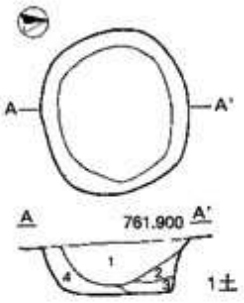
0 1m

第41図　2号住居跡　カマド（S＝1/30）

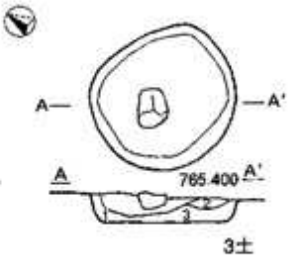


第42図　3号住居跡（S＝1/60）　各施設（S＝1/30）

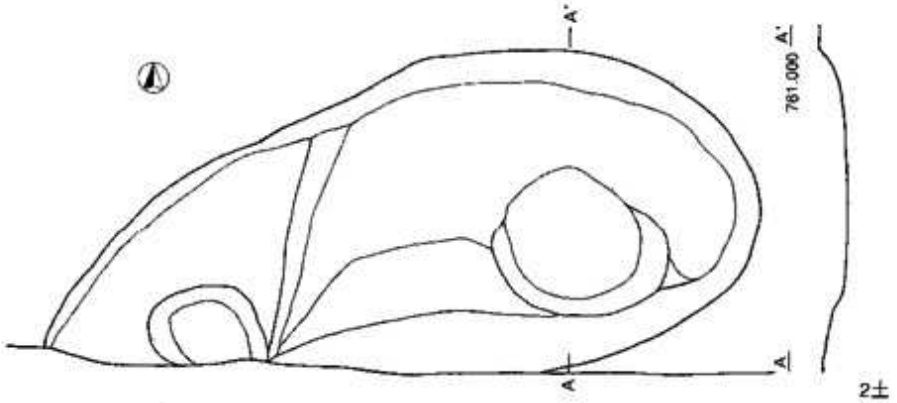


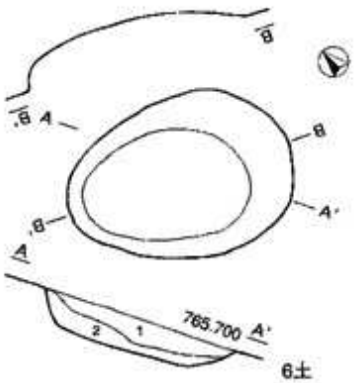


覆土
1 黒褐色 粘性やや弱、しまり強、C微、R少
2 黒褐色 しまり強、C微、R少
3 黒褐色 C少、R少、RB含
4 暗褐色 C少、R含

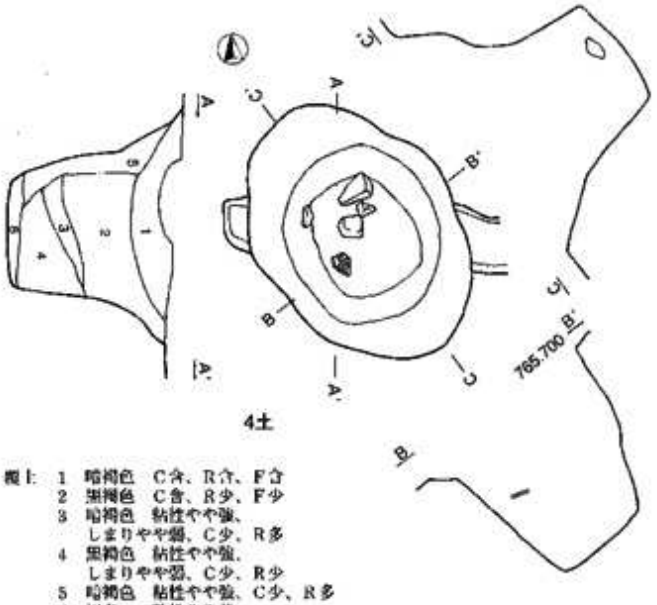


覆土
1 暗褐色 しまりやや強、C少、R含
2 暗黄褐色 しまりやや強、C微、R多、F多
3 暗黄褐色 しまりやや強、C微、R微





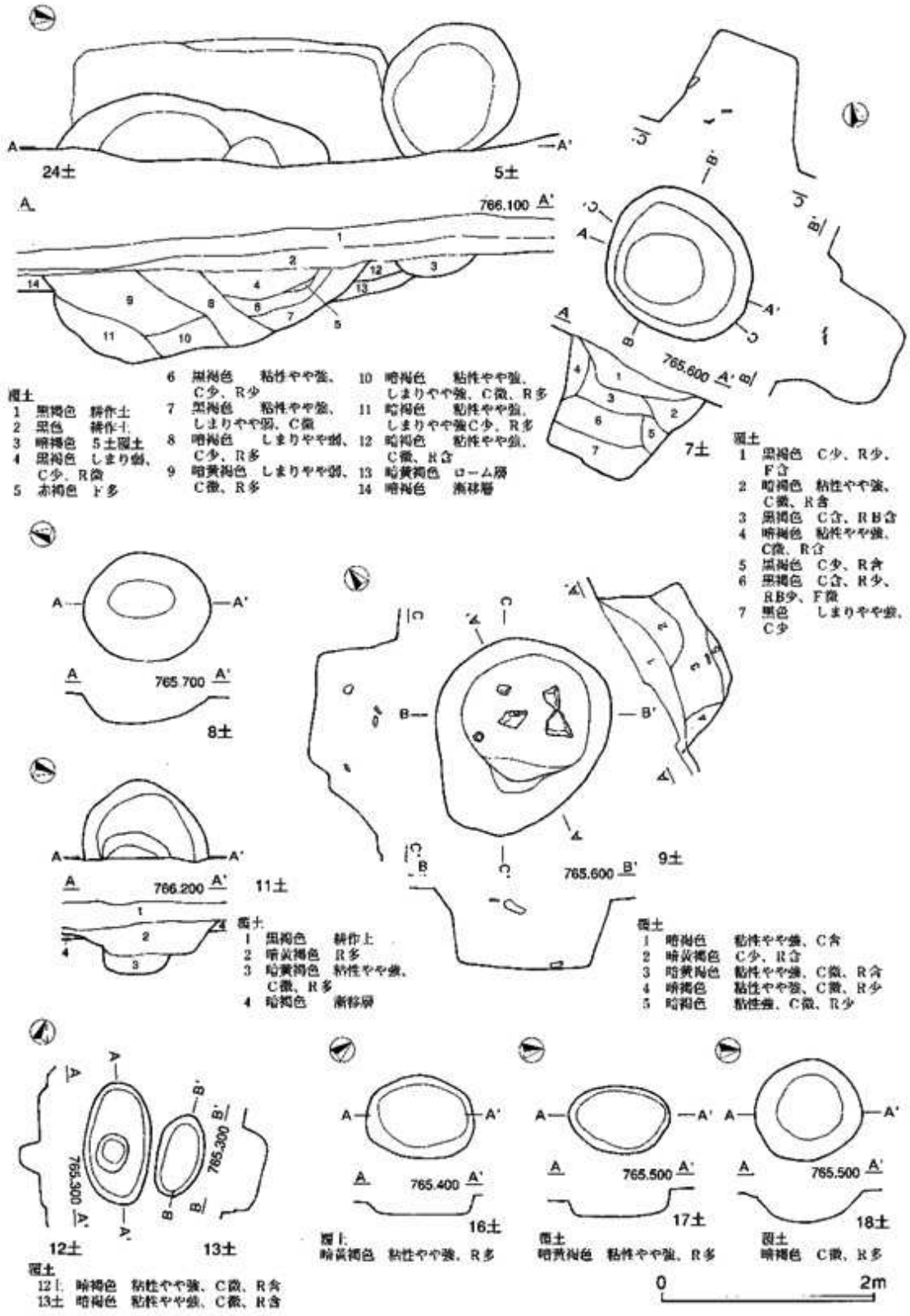
覆土 1 暗褐色 しまりやや強、C微、R多
2 暗黄褐色 C微、R微



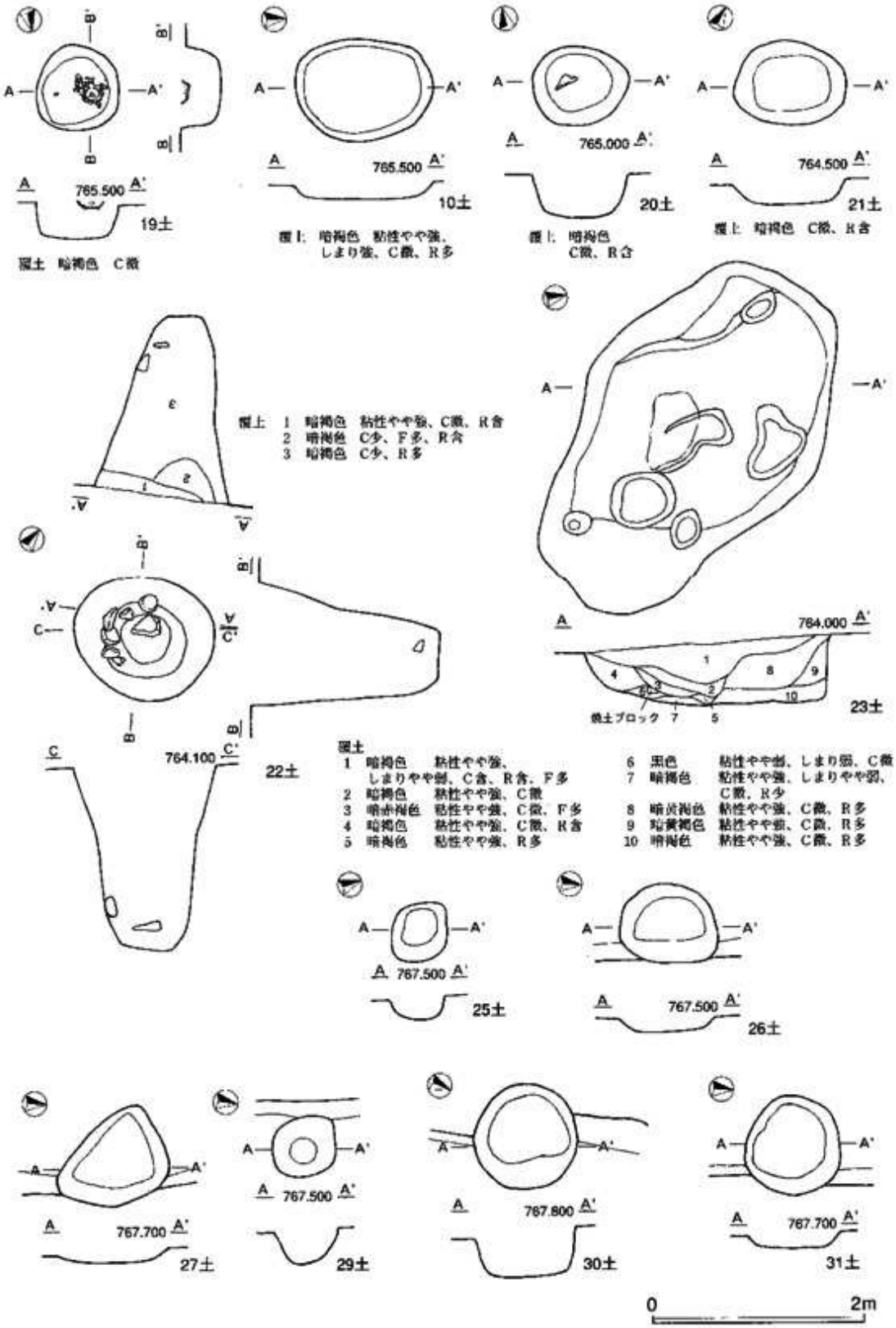
覆土 1 暗褐色 C含、R含、F含
2 黒褐色 C含、R少、F少
3 暗褐色 粘性やや強、しまりやや弱、C少、R多
4 黒褐色 粘性やや強、しまりやや弱、C少、R少
5 暗褐色 粘性やや強、C少、R多
6 黒色 粘性やや強、しまりやや弱、C少、R少

0 2m

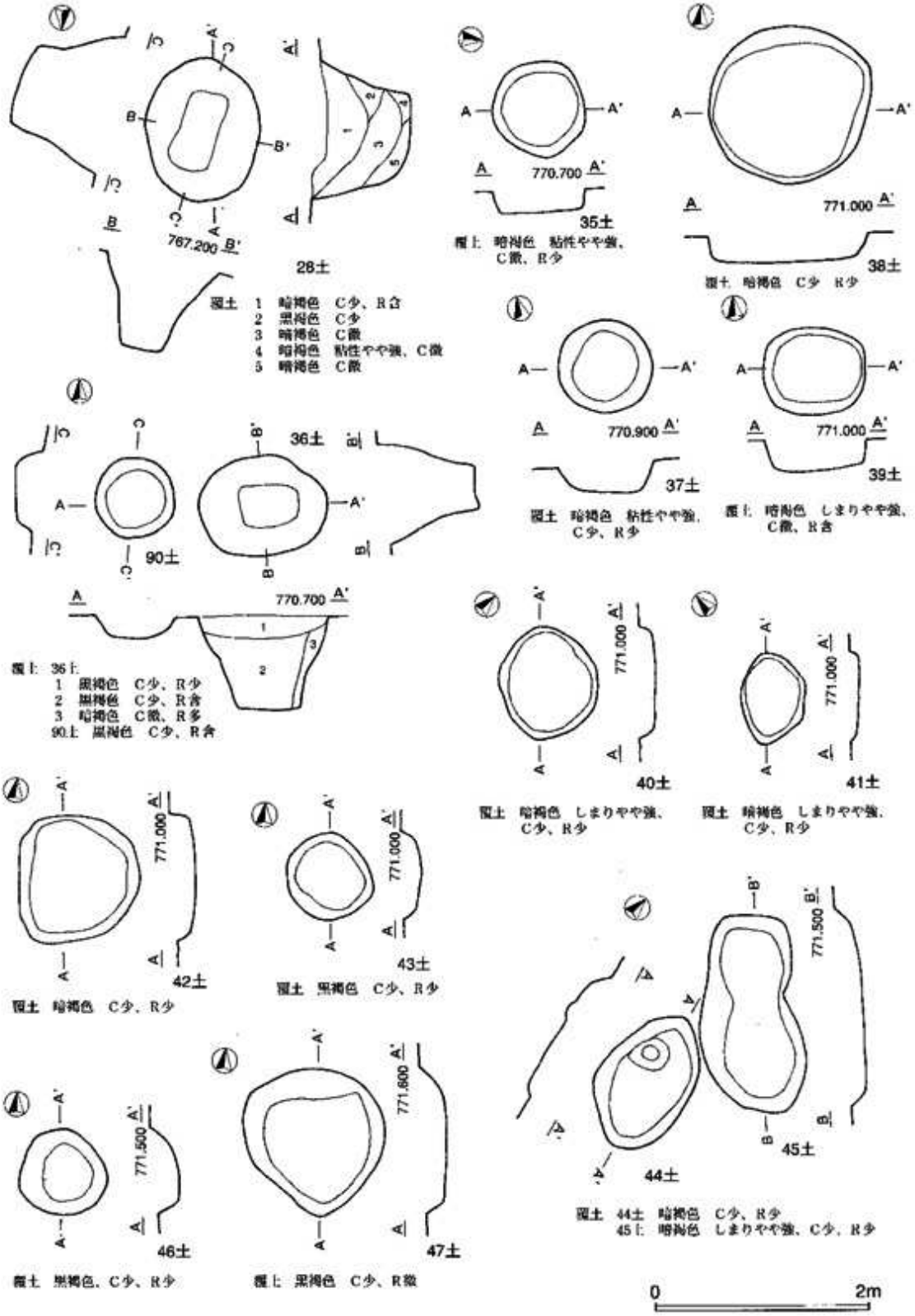
第43図 1号集石 1～4・6号土坑（S＝1/60）



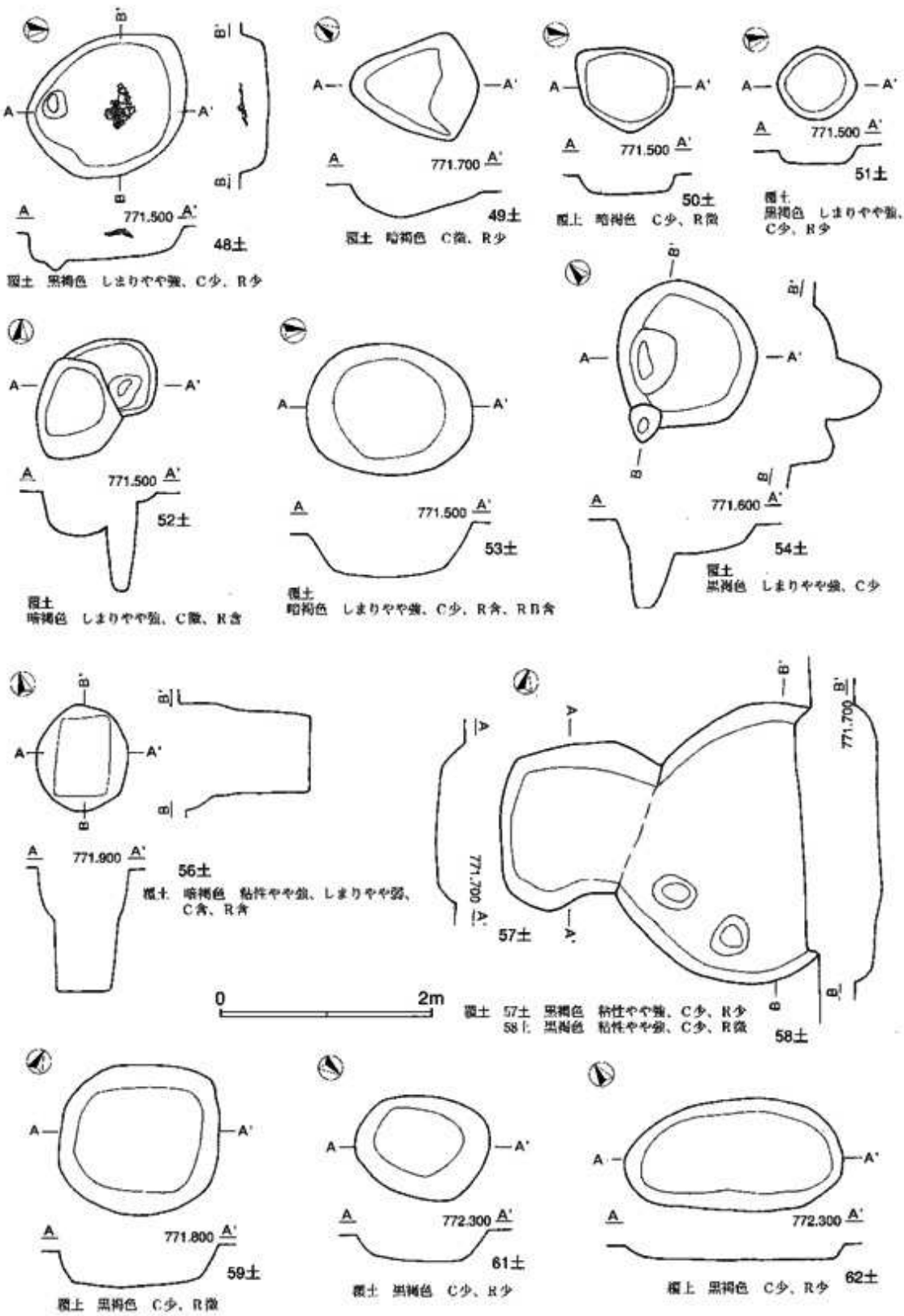
第44図　5・7～9・11～13・16～18号土坑（S＝1/60）



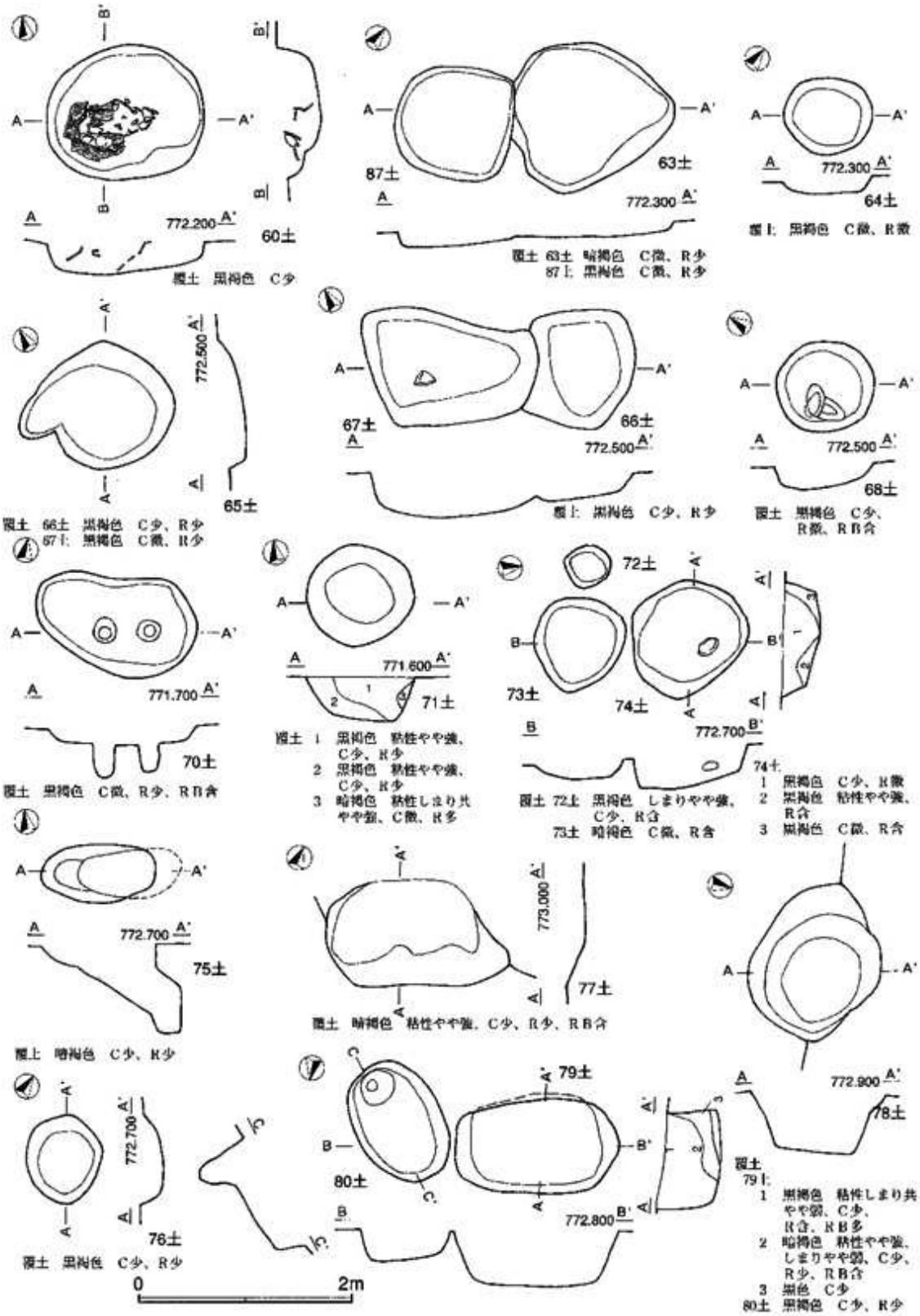
第45図 10·19～23·25～27·29～31号土坑（S＝1/60）



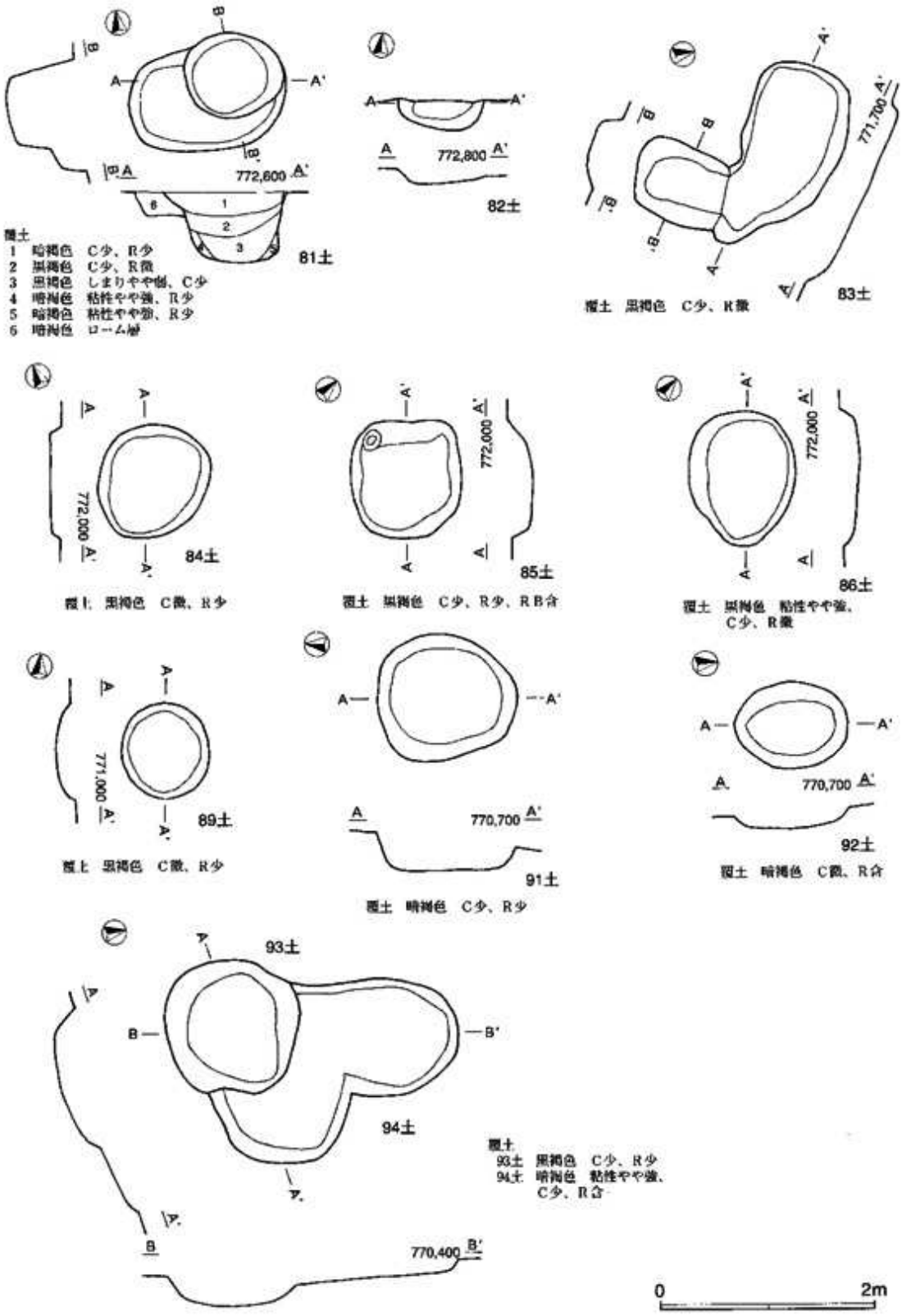
第46図 28·35～47·90号土坑（S＝1/60）



第47図　48～54・56～59・61・62号土坑（S＝1/60）



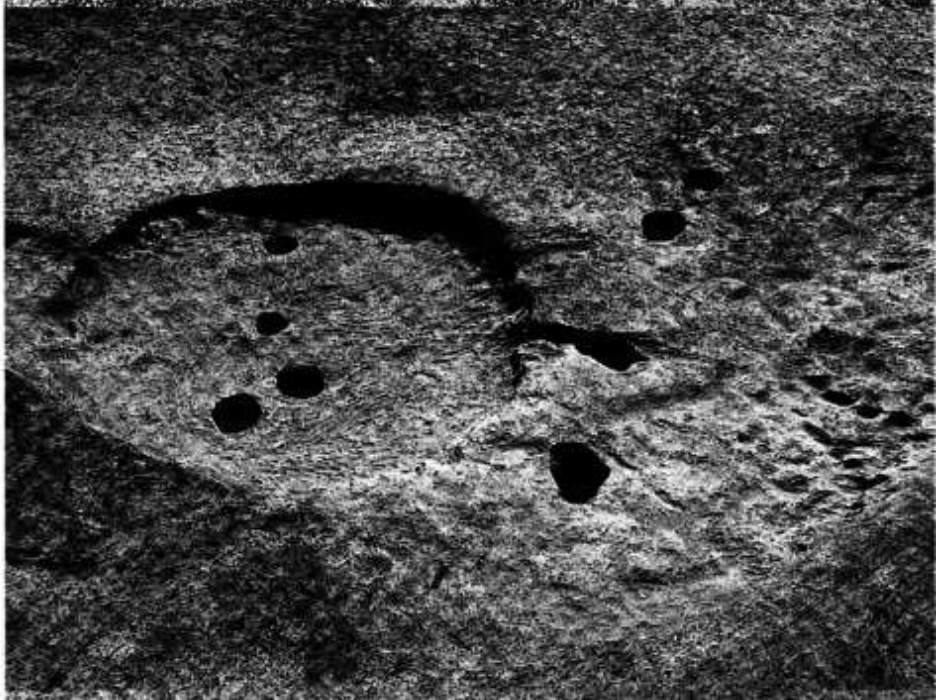
第48図 60·63~68·70~80·87号土坑（S＝1/60）



第49図 81～86·89·91～94号土坑（S＝1/60）

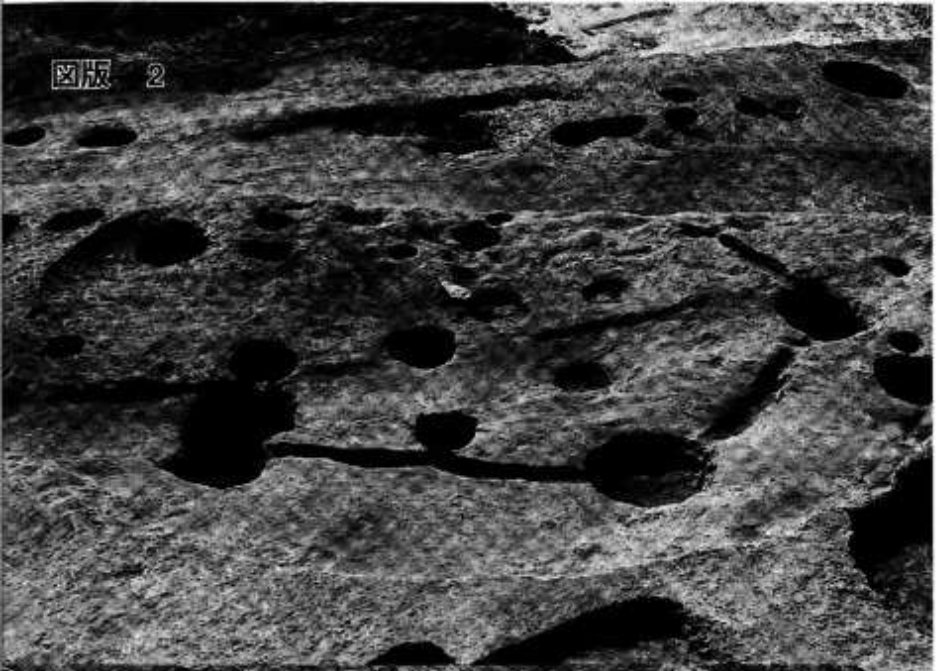
写真図版

1号住居跡　炉



2・3号住居跡

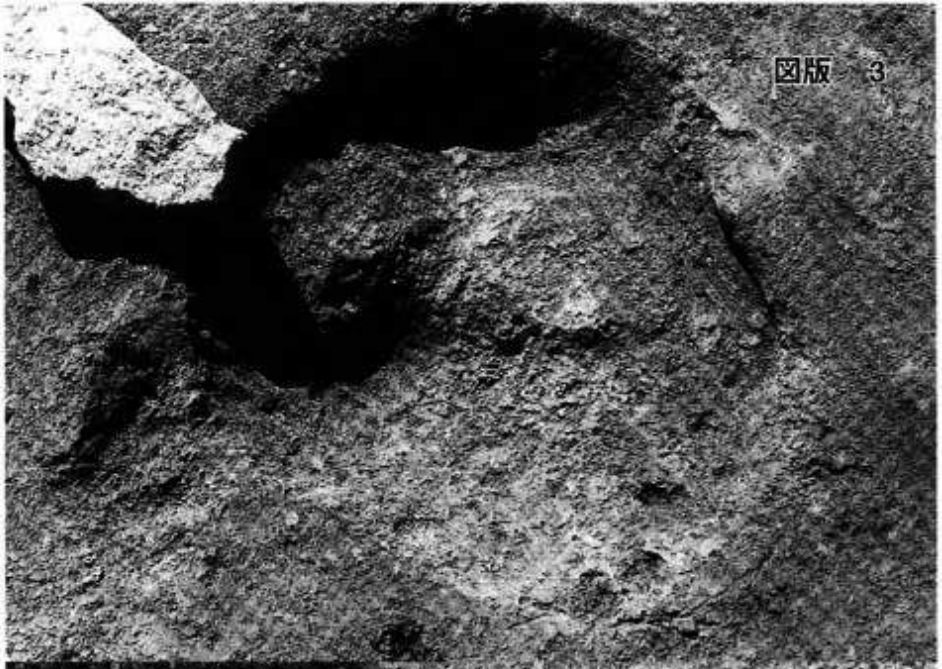
4号住居跡



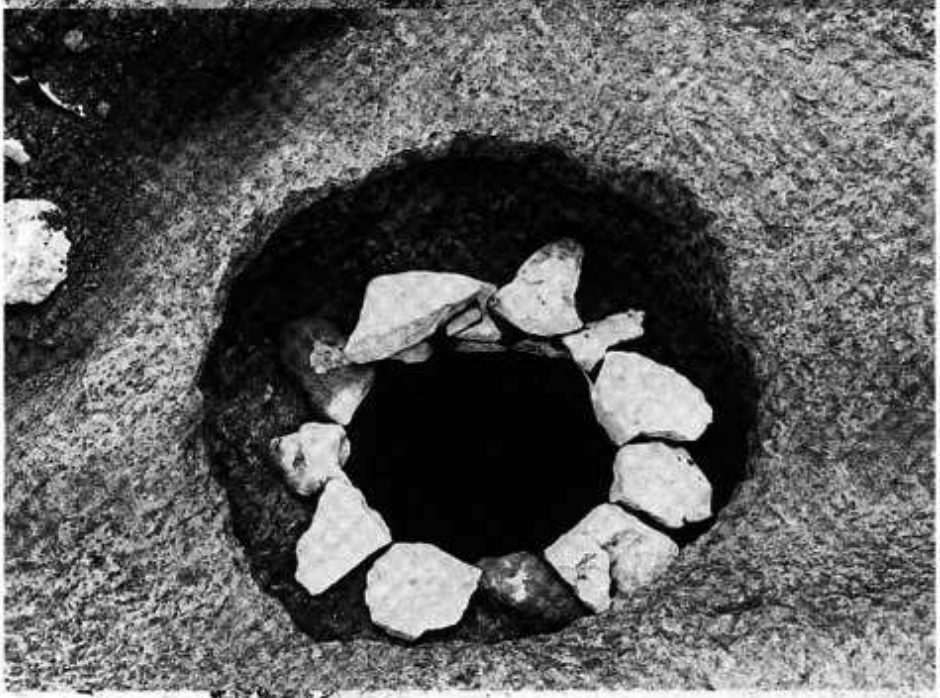
5号住居跡

5号住居跡

5号住居跡
遺物出土状況

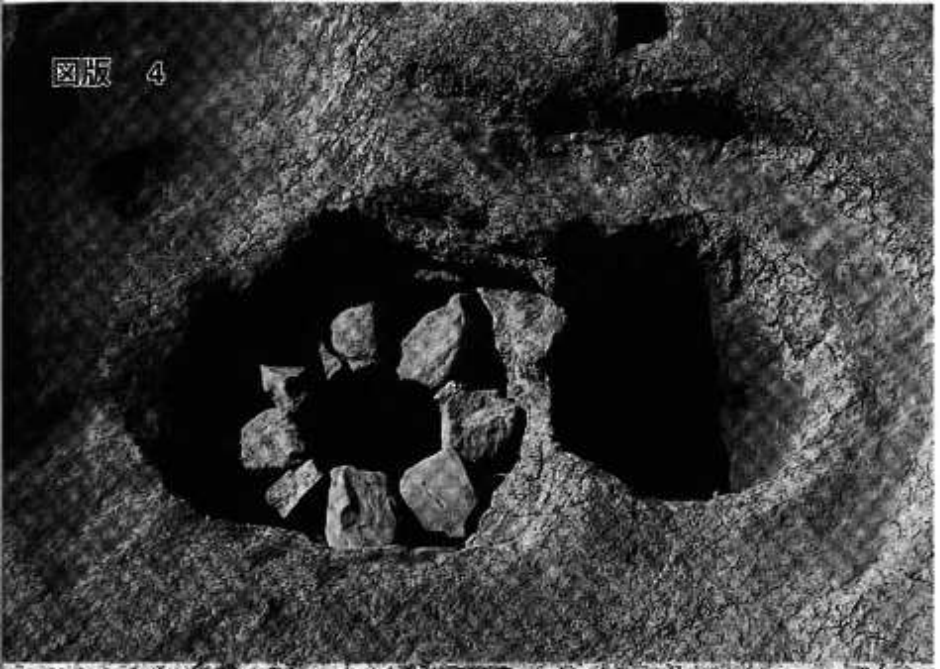


5号住居跡　炉

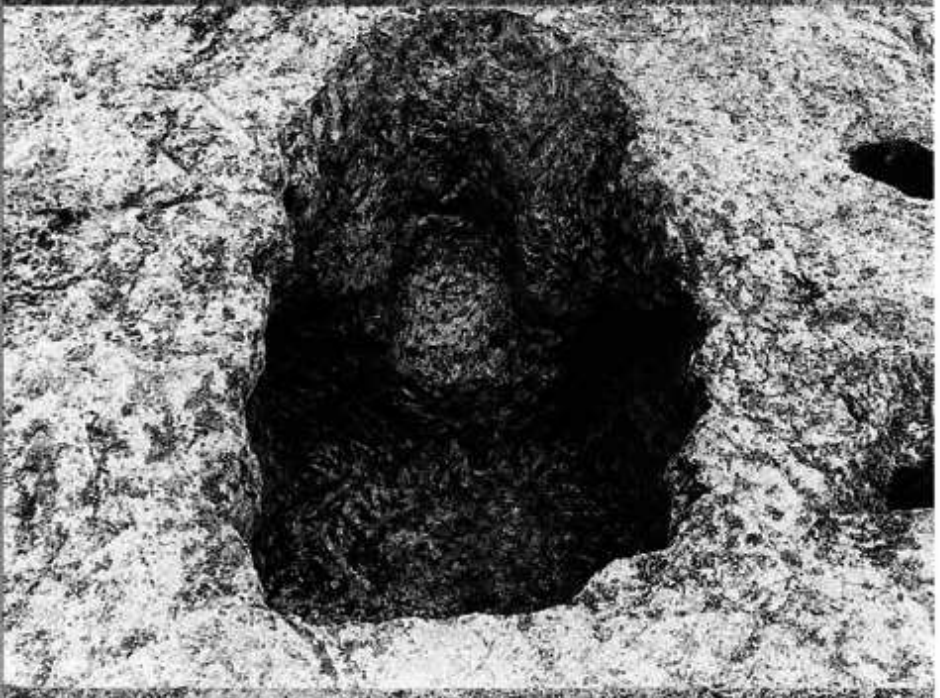


1号井戸跡

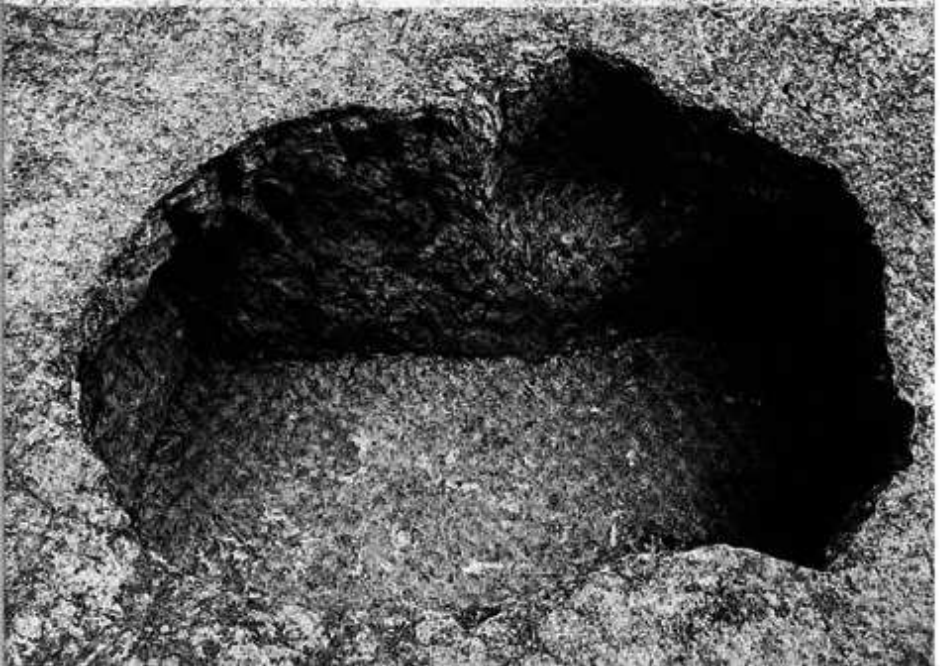
1号井戸跡
石組除去後



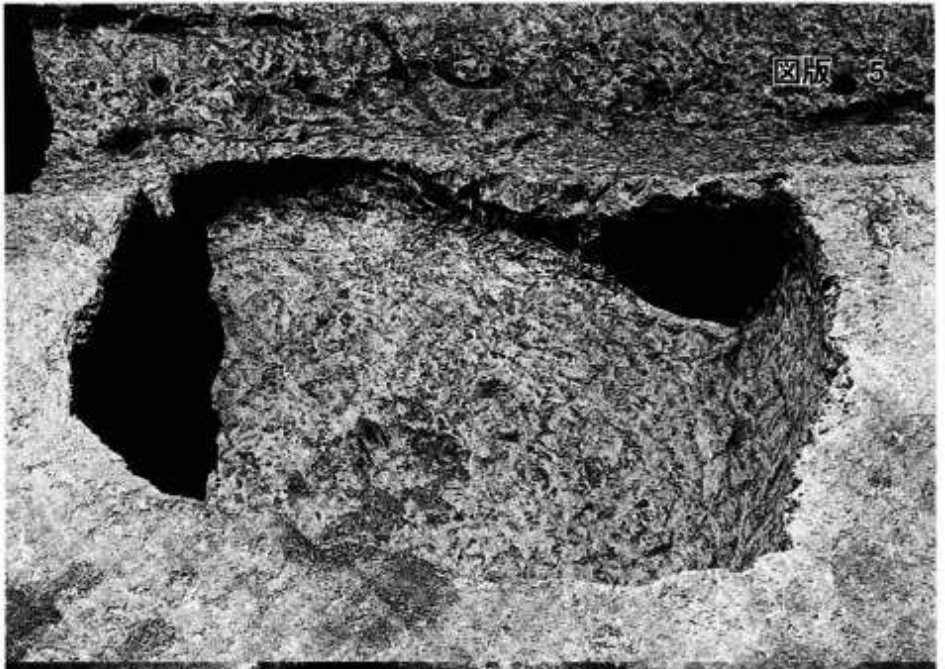
2・3号井戸跡



1号地下式坑



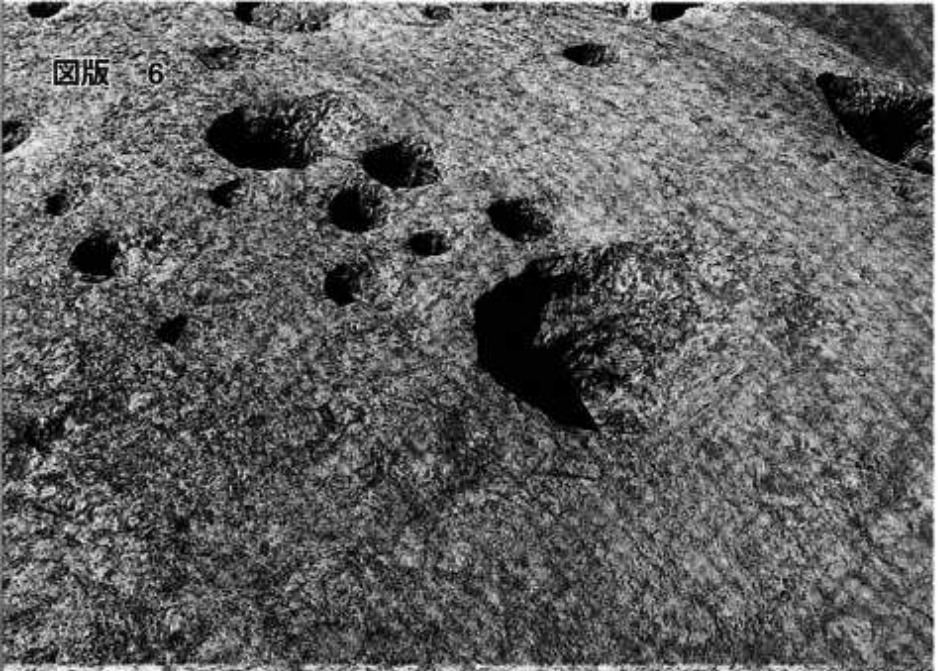
2号地下式坑



3号地下式坑

4・5号地下式坑

6号地下式坑



9号地下式坑

11号地下式坑

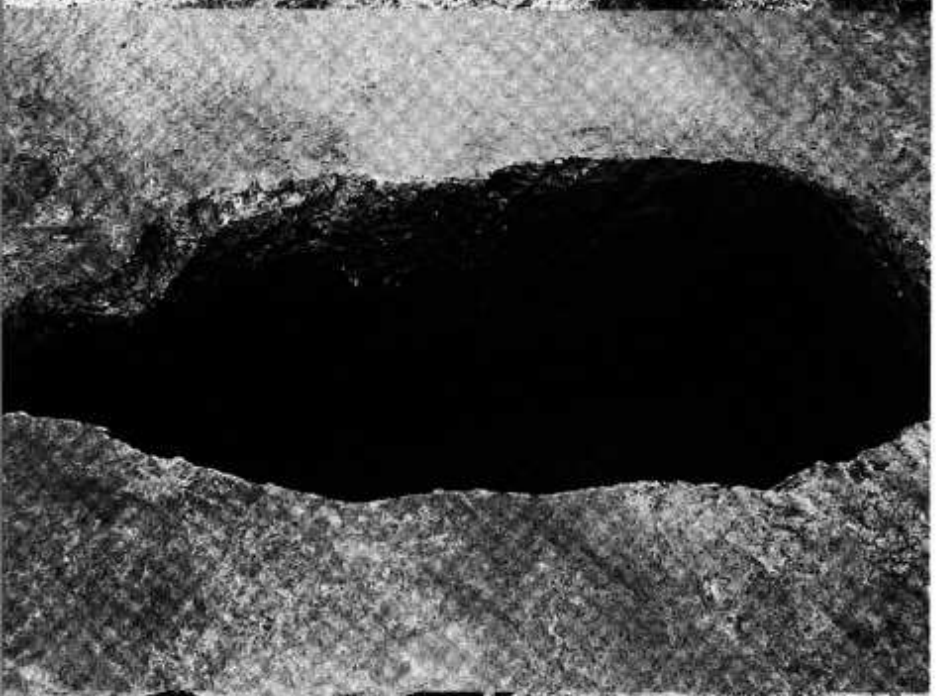
12号地下式坑

13号地下式坑

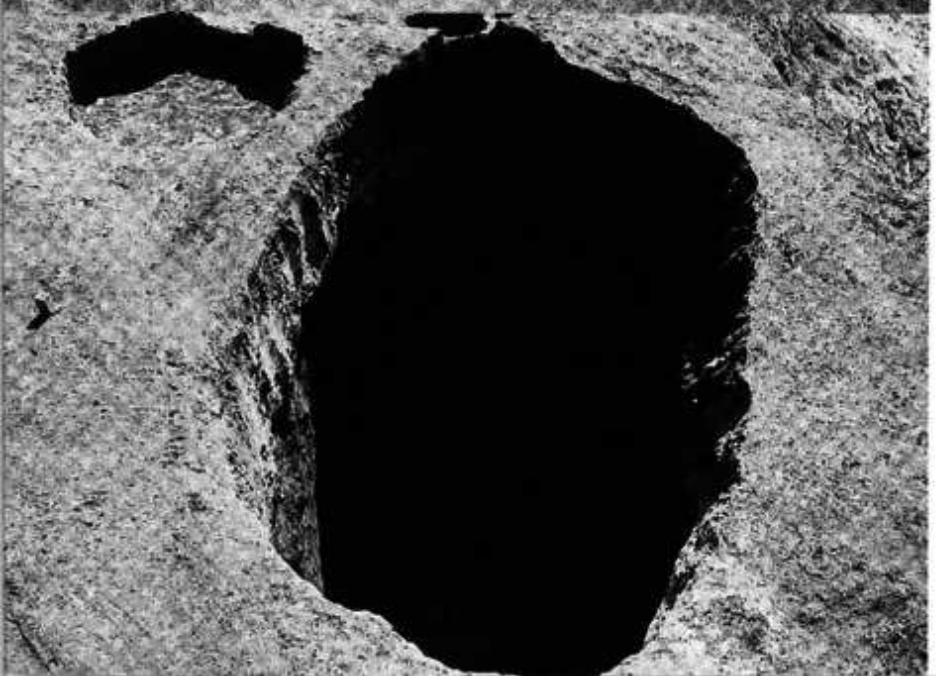
14号地下式坑

15号地下式坑

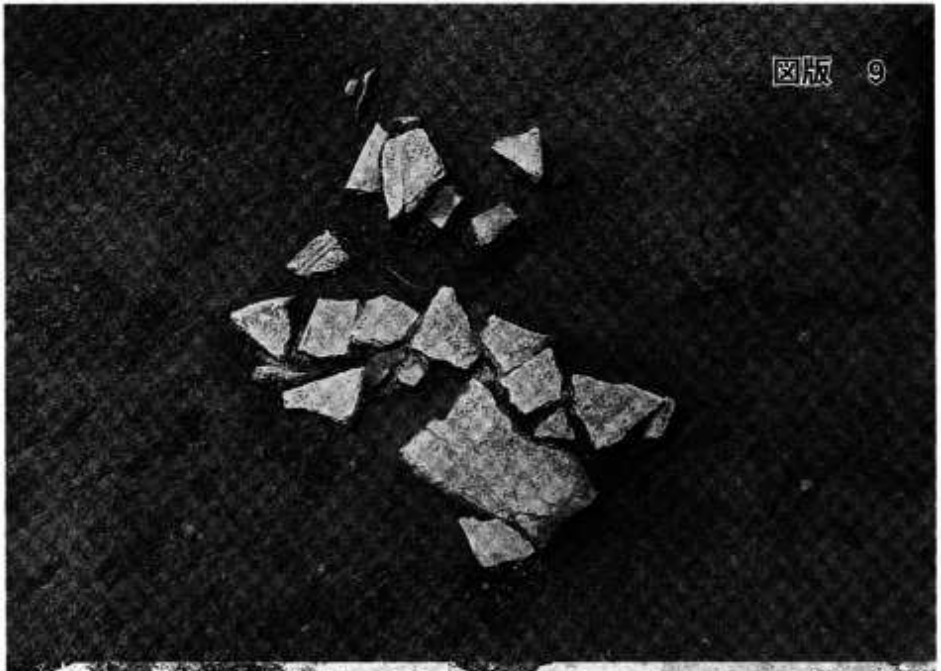
16号地下式坑
土層断面



17号地下式坑

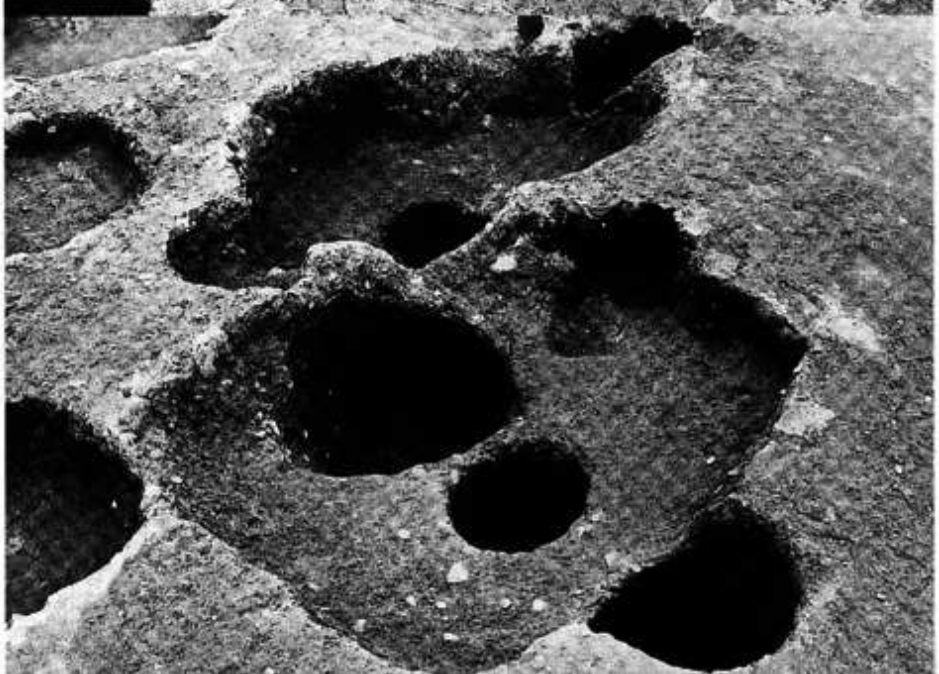


18号地下式坑



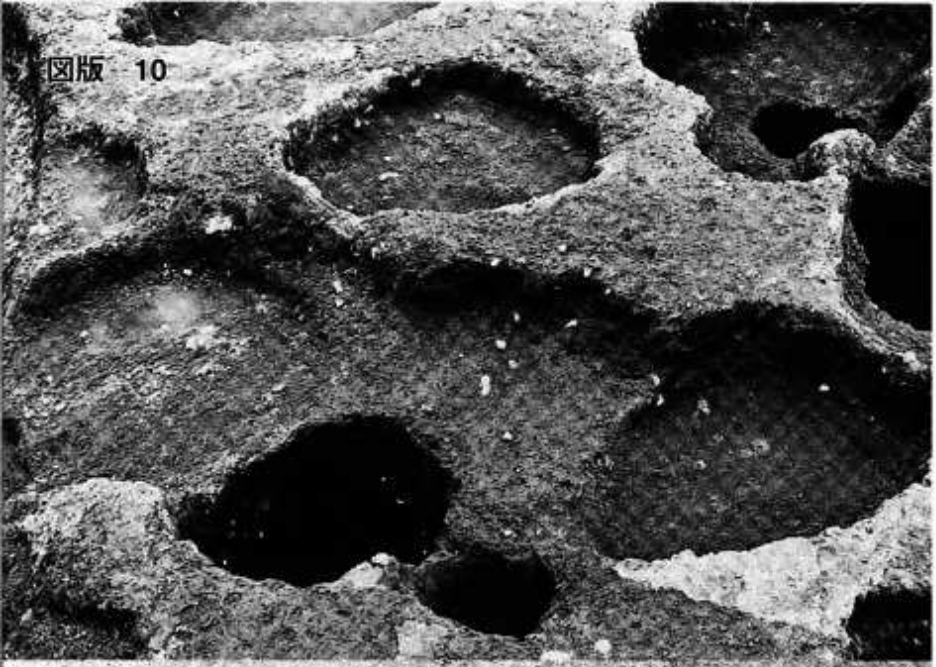
1号土坑
遺物出土状況

21号土坑



25·26号土坑

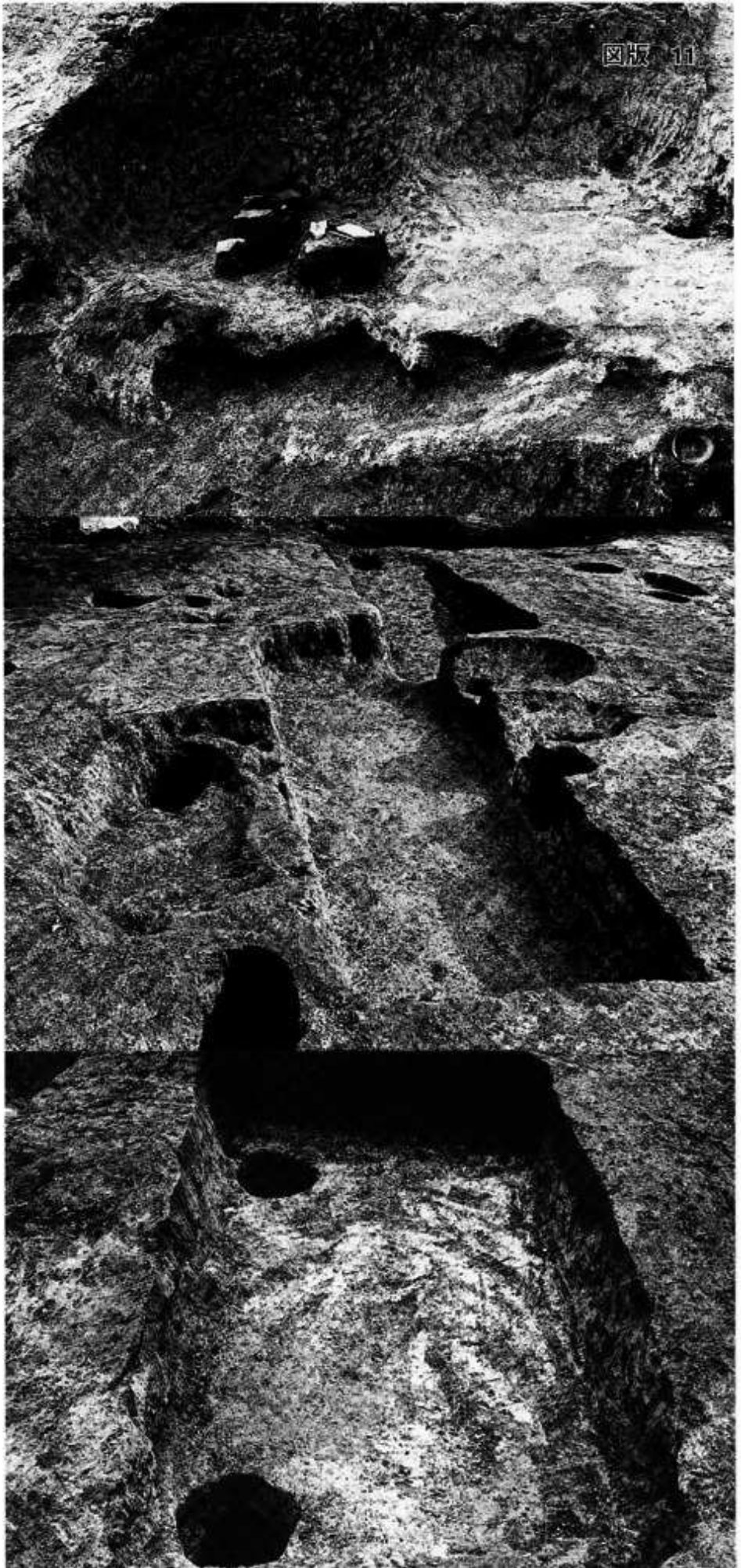
図版 10



27·28号土坑

29·30号土坑

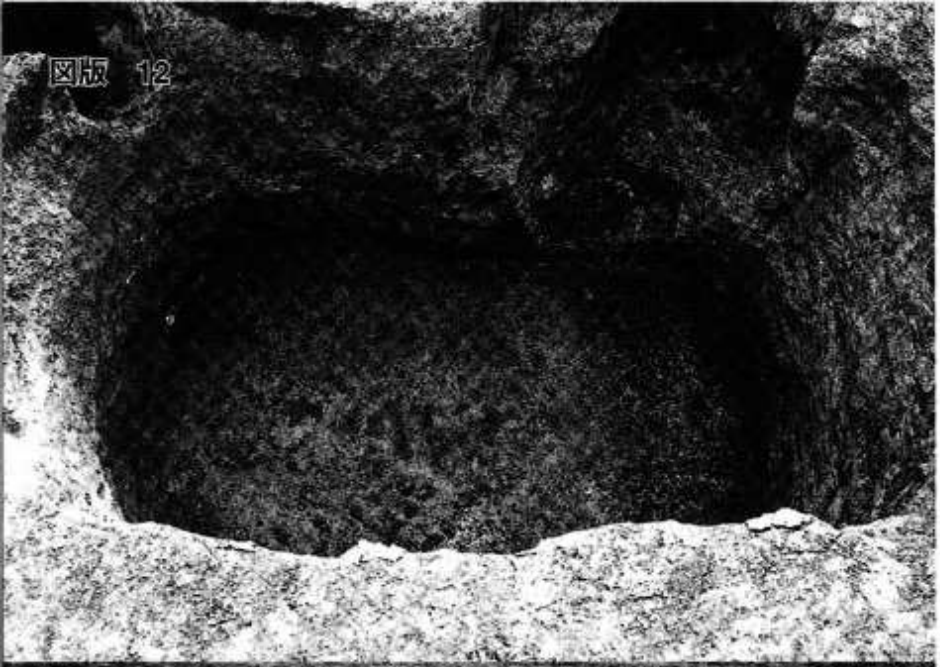
37号土坑



56·57号土坑

68·69·71号土坑

70号土坑



72号土坑

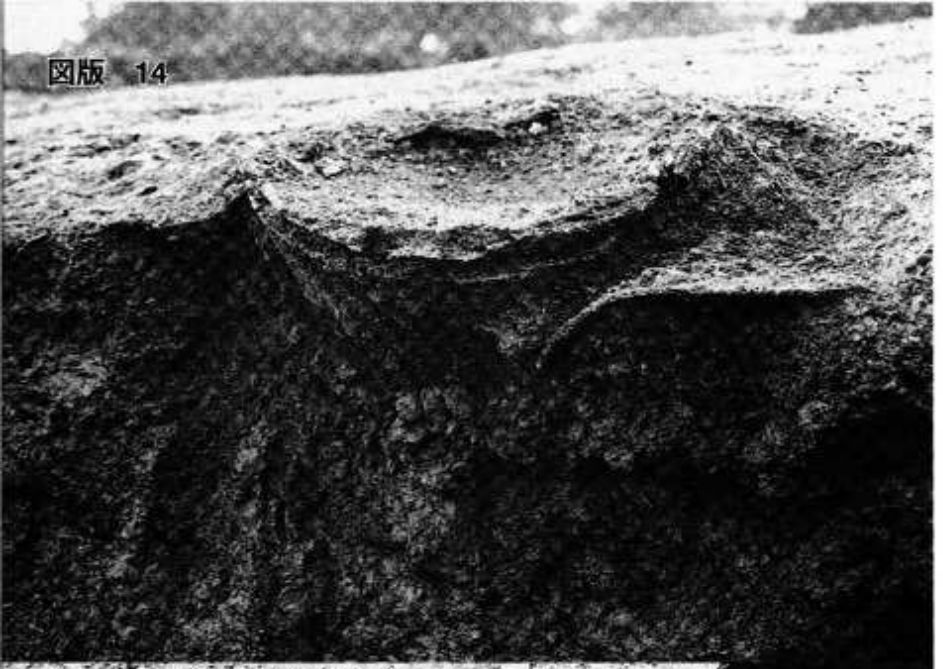
I・J－5区
土坑群

I・J－5区
土坑群

109～114号土坑

H－9区
古銭出土状況

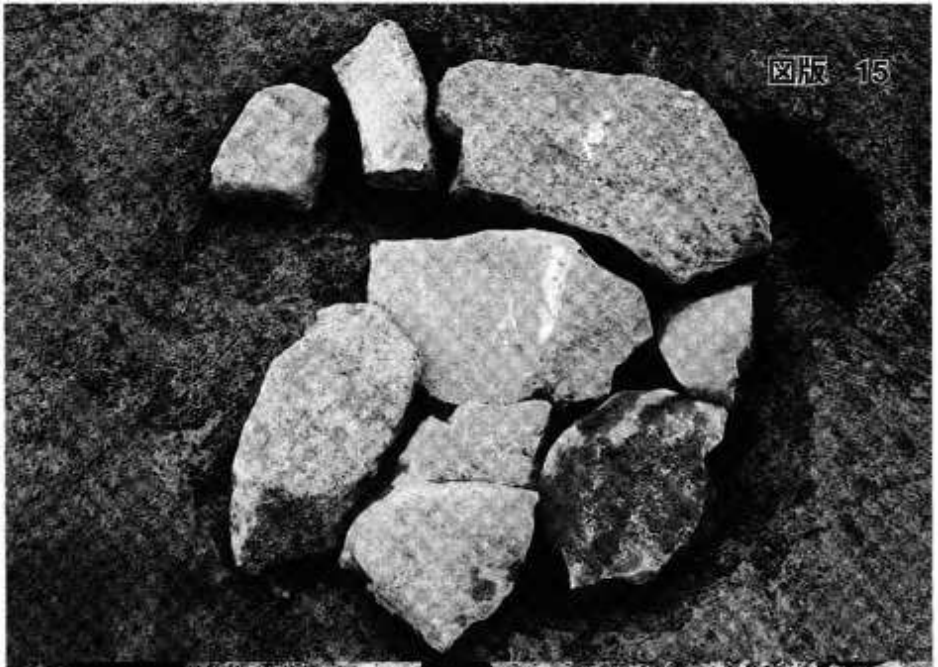
H－9区
古銭出土状況



ピット42
鉄鍋出土状況

ピット30
古瀬戸出土状況

1号集石

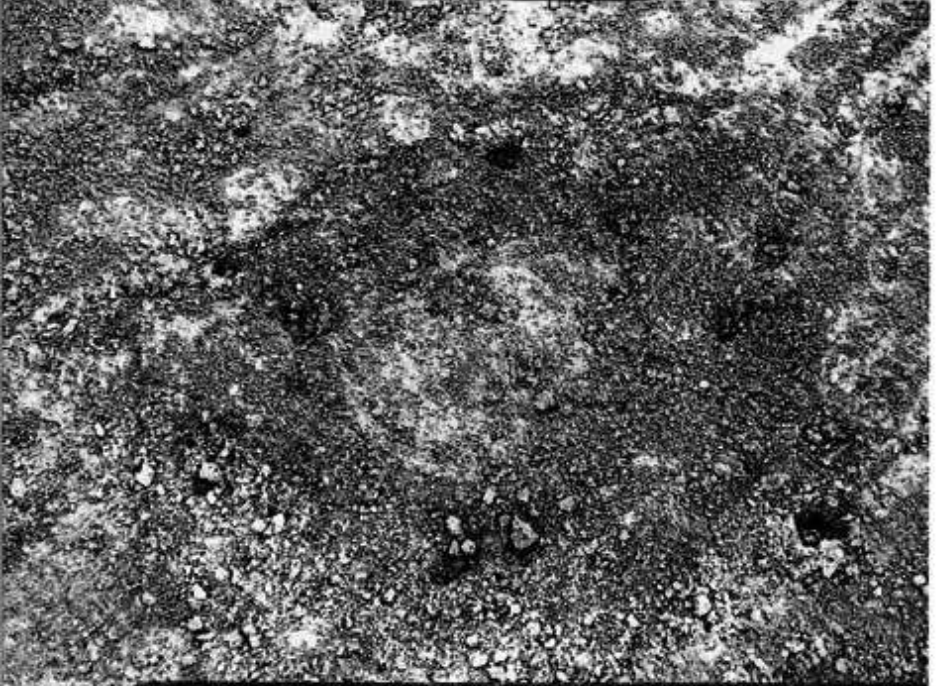


2号集石

3号集石

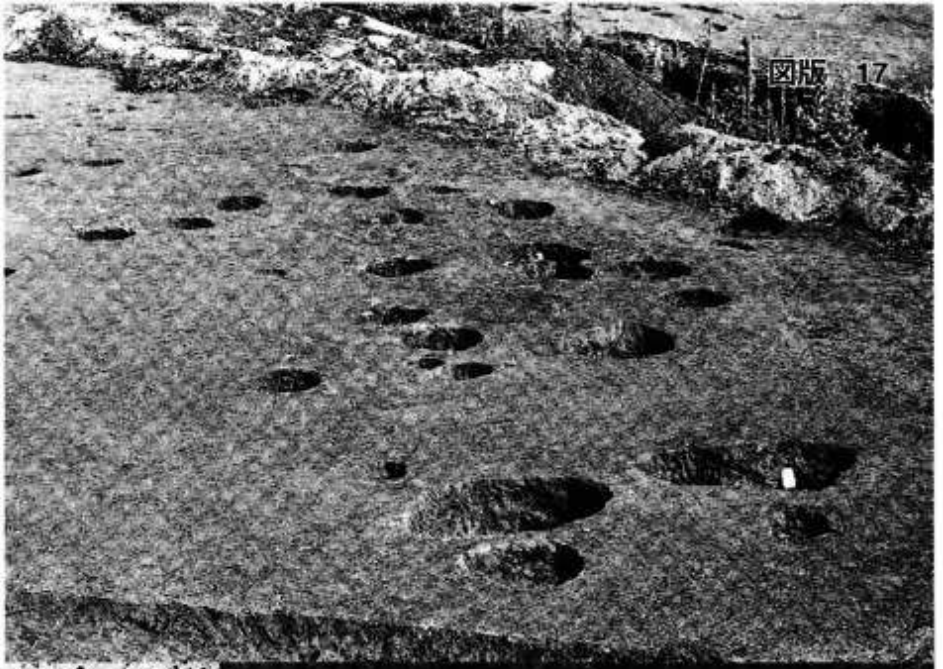
1・2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物
ピット上面礎石



2号掘立柱建物跡
焼土跡検出状況

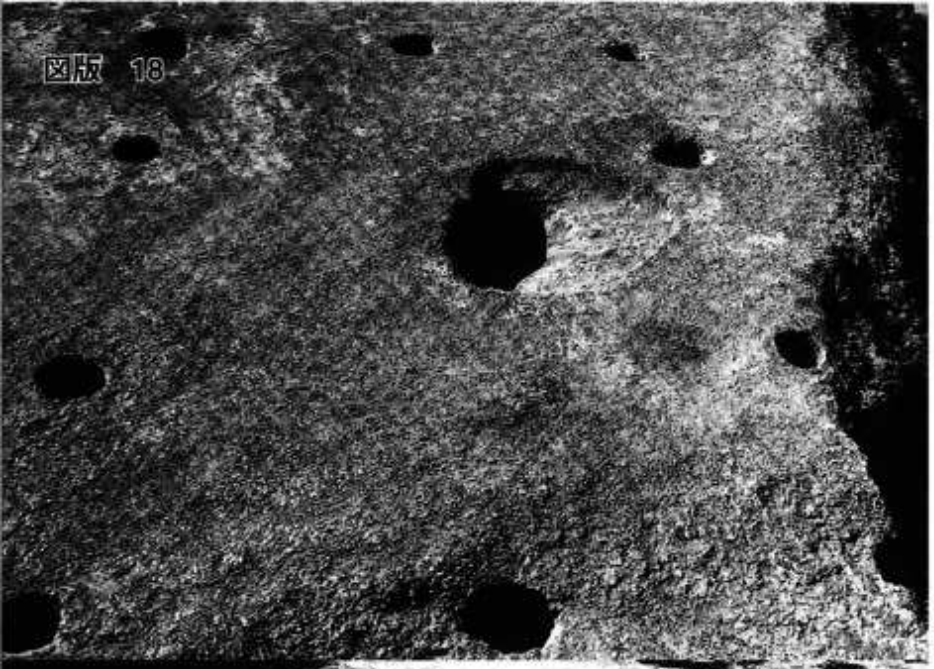
1・3号掘立柱建物跡



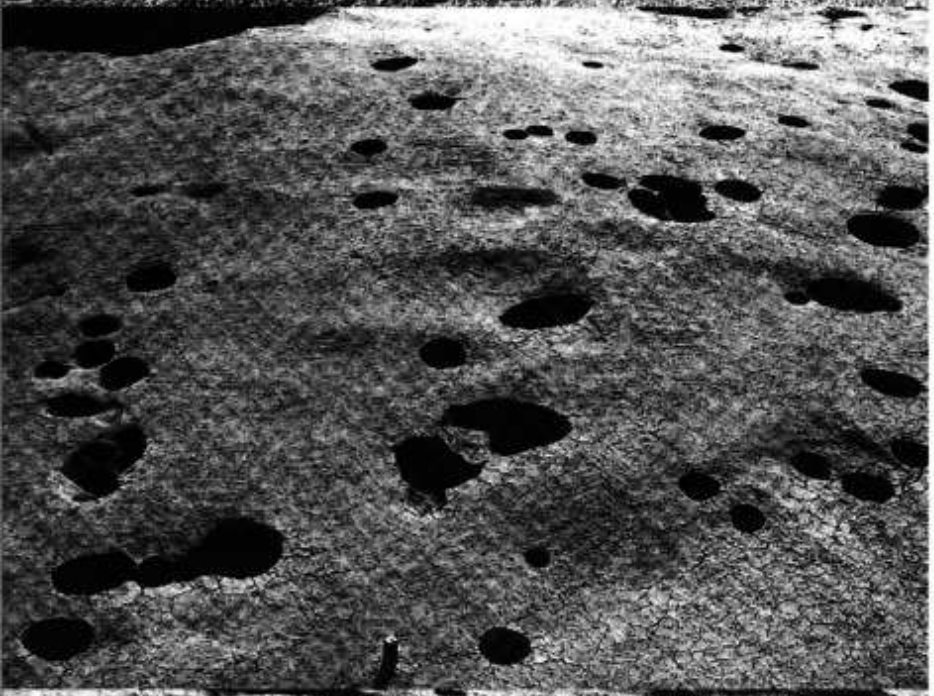
4・5号掘立柱建物跡

53号土坑

6号掘立柱建物跡



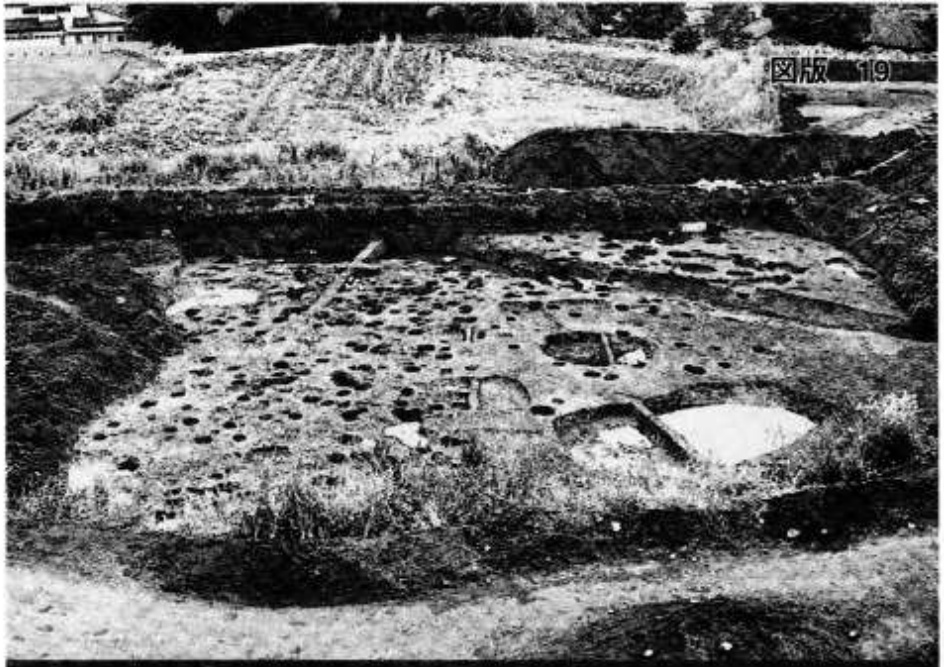
8号掘立柱建物跡



15号掘立柱建物跡

16～18号掘立柱建物跡
128号土坑

H～J－8・9区



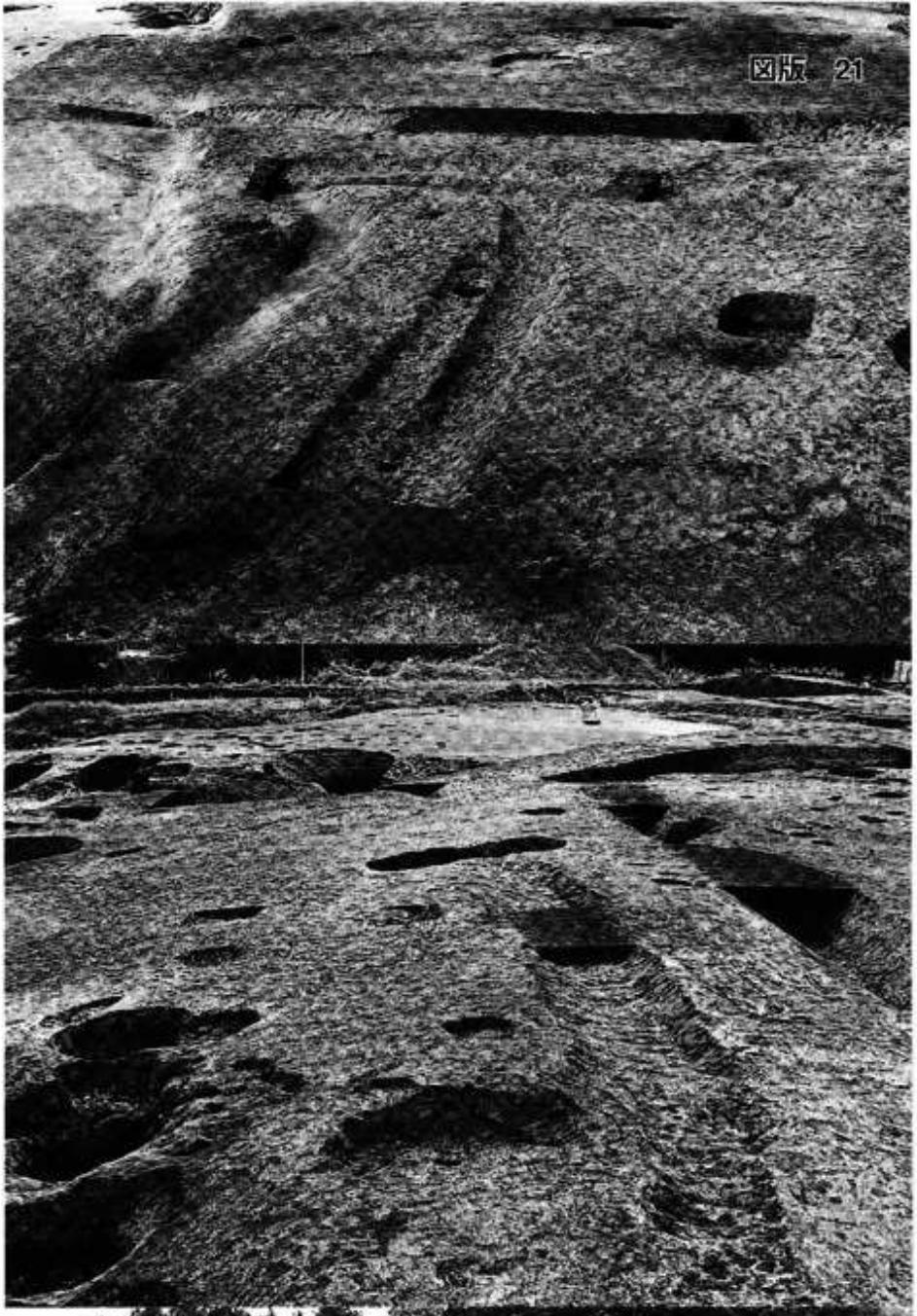
1号溝跡
E・F－5区

1号溝跡
E－4・5区
断面

1号溝跡
H－8区
土層断面

1号溝跡
水湯状遺構
遺物出土状況

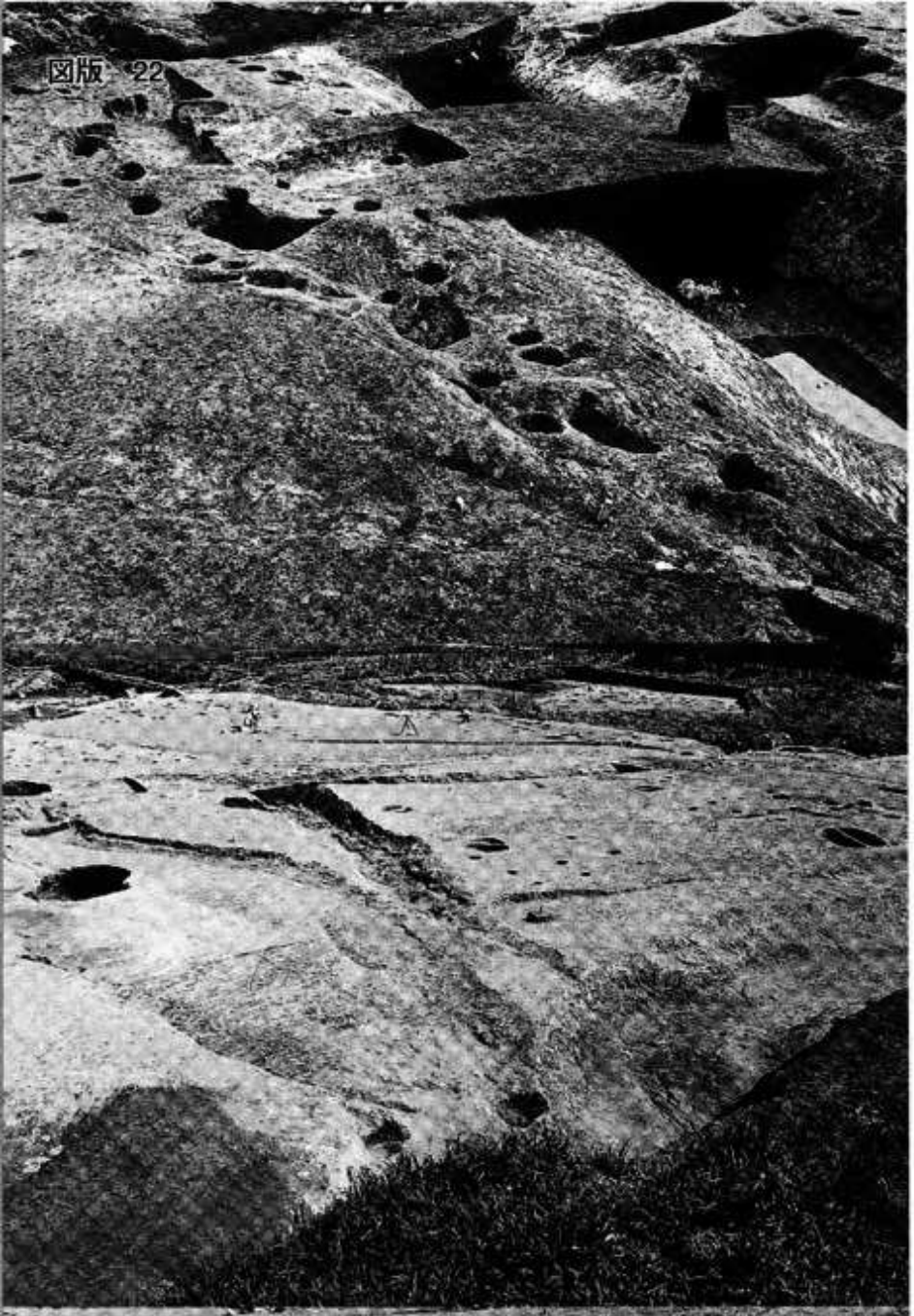
7号溝跡
遺物出土状況



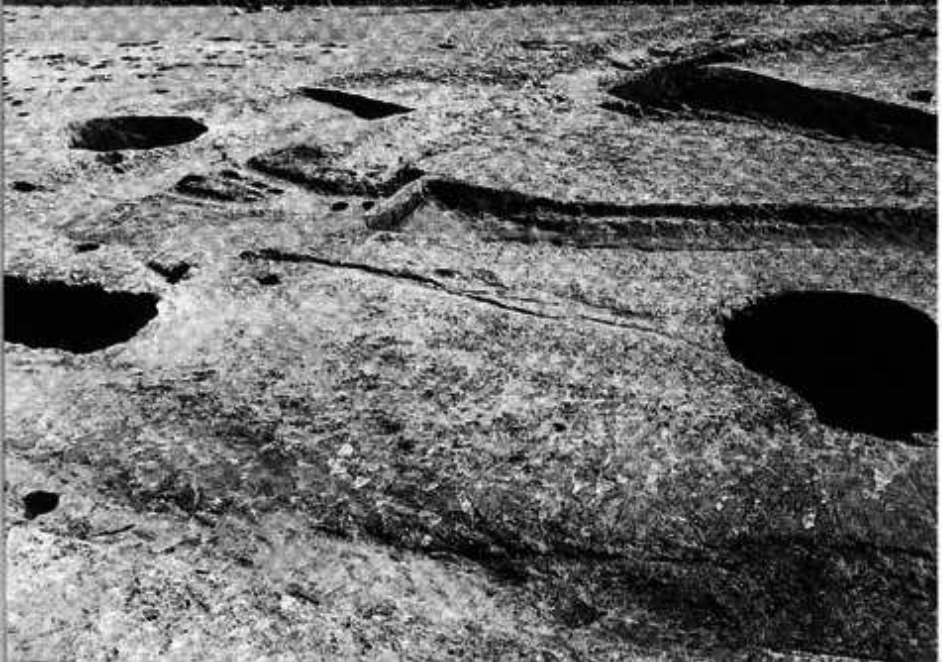
近景
16·19～22号溝跡

近景
1·16·18号溝跡

近景
1号溝跡
6号掘立柱建物跡
4～10·12号地下式坑
68～73号土坑

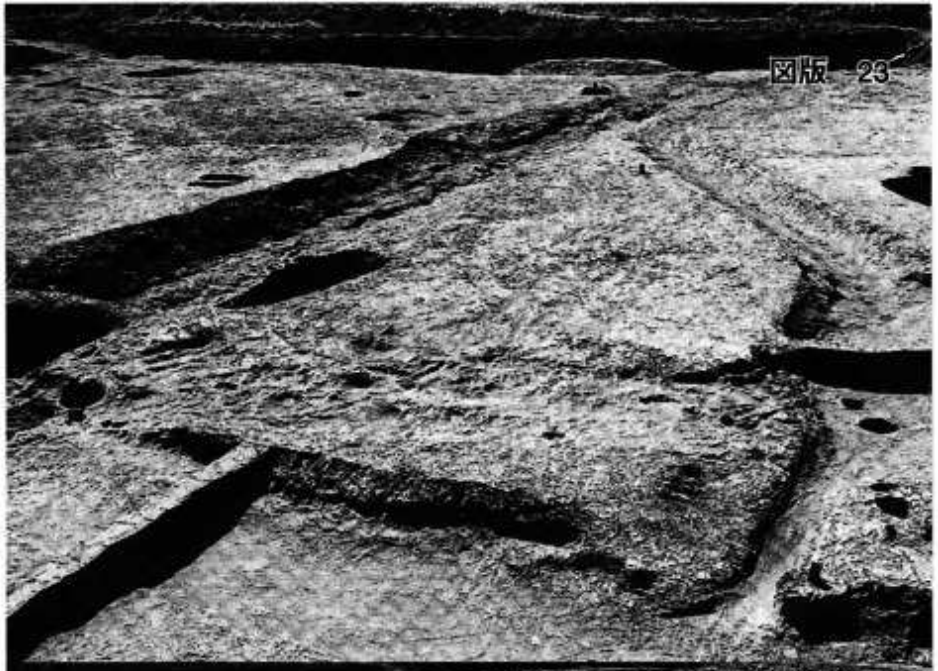


近景
1号溝跡
68～73号土坑



近景
2～7・9号溝跡

近景
9～11号掘立柱建物跡
1・2・11号地下式坑
4・5・7・9号溝跡

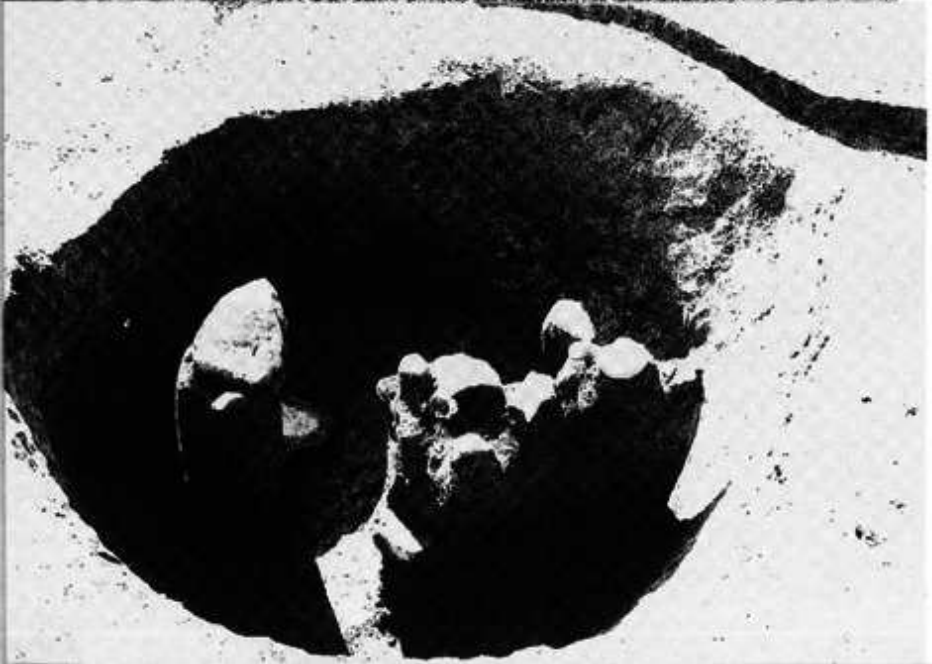


近景
4・7号溝跡

近景
11号掘立柱建物
4・5号溝跡
1・2号地下式坑

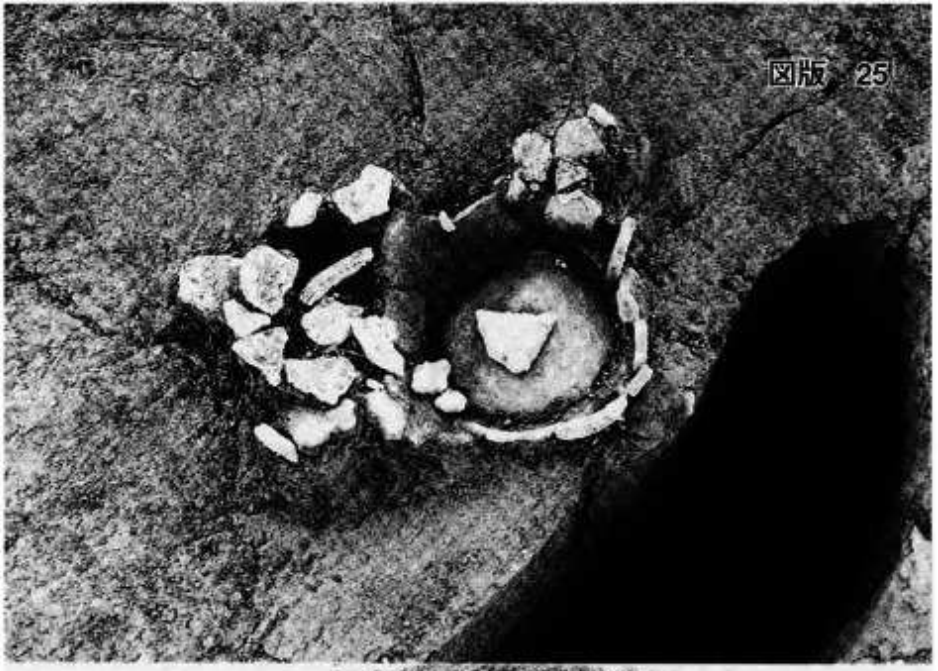
近景
6・7号溝跡
7・8号掘立柱建物跡

西区　近景



1～4号トレンチ

9号土坑
遺物出土状況



19号土坑遺物
出土状況

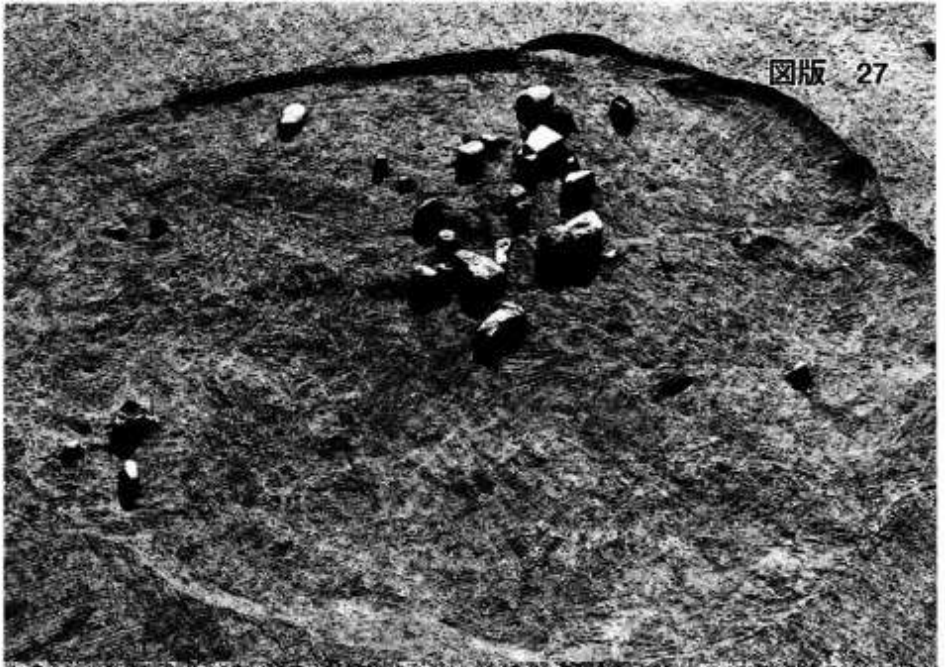
22号土坑

1号集石

近景
東区

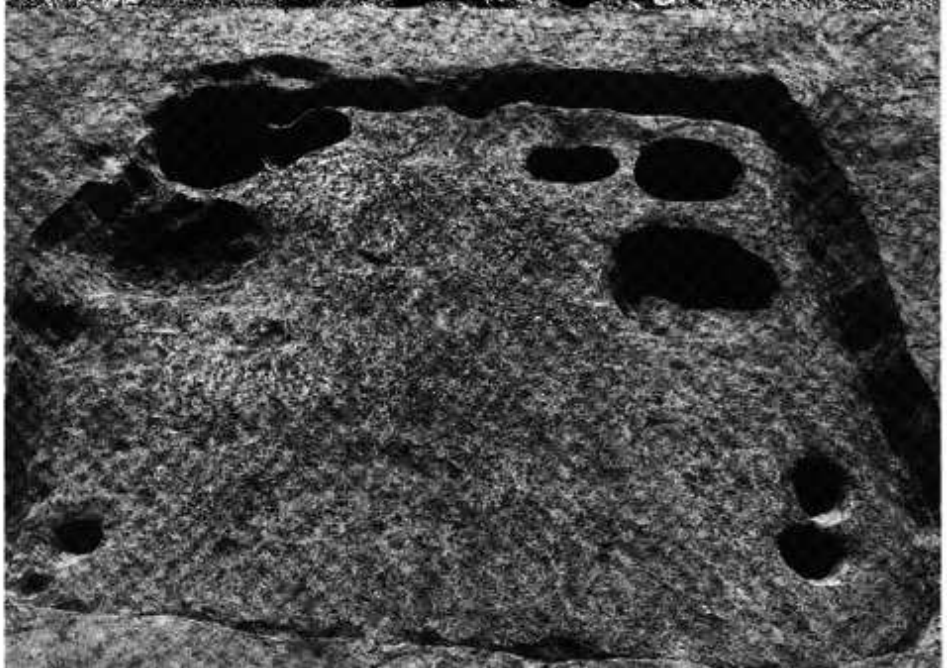
6～8号トレンチ

1号住居跡



1号住居跡
遺物出土状況

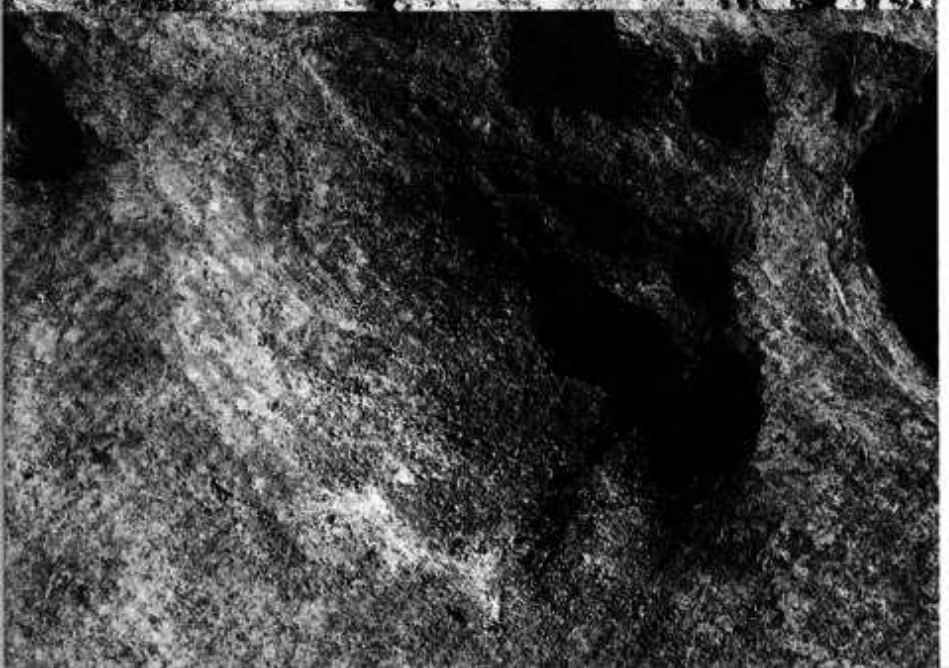
1号住居跡　炉



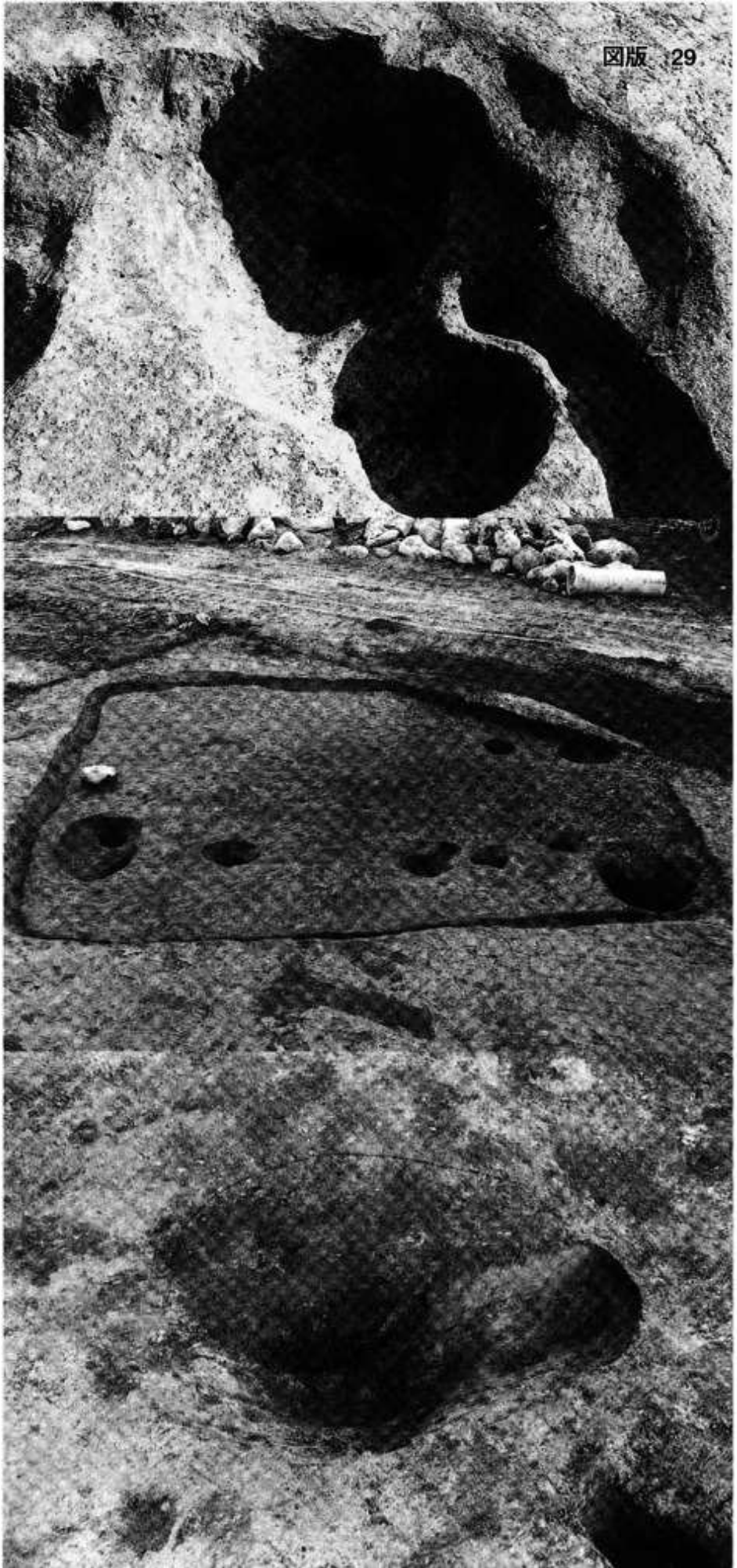
2号住居跡

2号住居跡
遺物出土状況

2号住居跡　カマド
遺物出土状況



2号住居跡　カマド
完掘

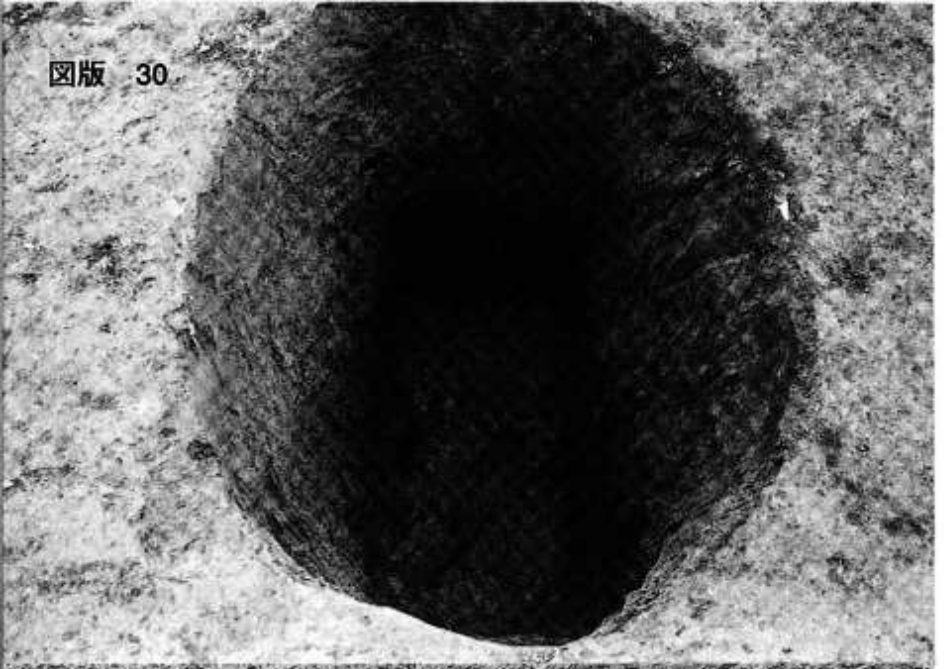


2号住居跡　カマド
完掘状況

3号住居跡

3号住居跡
ピット2
断面

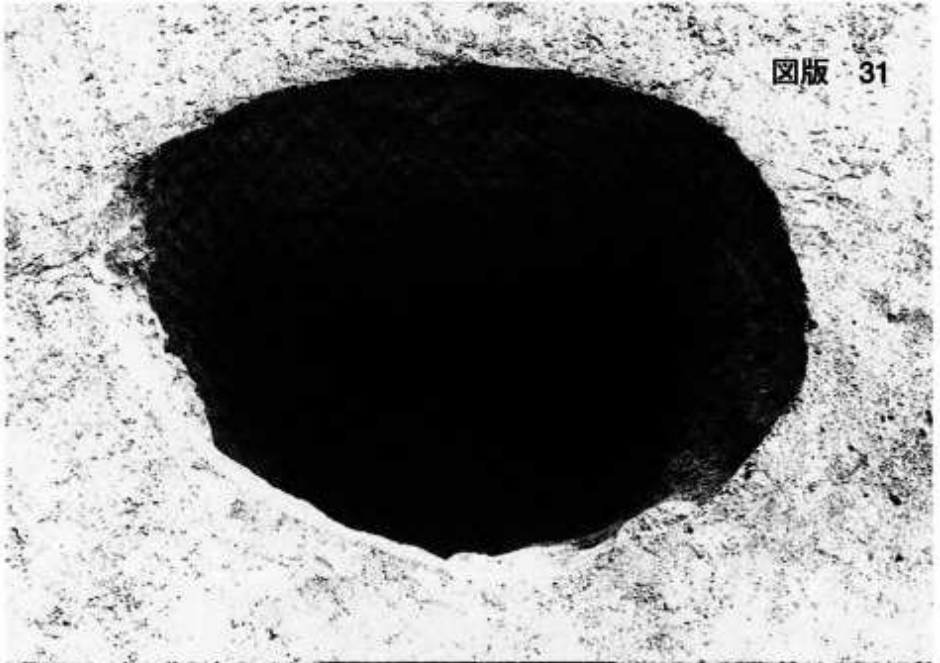
図版 30



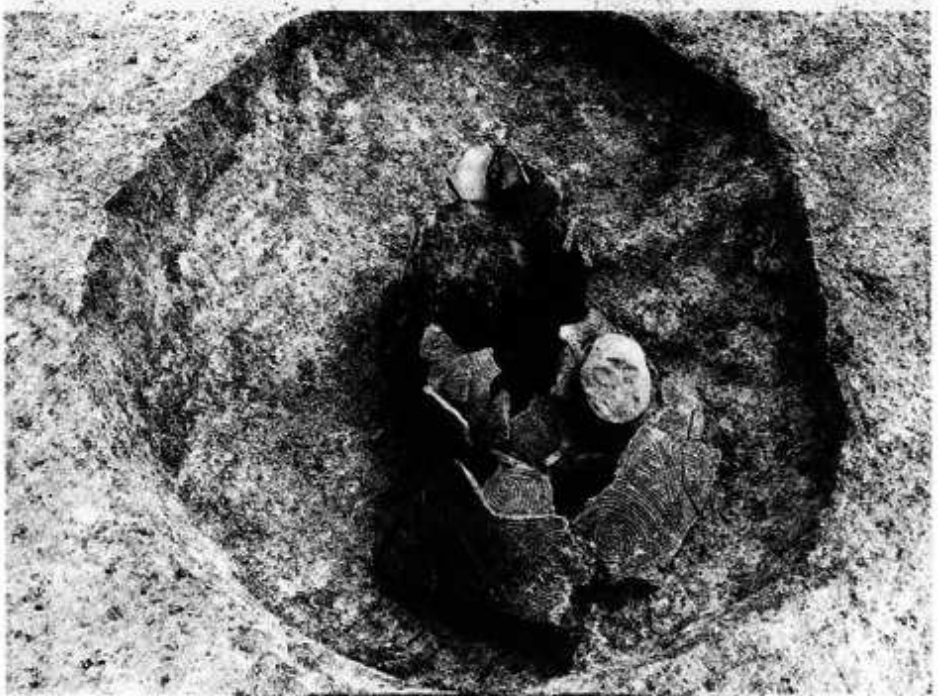
28号土坑

48号土坑
遺物出土状況

48号土坑
遺物出土状況

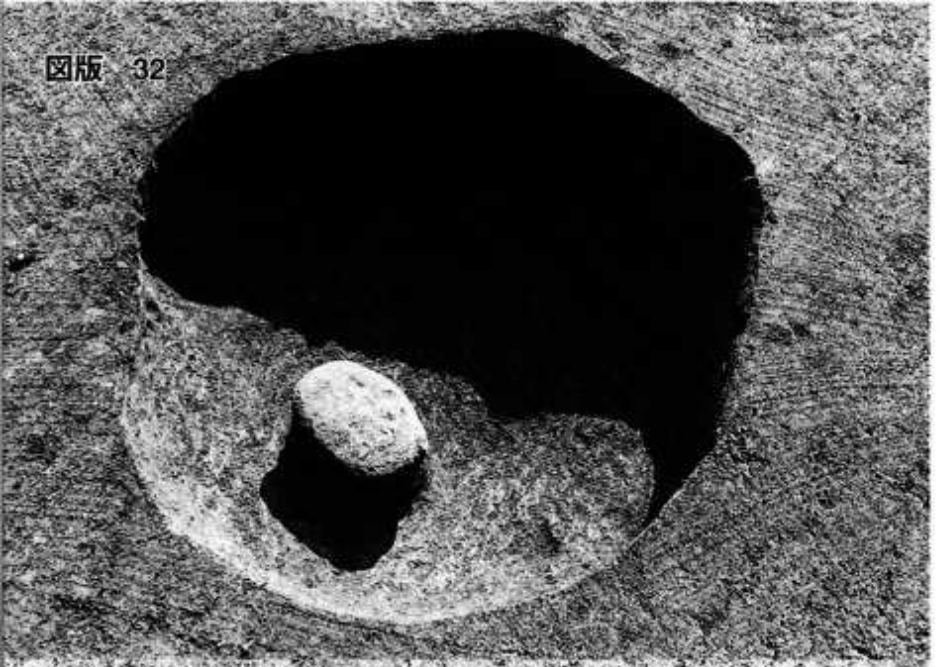


56号土坑



60号土坑
遺物出土状況

60号土坑
遺物出土状況



74号土坑

79号土坑

81号土坑

報 告 書 抄 録

ふりがな		やとしやかたあと・かぶつっぱらいせきだい５ちてん			
書　名		谷戸氏館跡・甲ッ原遺跡第５地点			
副　題					
シリーズ		大泉村埋蔵文化財調査報告書			
著者名		伊藤　公明			
発行者		大泉村教育委員会			
編集機関		大泉村教育委員会			
所在地		〒409-1502　山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025　Tel. 0551-38-3115			
印刷所		合資会社　ヨネヤ印刷			
発行日		平成７年３月31日			
遺跡名		谷戸氏館跡		甲ッ原遺跡第５地点	
概要	所在地	山梨県北巨摩郡大泉村谷戸1107他		山梨県北巨摩郡大泉村西井出9167－20他	
	1/25,000地図名・位置・標高	谷戸	北緯35°51′38″ 東経138°22′38″ 標高822m	谷戸	北緯35°50′52″ 東経138°23′42″ 標高761m
	調査面積・期間	6,648㎡　平成５年６月７日～11月１日		3,067㎡　平成５年９月２日～12月３日	
	主な時代	縄文時代中期・平安時代・中世・近世		縄文時代前～中期・平安時代	
	主な遺構	中世水路・空堀・地下式坑　近世掘立柱建物		住居跡・土坑	
	主な遺物	縄文土器・中近世陶磁器　石製品		縄文土器・石器	
	特記事項				

谷戸氏館跡・甲ッ原遺跡第５地点
―遺構編―
県営圃場整備工事に伴う発掘調査報告書

平成７年３月31H発行

編集発行　大泉村教育委員会
印　　刷　合資会社　ヨネヤ印刷

765.00
764.50
764.00
763.50
763.00
761.50
761.00
760.50
760.00
759.50
10
F — G
9
8
C — D
7
3
C — D
2
2
A — B
0
10m